

ないのである。天と人とを假りに分けて、天界の王が大王で人間の王を小王といふのである。其の人間の小王に身を現はして得度すべき場合には、即ち小王の身を現はして、其の爲めに説法する。今日は此處までにして置きます。

第十二回

應以長者身得度者。即現長者身而爲説法應以居士身得度者。即現居士身而爲説法應以宰官身得度者。即現宰官身而爲説法應以婆羅門身得度者。即現婆羅門身而爲説法應以比丘比丘尼優婆塞優婆夷身而爲説法。

和訓 應に長者身を以て得度すべき者には、即ち長者身を現じて而も爲めに説法す。應に居士身を以て得度すべき者には、即ち居士身を現じて而も爲めに説法す。應に宰官身を以て得度すべき者には、即ち宰官身を現じて而も爲めに説法す。應に婆羅門身を以て得度すべき者には、即ち婆羅門身を現じて而も爲めに説法す。應に比丘比丘尼優婆塞優婆夷身を以て得度すべき者は、即ち比丘比丘尼優婆塞優婆夷身を現じて而も爲めに説法す。

——今日は、「長者身を以て得度すべき者には、即ち長者身を現じて而も爲めに説法す」といふ所から説き起すのでありますが、毎々申上げる通り、常に觀音經を讀誦するには、我れ自身が矢張り觀世音菩薩の化身であるといふ觀念を、始終有つて居なければならぬ。是れは敢て觀音經を讀む時許りに限つた事ではないけれども、そういう風に讀むとそれが直さに一つの自分の修養の根本となる。既に度々申上げた如く、觀世音菩薩といふのは、慈悲といふものと、智慧といふものと、勇猛心といふものとの、現はれである。つまり觀世音菩薩は一身であるけれども、其の一身を三通りに分けて見ると慈悲と智慧と勇猛心——世間の言葉でいふと、智仁勇といふても宜い。それであるから、其向ふ所はどこもかしこも觀音の淨土ならざる所はなく。何人と雖も皆な觀音の現はれでない者はない。それで今若し長者の身を以て得度すべきものと、斯う見たならば、即ちに長者の身を現はして、而して爲めに説法する。長者といふことは、日本では何か財産でも多分に有つて居る人、それが長者であるやうに、通俗一般に言ひ做して居るけれども、併し鏡がある許りでは、決して長者とは云へない。長者といふものにはそれ／＼資格が要る。印度では斯ういふて居る、長者に十の徳といふものがある。それは一寸言ふて見ると、一には性貴、二には位高、三には大富、四には威猛、五には智深、六には年者、七には行淨、八には禮備、九には上歎、十には下歸、大體斯ういふ工合に徳を備へなければ長者とは云へない。そこで第一の性貴といふのは、凡そ長者たるものは、先づ斯ういふ人格が一つ備つて

居らなければならぬ。それは性質の洵に貴い所のものが無ければならぬ。性質が賤しい者では、長者と云はれる所の資格が缺けて居る。布衎していふと、中々時間が多く掛るから、字義だけをいふ。第二の位高、これももう位といふても、位には色々あつて、人爵もあれば天爵もあるが、今は其の人爵をいふので、矢張り世間でいふ所の位である。位の尊いものでなければ、人が尊敬致さない所から位の高いことを要する。三には大富、これは讀んで字の通りである。富の力でなければ仕事が出来ない。これは一個人に於ても、一家に於ても、又一國に於ても固より其の通りで、如何に兵許りが強くても、國が富んで居なければ致方が無い。富といふことは、何れの時でも大切である。第四は威猛、矢張り一つの威猛といふものがなければならぬ。人が是れに對して畏れ慚しむだけの威光を備へて居なければならぬ。さういふ徳が必要である。第五は智深、勇氣が勝つて居つても、智慧が乏しいければ、長者の資格が缺けて居る。今もいふた通り、威猛の徳を有つて居つて、同時に一面には、此の智といふものを備へて居なければならぬ。極く根の深い智慧がなければならぬ。六には年耆、つまり年高しといふも同じである。何事も龜の甲より年の功で、實際さうである。若い時には元氣があり勇氣があるといふても、練れて居ない所があつて、事を損じ易い。老人は中々貴むべきものである。尤も餘り年を澤山取つてはいけないけれども、經驗を積んで行くには、什うしても年を重ねなければならぬ。それで年耆といふことが長者の一つの徳になつて居る。七には行淨、假令今まで算へて來たやうな徳が

備つて居つても、其の人の日常行ふ所が淨くなければならぬ。八には禮備、矢張り總ての上に禮儀作法といふものを具備して居なければならぬ。第九には上歎、其の人格に對して、其人よりも上に位して居るものが歎美する位の人でなければならぬ。君臣の間柄もさうである。君たる人が常に歎美する位の徳を備へて居なければ、立派な臣ではない。十には下歸、上から褒められる許りてなく、自分の目下も常に其の人に歸服して、其の人を尊敬し其の人を慕ふだけの徳を有つて居なければならぬ。以上十通りの徳を備へて居なければ、長者とは云はれない。單に財産があり金錢だけを持つて居るだけでは、長者といふことは出来ない。世間の實際を見ると身に於ける長者と心に於ける長者とがある、以上十徳を有つて居るものは心の上の長者でもあり又身の上の長者でもあるが世間のは身柄は富んで居つても、心の貧しい人が澤山ある。何方かといふと、多く金錢があり財産のある人は、他の一面即ち心の方面から眺めて見ると、却つて心の上には貧しくて餒えて居る、道徳に餒へ宗教心に凍へて居る人が多い、針の耳の穴の中を駱駝に乗通る、——財産家といふものには、多くの場合に於てさういふ様なのが澤山ある。小さな針の耳の穴を通ることは出来る譯のものではない、それと同じ事だ錢許りを有つて居るやからで、心に信仰も無く道徳も無いもので、殆んど度すべからざるものがある。言はゞ援けのない憫れなものであるといふ意味であると思ふ。さういふ意味で、佛教では有財餓鬼といふことをいふて居る。財産は澤山有つて居るけれども、其の心は餓鬼の如く餓え凍へて居ると

いふのである。現在我々が僅かに知り居る人の中にもそういう風の者があつて、身は富んで居り、家は立派に飾つて居つて、衣服飲食に贅を盡し、一見他人からは美まるゝ身分の人の様に見えるけれども、内容に立ち入つて見ると、随分酷ひがある。丸で廉耻も道徳も缺けて居るといふて宜い。まして況んや真面目な宗教的信仰とか、最も高い所の精神的生活の意義とかいふことは、殆んど度外に附して、初めからさういふことを自覺しないものが、尠ならずあるのである。どつちかといふと、心に於て富んで居る人は、身に於て貧しく身に於て富んで居る人は、心に於て貧しいと云ふのが能くある例で、身に於て富んで居る人は、心に於ても富んで居る人は、中に世間に得難いのである。例へば釋迦始めさうである。成程生れは兎に角も、儼然たる一王國の太子として生れたけれども、其の位置を弊履の如くに棄て、身を乞食の境遇に下して仕舞つた。其の點から見ると、殆んど一個の乞食であるが、併しながら、其の佛となつて世に現はれた上からいふと、今此の法藏を世人に與へる——佛は世間に向つて精神的の倉庫を與へる爲めに、我は茲に現はれたのであると云ふて居る。即ち釋迦は精神的財産を第一番に求めたのであらうと思ふ。此の點からいふと、矢張り釋迦は身に於て貧しいが、心に於て富んで居る。孔子もさうである。身に於て貧しい人であるが、其の代り心に於て富んで居つた人である。斯ういふ工合の人は、まだ其の他にも澤山ある。例へばソクラテスもさうである。ソクラテスは最も身に於て貧しい人である。併し心に於ては是れも甚だ富んだ人であつた。故に何れも

千年二千年三千年近く迄、其財産を多くの人に分ち、而して盡るといふ事はないのである、今世界の人口を假りに十五億と定めて置いて、其内に佛教の信徒といふものが、約五億即ち三分の一を占めて居るといふて宜い。言ひ換へれば世界の宗教中最大多数の信者を有つて居るものは佛教である。是れは公平な調べ方であると思ふ。斯ういふことを精神的に眺めて見ると、佛は財産家であるといふて宜い。世間の有形的即ち物質的の財産は、一代にして無くなることもある。一代に作り上げて一代に無くする人もある。折角親が辛苦艱難して作り上げた財産を、子が無茶苦茶に使ひ荒らして、三代目にはやがて傾いて仕舞ふといふ、さういふ例は澤山ある。賣家と唐様に書く三代目、今は唐様よりも横文字の方が澤山あるけれども、三代目には家倉までも賣つて仕舞ふ、唐様に書く三代目と川柳にあるやうなものである。此の有形的物質的の財産は、盗まうと思へば直ちに盜賊の爲めにも盗まれる。又火に逢へば焼かれて仕舞ひ、水に遭ふては流されて仕舞ふ、けれども精神的財産は、所謂火も焼くこと能はず水も漂はすこと能はず、誰も盗み取り持ち去るものが無い。我々は今少くとも自分を修めようとして、取り掛つて居る仕事といふものは、お互ひに精神上の財産を作り上げようといふ、此の點に心を注いで居るのである。併しながら、心々といふても、身に於て富んで居る人も亦、實は尊敬すべき人である。孔子も孟子も、君子は財を愛す、けれども之を取るに道ありと云ふて居る。身に於て財産が無ければならぬ。家に於ても財産が無ければならぬ。國に於ても財産が無ければならぬ、けれ

ども、獨り唯身に於てのみ物質的に富んで居つても、一面精神的に貧しい人は、實は憐れむべき人である。處が觀世音菩薩は、長者のやうな人になりたいと思ふ人には、即座に長者の身を現はして説法をする。そんな早變りが出るものか、芝居ならば一人の役者が十人に早變りも出来るけれども、觀音にはそれが出来ない。我々が考へて居る所の方法では出来ないといふ人があるかも知れぬ。けれども菩薩方には、即座に身を變へる意生身——其の心が其の儘に形となつて現はれることが出来るのである。それを見ると見ないとは、眼の明いた人と眼の明かない人によつて、見へる人もあれば見へない人もある。さういふ意生身といふものが菩薩方にある。單に我々に見へない聞こへないといふことを標準にして、判断することは出来ないのである。

長者といふと、直ちに連想されるのは須達長者である。印度では長者といふと、必ず此の須達長者が引合ひに出る。色々有難い話があるが、其の中に一つ斯ういふことがある。須達長者が舍利弗——これは佛の十大弟子の一人であるが、其の舍利弗と相談して、段々此の通り法が盛んになつて來ては、一つの道場が入り用である。仕うか好い場所を選定して、大きな寺を拵へたいといふので、色々彼處此處と調べて見ると、祇陀太子の有つて居る屋敷が一番好い。高燥でもあれば清潔でもあり、空氣の流通も宜い、何もかも完備して居ると、いふので。祇陀太子に其の由を申込んだ、祇陀太子は何も寺などを建てる爲めに、大切な屋敷を他人に譲る者はない。けれども、舍利弗と須達長者が、度びく

申込んで蒼蠅いから、斯うもいふたなら二度とは來まいといふので、愛想盡かしをいふて見た。それは相談によつては譲られないこともないが、此の廣い屋敷に黄金を一ぱい敷詰めたならば、お望み通り譲つて上げませうといふた。是れでは向ふが大方斷念するであらうと思つたが、須達長者は熱烈なる信心を有つて居るから、「此の屋敷に黄金を敷詰める位で、お譲り下さるならばいと易い、私の財産を傾けても構はない、仕うかお譲りを願ひたい」と喜んで答へた。それに對して、祇陀太子は實は今まで佛に信仰心を有つて居なかつたが、大に心を動かした。道の爲めには斯くまで財産を抛つて、惜しいとも思はない。斯ういふ堅固な信心が起るものであるかと、遂に須達長者に感化せられて、一點の菩提心を生じた。「それならば約束として、黄金を敷き詰めたなら地所を賣らうが、同時に此の地所に生えて居る樹木は、自分のものであるから、此の樹木だけ私に寄附させて呉れ、喜んで佛に献上したい」といふた。此の二人の志が相待つて、而して出來上つたのが祇園精舎である。それを敷金精舎といふ因縁はそれから出たのである。昔の長者はさういふものであつて、唯だ身に於て富んで居つたのみならず、心に於ても大に富んで居つたのである。日本にも古來から、さういふ實例は澤山あらうが、今長くなるから申上げない、又歐米を尋ねて見ても、さういふ例は澤山ある。身に於ても富み、又心に於ても富んで居る人がある。其の證據には、亞米利加では、各州に三個若くは四個位づゝ、兎も角も大學コレツヂといふやうなものがあつて、全國ではそれが三四百もあらうけれども、聞いて見

ると、大抵は未亡人の財囊から出来たものであるとか、或は一個人たる長者の喜捨によつて出来上つたものとか、それが多い、大抵は人民の私立である。中には州立の大學もあるけれども、多数は有志者の財囊から出来たものである。大學許りではない。其の他の學校並びに寺もさうである。小さな町又は村などで、一番先きに眼に着くものは立派な寺と立派な學校である。それが所謂十徳を全く備へなくても、幾らか備へて居る人々の、淨き志を以て出来たのが多い。日本も今日段々さういふ傾向になつて来たやうに見えるけれども歐米に較べると、まだ一比較にならない。昔の日本の寺は、各宗の坊さんが多くはさういふ志があつて、それで出来上つて居るのである。今觀世音菩薩が、長者の身を以て得度すべきものには、即ち長者の身を現して而も爲めに説法すると斯ういふ。

「應さに居士身を以て得度すべきものには、即ち居士身を現して而も爲めに説法す。」此の居士といふものゝ徳も、算へて見ると四つ程ある。其の四つを一々擧げると、仕官を求めないといふのが一つ、(官途に就かないといふことである)。それから寡欲にして徳を蓋むといふのが一つ、(欲を寡くすると同時に、徳を包み隠して居る、好いことを人目に現はさないといふことである)。それから財に居して大に富むといふのが一つ、(大金持になつて居るといふことである)。それから道を守つて自ら悟るといふのが一つ、(道を守つて悟りを開くといふことである)。此の四つである。是れだけでは盡さないけれども、昔から算へて居士の四徳といふて居る。併し今の世の中には、居士が中々多い。嘗に禪道を信ずる人

許りてなく、自稱的居士が澤山ある。色々の居士がある。中には風流を氣取つて、何々居士と自ら世の中から飛び離れて、さういふ風に自ら居士と稱して居るものがある、悪いことではないが、本來の意味から云へば、居士といふ以上は、少なくとも以上の四つの徳を有つて居なければならぬ。物といふものは、末になると間違ひが起る、色々誤傳することがある。今では亡者に法號、信士號、居士號、大姉號などを無暗矢鱈に呉れる。甚しいのは、何處か田舎の寺に行つた時に、目錄が張り出されて居つて、金十圓居士料、金五圓信士料など、書かれてあつた。丸で商賣的に取扱はれて居る。賣り物買ひ物である。世の中が總て十露盤勘定であるから、さうしなげねばならないのであるか知らないけれども、實は居士といふものは容易のものではない。自ら居士を稱する以上は、少くともそれだけ完備する所がなければならぬ。印度では維摩居士といふのが、居士の親方である。其の他大勢ある。支那の方でも、是れ亦大變に居士がある。唐朝では龐居士、これは全く優れた人である。其の他また色々ある。宋朝では、時の學者、縉紳、士大夫、名のある人は大抵居士を以て自ら任じ、人も亦居士を以て呼んで居る。蘇東坡。黃山谷といふやうな人も、皆な居士である。居士傳を讀んで見ると、偉い人が澤山ある。けれども、此れ等の居士は、元を正して見ると大抵最初は佛敎を知らない人である。禪宗の何たるをも知らない人である。中には無佛論を著した人もある。其の他佛敎に反對であつた人が甚だ多い。それが段々眞面目に世の中を研究して見ると、普通の學問や理窟、文藝などで安んじて居

られない。そこで精神的解決をつけようといふので、道に這入つた人である。東坡居士は最初棲霞山に皓禪師を尋ねて来て、大變大きな顔をして居た。皓禪師は始めて逢つたので、君の姓名は何といふと聞いた。東坡の姓は蘇であるが、皓禪師を馬鹿にして掛つて、姓は秤なりと答へた。私の姓は秤である。東坡は王とか張とか李とかいふ姓は澤山あるが秤といふ姓は一寸見當らない。處か東坡は自分の姓が蘇であるに拘はらず、姓は秤なりと答へた。妙な苗字をつけたものである、秤は物の重いか軽いかを計る道具である、全體そんな姓をつけて、何を計る積りであるかと聞いたら、東坡は呑んで掛つて、天下の長老の輕重を計る積りである。智識とか禪師とか坊さんも大勢あるが、其の者共の値打ちの重いか軽いかを計る。人間を目方に掛けて計る、就中禪僧の目方を計る積りであると答へた。すると皓禪師が突然一喝を下して、「且く道へ這の一喝の重さ多少ぞ、さア計つて見い。此喝は重いか軽いか、どうぢやと云はれて流石の東坡居士も始めは脱兎の如く後は處女の如しで。ぐつと詮つて、此所で大に感悟する所があつて、それから大に驕慢の心を去つて、今度は眞面目に禪の修行を始めたのである。だから居士といふても、色々種類は澤山あつて、中々輕卒に考ふべきものではない、偶々一點半句領得したとて、それで大居士と稱することは出来ない。佛法は大海の如く轉入は轉深しである。今觀世音菩薩は、應さに居士身を以て得度すべきものには、即ち居士身を現して而も爲めに說法するといふ。說法といふものは、講談や法話許りが說法でない。大工や鍛冶屋がてん

くからく仕事に勵むのも說法である。左官が壁を塗り土を捏ねるのも、即ちそれが說法である。菩薩は皆な活說法である。兵隊になつたら、暑いに拘はらず汗を絞つて操練をするのも、說法の一つである。今居士身を以て得度して宜い時には、即ち居士身を現はして說法する、斯ういふのである。「應さに宰官身を以て得度すべきものには、即ち宰官身を現して而も爲めに說法す」。宰官身といふは文武百僚をいふのである。日本でも文官武官又は廟堂の大臣も、部屬してそれく司さがある。大なる宰官もあれば小なる宰官もある、平たく云へば宰官とは役人をいふのである。役人の爲めには役人の身を現はして其の爲めに說法する。斯ういふ有様である。日本では特に觀音の因縁が多い。遠い昔には聖徳太子、菅原道真公、又武將としては阪上田村麿、楠正成公といふやうに文官にも武官にも觀音の信仰者が多い。昔から今日まで英雄豪傑とも云はれて、名を揚げ功を樹て、高き位に昇り、多くの人に尊ばれたのは、穴勝一時の權勢を恣にせんが爲めに、觀音を方便として信じたのではない。皆な敬虔なる信仰、熱烈なる一つの宗教心を有つて居つて、進んで悟りを開いた人に多いのである。さういふ例をお話すれば、色々澤山あるけれども、近い過去に於ては、三百年泰平の基を開いた徳川家康の如きも、亦さうである。あの人は佛法を利用したのであらうといふ人もあるが、それは野心ある人からはさう見えるのである。家康は外には野心があつたけれども、宗教に就ては野心も何も無い。最も敬虔なる信者であつたやうに思ふ。戦さ最中にも、一萬遍も南無阿彌陀佛の名號を唱へたといふ

ことである。天台淨土何れにも信仰が厚かつたが、就中淨土宗には深く歸依して、念佛を唱へたのである。加藤清正の如きも、南無妙法蓮華經の七字を旗號として、朝鮮までも征伐に出掛けたのである。其の他の諸大名にも、禪に於て悟道して居つた人が澤山ある。武田信玄でも上杉謙信でも皆なさうである。一として無信者無信仰の人で唯だ一時的の勢ひとか勇氣とかを以て、進退したものではない、極く眞面目な、うぶな信仰を有つた人々であつたのである、又歐米の大政治家でも大軍人でも、大抵其の傳記を讀んで見ると、其の信仰の深いことが書いてある。どれでも生涯熱烈なる信仰を維持したものである。獨逸のビスマルク、英吉利のグラッドストーンなどは、皆なそれである。ビスマルクが大に獨逸の爲めに奮闘した當時、どんな劇務に當つても退屈しない。人が貴君のやうにさう多方面に働きづめでは、身體が續きますまいといふと、「忙がしいことは忙がしいに相違無いけれども、我々は未來の信仰を有つて居るから、どんな劇務に當つてもくたびれない、どんなことに出遇つても失望しない」と答へた。グラッドストーンもさうである。嘗て云はれたことに「我々は幸にして斯ういふ身分に居るけれども、眞逆の時には、何でも棄てる。身體でも棄てる。妻子でも棄てる。まして況んや財産地位などは、棄つべき時には潔きよく棄てる。唯だ如何なる場合にも棄てることの出来ないのは、宗教である、宗教の信仰だけは、私が什の位も脅迫されても、どんなに迫害されても、假令一國の國王が私を強めても、其の他何物が現はれて來ても、私から此の信仰を奪ひ取ることは出来ない。此の宗

教的信仰は、仕うしても私は棄てることが出来ない。さういふ者を、グラッドストーンは常に腹に有つて居つたのである。然るに表面から見れば、すばらしい立身で他人は皆驚嘆して美んで居るけれども、内容に這入つて見ると、氣の毒なものが廣い世間には澤山ある。今でも少くとも廟堂に立つて居る大臣方、それから元帥大將、文官武官總てさういふ人々には、必ずや何か信仰する所があるであらうと思ふのであるが、又必ず無ければならぬ筈であるが、特に文部當局者の如きは、直接に教育宗教の事務を掌つて居るものであるから、大に信ずる所があつて下さらないと、論達でも訓示でも、一向人を感化するだけの權威はあるまいと思ふ。今觀世音菩薩は、宰官の身を以て得度すべきものには、即ち宰官の身を現して説法すると斯ういふ。役人たるものが、我は役人として觀音の現はれである。さういふ信仰を有つて居つたならば、又軍人が、我は觀音の現はれであるといふ、さういふ自信があつたならば、其の他文武百官皆なさういふ考であつたならば、仕うであらう。更に勳章よりも位階よりも、一段と權威があり、言ふことも随つて權威を持ち、感化力も著しいものがあらうと思ふ。「應さに婆羅門身を以て得度すべきものには、即ち婆羅門身を現して而も爲めに説法する」婆羅門といふことは、俗に我が佛教者などでは、横着物といふやうな意味に云ふが、それは間違つて居る。婆羅門といふものは、中々天竺では偉らしいものである。天竺には四姓といふて——英國人がさういふ風に稱して居る。其の四姓といふのは、婆羅門、刹帝利、毘舍、首陀、と斯ういふ。發音は色々ある

が、昔から我國に言ひつけて居るのは是れである。大體其の四姓であるが、分けるならば、大變の數になる。此の氏素性が向ふては八釜しく言はれて居る。姓が違つては、婚嫁慶弔も互にしないといふ理窟である。私は現に目撃したのであるが、決して同座もしない、一所に飯も食はない。茶も飲まない。まして況んや結婚するとか、親類關係を結ぶことなどは決して無い。此の婆羅門、刹帝利、毘舍、首陀の四姓は、日本の士農工商の區別と、一寸似て居る所がある。其の中で一番素性の良いものは婆羅門である。何故かといふと、婆羅門は殆んど半神半人の種族である。半ばは神に近く、半ばは人間であると思はれて居るからである。或る書物には其の中に色々のことが書いてあるが、婆羅門神は印度を産んだ神だとして書いてある。今當り前ならば、母親が子を産むのであるが、其のやうに印度の國を、婆羅門神が産んだとして書いてある。婆羅門神は一つであるけれども、働きからいふと、三つに分けてある。始終印度の風は三方面に分ける。婆羅門は世界の創造主である。それから毘舍といふのは、これは建設の神である。又保護の神である。それから首陀は破壊の神である。物を壊す方である。一方は建てる、一方は壊はす。而して婆羅門は産む。斯ういふ風に三通りの神を拵へて居る。産む、保護する、時によつては壊はす、色々であるが、兎に角も婆羅門神は、印度唯一の神である。二つとない神である。それが神話に傳はつて居るのによると、大きい身體を有つて居つて、四姓を産んだといふのである。即ち婆羅門に屬して居るものは、其の口から産れて來た。落語家などは能く口から産れたと

云はれるが、此の神も肉體を備へて居つて、其の口から産れたのが婆羅門である。其の次に刹帝利これは此方て言へば、華族、士族といふやうなものである。さういふものは何處から生れたかといふとこれは臍から生れたとしてある。それから毘舍は何處から生れたかといふと、これは脇の下から生れた。それから首陀は餘程低いものとして、これは足の尖きから生れた、さう説いてある。身體の局部から生れて、上に位したものと區別する。さういふ幼稚な考が土臺になつて、高い地位の口から生れたものは、氏素性が最も貴いし、低い足の尖きから生れたものは、氏素性が賤しいものであるといふやうな、洵にお伽噺見たやうなものであるが、さういふ所から四姓の區別が出來上つて來たのである。故に印度では、婆羅門の貴い生れから、學者も澤山出れば、宗教のことに最も深い人が多い。佛の大なる弟子で、元は婆羅門から出た人がある。其の實は、佛も婆羅門に這つて、教育を受け教えを受けて居る。後に佛法を自ら建立せられたのであるけれども、最初は婆羅門に這入つたのである。此の姓の區別の爲めに、非常に印度の文明が妨げられて、一時は世界に印度の文明が光被したに拘はらず、段々人材を登庸するとか、人物を用ふるとかいふことに對して、此の區別が大變妨げを來すやうになつた。銘々小さい隠れ家を作つて、其處に閉ち籠つて仕舞つて交際もしない、同じ印度人でありながら、印度人を通じて平等の交際が出來ないといふ有様であつた。それが爲めに印度の文明が什れ程進歩を妨げられたか知れない。それを打ち破つたのが佛である。佛が一度び世の

中に現はれるや、此の四姓の打破を宣言せられた。其の旗幟に「四河海に入つて同一鹹味、四姓佛に歸すれば皆な釋氏と稱す。」斯うある。印度にはブラマプートラとかインダス、ヒンヅーとかいふやうに四つの大河があるが、其の河の水が流れて海に這入つて仕舞へば、皆な鹽の味する水となる。四姓も俗的世間ではさういふ別ちがあらうけれども、佛法の精神から見れば何もあつたものでない。四姓佛に歸すれば皆な釋氏と稱する。佛になつた以上、得度して仕舞つた以上、華族でも士族でも、さういふものゝ息子が坊さんになつて仕舞へば、農民の子でも商家の息子でも、又一度坊さんになつて仕舞へば、唯だ徳のある人智慧のある人、最も良き人を尊敬するのであつて、身分が高いとか低いとかといふことは毫も申して居らぬ。佛は國王の種族に生れたけれども、自ら出家せられて、さういふ宣言を實行された。それから佛法を弘めた許りでなく、それによつて、印度人民の或るものに桎梏せられてあつた手枷足枷を、皆なほどいて仕舞つたのである。日本でも王政維新の當時、畏くも先帝陛下が華土族平民悉く同一國民として、皆な朕が子である。皆な同胞親族であると仰せられたから、日本も明治維新以後は長足の進歩を遂げたのである。文明といふものは、全くさういふ所に基因して居るのであらう。佛のやり方がさうである。これは婆羅門のことを申上げた次に、附随した話をしたのである。毘舍、首陀、其の中には、百姓町人が籠つて居る。今若し婆羅門といふやうな、さういふ人々の爲めには、矢張り婆羅門的に身を現はさなければ、其の人々の心に叶はないから、斯うい

ふ人々を得度する時には、即座に婆羅門の身を現はして、而も爲めに説法する。——それから比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷身を以て云々」とあるが、此四つのは之を四衆とも、四部衆とも、又は四部の弟子とも云ひ、つまり一口に云へば比丘は坊さん、比丘尼は尼さん、優婆塞は信士、優婆夷は信女である。審に云へば比丘は素と梵語で漢譯すれば、之れに淨乞食、破煩惱、能持戒、能怖魔の四義を備ふるも普通は淨乞食の義を以て釋して居る。淨乞食といへるは、五邪命食をせぬ所から斯く云ふので、五邪とは一つには利養の爲めに故らに詐つて奇特の相を現すこと、二つには利養の爲めに故らに自からの功德を説くこと、三つには吉凶を占相して人の爲めに説法すること、四つには高聲を爲して威を現はし人をして畏敬せしむること、五つには得る所の供養を説きて以て人の心を動かすこととて、以上五邪によりて食を得るは佛勅に違反するが故に何れも邪命食と稱するのである。本來出家は上諸聖に法を乞ふて慧命を資け、下衆生に食を乞ふて胎養を資くるものである。從て之を乞士とも又は乞食とも云ふのであるが、同じ乞食といふても彼の零落して徒らに他人の憐みを乞ふ所謂乞食とは其選を異にし、以上陳述したる如く五邪命食はせぬといふのであるから、普通の乞食などは區別する爲めに淨乞食といふのである、それから破煩惱とは讀んで字の如く煩惱を破つて菩提を求むること、能持戒とは受戒して比丘戒を保つこと、能怖魔とは魔王眷族を怖れしむること、眞の比丘と云ふには右の四義を備ふることを要するを以て却々容易ならざるものである。次に比丘尼と云へるは比

丘に對して乞士女などと譯して居るが、結局出家したる女人のことで、尼さんである。佛は始めは女人は御濟度なさらなかつたのであるが、成道の後其姨母摩訶液闍波提の懇請によつて出家を許されたのが比丘尼の濫觴と成つて居る。つまり比丘尼といふ意味は只頭髮を剃りて僧形をして居る女人といふ丈けのとはなくして、出家した眞の佛弟子たる女のことである。それから優婆塞といふのはこれも梵語で、近事男又は近善男とも譯し優婆夷はそれに對して近事女、近善女などと譯するのである。つまり三寶とて佛法僧に親近する男女のことで受戒持法せる在家の佛弟子のことである。之を要するに四部又は四衆のことも詳細に講じて居ると際限のないことであるから今席では假りに之を坊さん、尼さん、信士、信女として置きます。其比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷身を以て得度すべき者には即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷身を現して而も爲めに説法す。斯ふ云ふ工合に觀音が三十二通りにも色々と身を現して、衆生の爲めに説法するのであります。時間が大分進みましたから今日は此處までに致して置きます。

第十三回

應以長者居士宰官婆羅門婦女身得度者。即現婦女身而爲説法應以童男童女身得度者。即現童男童女身而爲説法。

和訓 應さに長者、居士、宰官、婆羅門の婦女身を以て得度すべきものは、即ち婦女身を現して而も爲めに説法す。應さに童男、童女身を以て得度すべきものは、即ち童男、童女身を現して而も爲めに説法す。

講話 長者、居士、宰官、婆羅門の事は前回に一應お話をしたが、此度は其長者の女、居士の女、宰官の女、又は婆羅門の女といふ——此の女といふ字に、或人は妻女といふ小さな割註を入れて居るものもあるが、つまり長者の奥さん、居士の奥さん、宰官の奥さん、又は婆羅門の奥さんといふて宜しい。併しながら、唯だ人の妻たる女許りに限つた譯ではない。總て女人の爲めに女人の身を現して、而かも爲めに説法するといふのであつて、即ち三十二應身の内の一つである。所が仕方も私なども、何卒して佛の心の千萬分の一でも、それを我が心として、而して多くの人々を何とか善い方に導きたいと思つて居るけれども、男同士は大にやり宜い所もあるが、婦人の爲めに婦人の身を現して而も爲めに説法するといふことは中々六かしいのである。私は自分自身に始終研究しつゝあるが、例へば彼處此處に法話の爲め呼ばれて行くにも、又は近頃どの學校からでも、精神上の話をして呉れと云はるれば、男の學校でも女の學校でも喜んで行くのであるが、男と女とは、敢て甚だしく區別する譯ではないが、併し心理作用といふ點からいふと、男と女とは、天然自然に多少趣きの違つた所がある。同じく學校に行つてお話しするにしても、男の學校では話がしよくて、娘子の學校では話にくいやう

な氣かする。それは私自身がまだ足りない所があるので、將來益々身を磨かうと思つて居るが幾分其處には又呼吸の差がある様にも思はれる。佛の教へには、年寄つた人に逢つて、それが爺さんならば我父と思へ、婆さんであつたならば我母と思へ、少しでも自分より年取つた人は、兄の如く姉の如くに思へ、自分より若い人は、弟妹と思へ、幼稚の人は自分の子の如く思へと、それが佛の教であるけれども、中々形に於ては勿論さうであるが、心持ちに於ては違ふ所があつて、何か其處に多少滯ることがあるやうでいけない。さういふことの無いやうにしなければならぬ。之を宗旨の上からいふと是れは此の場で突然と話したのでは通じないかも知れぬが、禪に於ては多年骨折つたあけく力の出來た人に見せることになつて居る一つの公案がある。それは或所に信心堅固な婆さんがあつた。又一人の戒業も確かにして綿密に學問も出來、道にも能く達して居る有難い坊さんがあつた。其の坊さんを婆さんが長い間供養した。自分の屋敷の内に一棟の庵室を拵へて、それへ招待して、而して毎日一人の美しくい娘を坊さんに待らせて萬事の用を辨じさせた。言はゞ侍者のやうにしたのである。處が或日婆さんは娘を呼んで、斯ういふことをやつて見よと言附けた。それは仕ういふことかといふと其の坊さんの坐禪して居る所に行つて抱きつく。言はゞじつと身體と身體とを觸はつて置いて、而して斯ういふことを尋ねて見よ。正に此の如き時如何と、露骨に云ふならば、じつと抱き締めて、「サアとうだ」と尋ねて見よといふのである。そこで娘は教へられた通りやつた所が、其の坊さんは「枯木寒巖

に倚る、三冬暖氣無し」と答へた。今日は(大正四年)少し寒いが、是れから寒中の極く寒い時になる。と、木の葉も何も風に吹き落されて、皆木の如くになつて仕舞ふ。枯木とはそれをいふのである。寒巖とは寒い岩のことで、洵に聊かの暖味も無い水のやうな岩といふのである。其の上に枯れ木が一本立つて居る。是れが枯木寒巖に倚るといふことである。三冬暖氣無しといふのは、三冬とは冬の極く寒い時で、夏の極く暑い土用の中を三伏といふのに對して、寒い冬をいふのである。暖氣無しとはちつとも暖か味が無いといふので、文字だけは先づさうである。娘がずつと行つて坊さんに身を觸れて、「サアドウカ」と尋ねると、坊さんは「枯木が寒巖に倚つたやうであるちつとも暖か味が無い」と答へた。娘がそれを聞いて其通り婆さんに報告すると、婆さんは非常に怒つた。「此の養坊主め、私の見込みは違つて居つた。二十年餘りかゝる俗漢に供養したのが如何にも腹立たしい。アゝ汚ららしい。今日限りで逐出して仕舞へ」といふて、婆さんは非常に腹立たつて、遂に其の部屋までも、火を附けて焼き拂つて仕舞つたといふ話、是れが婆子庵を焼くの一則である。此境涯が分つたならば、始めて婦女身——女に出遇つては女の爲めに説法するといふことが出來やうと思ふのであるが、若し此境涯に到達せざるものにして、右の如き場合に出遇ふたならば又什んなことをしでかすかも知れない。危険千萬の事である。此處が六かしい所で御經の講釋を旨くやつたり、書物を澤山知つて居つたからといふて、只夫れ丈けでは道を得たといふものではない。禪宗では境涯が届いて居るか仕うかといふ事が最も肝腎

かなめの所で、それが實際問題として大切なことであらう。中々六かしい。さういふ問題に出遭つたならば、私も宗旨として出家だけに、さういふことも透徹し來て居るが、實際に於て六かしいものである。動もすると引つ着いて仕舞ふ。然らざれば離れて仕舞ふ。處が即かず離れず、研ぎ澄ましたる明鏡の如く美しくい物が來れば美しく寫し、又影が去つて仕舞へば、跡も形も残さないといふ境涯に至ると、心に何等の滞りもなく、身體が觸る觸らないなどは、抑も末の問題で、心の上でさり／＼と解決し去ることが出来るのである。

今日は婦人といふことに就いて、難駁なお話をするのであるが、女といふことに就いて、或書物に書いてある事を一寸お話しして見ましよう。これは印度の神話であるが、それによると昔し印度にトワシユトリといふ神様があつた。其の神様が世界を作つた。斯ういふことはどの教へにも一應はあるのであつて、耶蘇教にも神が世界を作つたといふて居る。その神が本當に作つたのであるか、其の議論は別であるが、印度ではトワシユトリといふ神様が作つたとしてある。そこで其の神様が世界を拵へ其舞臺の上に、今度は人間を拵へようと思つて、先づ男を作つた。男はすつかり拵へ上げたが、どうもそれだけでは物足りないといふ所から、次に女を拵へやうといふので、神様は大分工夫をせられた。所謂沈思熟慮せられた。所が女を作るには材料が入る。それにはどういふものが宜からうかと苦心慘憺せられた曉に、漸く寄せ集めた材料は下の如きものであると、神話に面白く書いてある。其の材料

として第一に使つたものは月の圓さで、これが一つの材料である。それは美しいものであるが、其次は蛇のうねりとある。私は山の中に住つて随分蛇を見掛けるが、私杯の目には嫌らしいやうに思ふけれども、それが好いとて、蛇のうねり、それから今度は木の枝の撓やさ、それから草の戦ぎ、蕨の纖弱さ——水際に生へて居る蘆で、極くひよ／＼したものの、それから花の觸り——ちら／＼した所の様子、それから葉の輕さと、牡鹿の睨み——妙な眼附をするもの。陽炎——寒い季節には無いが、一種の水蒸氣の作用で、夏の河原などに、太陽に照り附けられると、炎のやうに立ち上る氣である。それも一つの材料。それから雲の涙と風の浮氣と、兎の臆病——臆病なものは動物に多數あるが、兎は別して臆病である。それから孔雀の虚榮——美しい羽を擴げて、誇りげに見へる様で、それから雀の胸毛、柔らかなものである。成程猫の胸毛も柔らかなものであるが、雀の毛は別して柔かである。それからダイヤモンドの堅さ——若い婦人などは、ダイヤモンドの指環を嵌めて、ピカ／＼した所を好むものであるが、其のダイヤモンドの堅さと、それから蜜の甘さ、それから虎の殘酷と火の暖かさ、雪の冷さと、椋鳥の饒舌、それに今一つ鳩の鳴聲を加味して、それで女を作つたと面白く書いてある。斯くして女が出來ると神は之を男に與へた。處が男は最初大喜びで、今まで世界に絶へて女が無かつた所に神様の恩恵によつて始めて新しく女が出來たのであるから、非常に喜んだ。然るに一週間経たない内に、男は神の御前に女を戻しに來た。「初めは有難い、女をお授け下さつてお禮の申し

様もない位に有難いと存じて居りましたが、何分お喋舌で仕様がな。非常に不快であるから、謹んでお返しをする」といふて來た。さうすると、又一週間経つか経たない内に、男が神様にお願ひに來た「私一人で寂しいから、此の間御返上申した女をお返し下さい」。さういふお願ひをした。すると神様は、度量が廣いから、女が居ないと寂しいものと見へると、御察しありて願ひ通り返してやつた。處が僅か三日程すると又返しに來た。其處で神様は、「どうもお前は我儘勝手で困る。お前のやうな我儘勝手のものには折角の願ひだが、モウ取り上げる譯には行かない」と、大に怒つた。男は非常に情氣返つて、「私は洵に男に生れて不合せである。女が無くて困るし有つても困るといふて、獨りで歎息したといふ話が、本に書いてある。斯ういふやうな譯のものである。故に心理學上で、理窟的に研究すれば女の心も大抵譯の分つた様のものであるけれども實際に臨むと分らないものである。併し分らないのは、女の心許りではない。女の側に立つて、男を見たならば、男も譯の分らないものに違ひない。男心と秋の空と昔から能くいふが、此のことは男の方でも同じであつて、女心と秋の空ともいへる。總てさういふ譯である。

そこで觀世音菩薩が、長者の婦女、居士の婦女、宰官婆羅門の婦女に身を現はして説法するといふことは、今も申す通り、明鏡が姿を寫す様なものである。屢々申す通り、觀世音菩薩は三面から拜むことが出来る。一面は大慈大悲の側である。もう一つの方面は大智慧の現はれてあり。又他の一面は

大勇猛心即ち大意思の現はれである。慈悲の形を現はし、智慧の形を現はし、大勇猛心の形を現はして居る。我々は觀世音菩薩の片割れといふ。片割れといふのはつまり御遠慮申していふのであつて、其の實は觀世音菩薩の權化であるといふ自信を有つて居つたならば、男も女も何も其處に界は無い。同じ人間である。貴族、平民、富豪、貧乏人、何も變りはない。納豆賣りも、車挽きも、或は食膳方丈、出づるに車あり着るに錦繡ある者でも、どういふ身分のものも皆平等に同化して行く、同じことである。一人前の人間である。自覺といふやうなことを近頃は能くいふが、其の點からいふと何も變りはない。併し實際に至ると中々さういふやうな譯には行かない。特に女といふことに就いては、近頃教育上でも餘程心ある人は研究して居る。又宗教上でも、婦人といふことは輕視する事は出来ない。寧ろ或方面からいふと、婦人と宗教とは離れられない所のものである。どうしても離すと出来ないものである。故に家庭の支配者たる婦人。特に主婦たる人に於ては、立派な宗教心を養はなければならぬ。獨逸のカイザー即ちウイヘルム現皇帝は、今あの通り戦さをして、我が國民とは互に敵對の地位に立つて居るけれども、それは別として、中々勝れた人で家庭に心を用ひて居るが、其人の言に家庭に於て婦人は三つの天職を有すといふて居る。さういふことを私は何か書物で見たことがある。それは獨逸語でキンデルといふ、これが一つ、次にキル、へといふ、それが一つ、それからコツ、ヘンといふので、つまり女は此の三事を司る天職を帯びて居るから、其責務たるや甚だ重いと云ふて居る。

中々實際を穿つて居る。其の三つのうちの、第一キンドルといふのは兒童のことである。小供である。次にキル、へといふのは、即ち教會といふことである。それから三番目のコッヘンといふ語は、料理といふ意味である。此の三つが婦人として主要な務めである。其の外にも必用の資格はあらうけれども、例へば本を達者に読み、理窟も分つて、文藝も出来、色々の藝術にも通ずるといふ事は誠に結構な事であるうけれども、それは寧ろ附けたりで、以上の三つは是非共缺いてはならぬ。昔から此の三つが婦人の天職である。第一の兒童——婦人は兒童を養育する重任を有つて居る。自分の生んだ兒を育てるのは、當り前である様なものの、これが家庭に於て大任である。育兒は最も母たる人の大責任である。それから教會——一家庭の主婦たる人にして宗教的信念が無かつたならば其の支配して居る家庭は。餘程乾燥無味のものである。何か事が起つたならば、直ちに理窟に訴へようとする。何事も法律的に四角四面のこと許りて、家庭として家庭の特色が無い。然るに宗教心といふものが、言はず語らずの間に行はれて居つたならば、圓滿に家庭を治めることが出来よう。それから料理といふことも、何でもないことのやうに思はれるけれども、三度の食事を旨く拵へるも、不味く拵へるも、料理法に明ると明るくないのにと依るのである。主婦たる人は常に料理に心を盡し、自ら手を下さなくとも、鍋の上に乗生心を用ひるやうにしなければならぬ。此の三つが本當に行けるならば、婦人として天職を完ふしたものである。斯ういふ所は、昔から日本に悪い言葉があつて、我々も子供の内

から女房と疊は新しいのが好いといふやうなことを聞いて居るけれども、さういふ筈のものではない。これは實に悪い言葉である。新しいといへば、今の新しい女といふものも、大變困つたものである。獨逸皇帝の言はれるやうなことは、面倒臭いといふて一向にしない。さういふ傾きが或一面に於て現はれて居る。處がそれに反して斯ういふことがある。私は昨日京都から歸つたが、其の前に仙臺に行つた、仙臺には豫て知合ひの其の頃は東北大學總長であつた北條時敬といふ人が居る。(今は學習院院長であるが)古くからの知り合ひで、先生の宅の奥さんと色々昔物語をした。此の奥さんは平生自身で調理もやれば上み下の掃除もする。お嬢さん達も皆それに倣つてやる。次に女中が又それに倣つてやるといふ様なやり方である。洵に結構なことである。色々お話の中に、奥さんか、何卒して此嬢——其嬢の名前は嘗て私が日露戦争の折り戦地に慰問に行つて、其歸りに廣島に寄つたが、當時北條時敬氏は廣島の高等師範學校の校長をして居られた時其の時生れたお嬢さんで、名を静子と附けて上げたが、今年十二歳になつて居る——何卒して此の嬢を私は成るべく舅姑の健在して居る家庭、小姑の大勢ある所にやりたい。と思つて居りますと云ふて居られた。洵に今の新しい婦人などの思ひも及ばぬことでありませう。西洋婦人はいざ知らず、日本婦人としては、親には大切に事へるといふやうな優しい心が無くてはいけません。特に日本の宗旨は祖先崇拜である。此の間も宮中のお儀式の中に、賢所のお儀式があつたが、あれは所謂祖先崇拜で、生きた神に事へるといふや

うな有様である。若し斯ういふやうな祖先崇拜といふことを假りに無視した宗旨があつたなら、それは佛教でも耶蘇教でも其の外何の宗旨でも、國の立場として繁榮を見ることが出来ない。さういふ有様である。處が或一面には、新しいとか醒めたとかいふて、ひよろくした若い婦人などが、我が國の歴史、風俗、習慣を無視して、何でも西洋から持つて来てそれを崇拜して居る。これは亞米利加風であるとか、佛蘭西風であるとかいふて、嫁に行くにも、犂の品性、操行とかいふことに眼を着けず、何か肩書きのあるやうな、錢が澤山あるやうな所に行かうと思つて居る。又は犂の様子が立派なこと役者のやうなものといふやうなことを考へて居つて、向ふの兩親などは全く眼中に無い、新しい親に事へることなどは少しも思つて居ない、洵に情けないことである。若し兩親があつたならば、隠居でもさせて、若い者同志でぶら／＼其の日を送らうといふ傾きがある。——今日は婦人に對して色々のことを云ひ出したが、かゝることも、一度言ふて置けば、他日又何かの参考にもならうかと思ふ。兎に角さういふ工合になり來つて居る。

併しながら私は、古い思想の婦人許りを相手にして話するのではない。新しい婦人であつても、若し間違つて居つたならば、それを良き方向に導かうといふのが、苟くも宗教家たるもの、道を以て自ら任ずる所の務めである。間違つても宜いといふて抛つて置くことは出来ない。それは矯めなければならぬ。婦女身を現じて説法することは、却々容易の事ではない。古いことも知り新しいことも知り

世界の事情がどういふことに成り行くかといふことも、深く研究しなければならぬ。容易の觀をするので誤るのである、それに就いて、亞米利加のやうな、あゝいふ何でも突飛なことをやる國柄であると私も暫く彼の地に居つた事があるが例へば同じ機械を用ゆるにしても、今日或る機械を採用し始めても、明日新奇な機械が出来れば、折角高い金を拂つて買入れた許りのものでも、直ぐに打捨て、新しいものの方に向ふといふ風で、萬事がさういふやり方である。何でも新しい物／＼と、無暗に進んで行かうといふ國である。けれども此に斯ういふ婦人坐右の銘といふものがある。紐育の女學雜誌に載せられたもので、それに依つて見ると、新しい／＼といつても、不健全な心持ちの者許りではない。同じく亞米利加でも、心のある人は着實な考を有つて居る者もある事が分る。此の坐右の銘は、其の女學雜誌で懸賞して得たのである。高い錢を以て懸賞したのであるが、其の一等賞を得たものに、斯ういふことが書いてある。參考にならうと思ふから、一寸譯していふて見ると、「料理法を知らざれば女に非ず。斯ういふことが一ヶ條。」「ボタンの飾り、已れの衣服の洗濯を他人の手に任すは、自己の意氣地無きを示すものなり。これが一ヶ條。それから「パンの焼き方は必ず學び置かざるべからず。」「日本にいふならば、飯の炊き方を知らなければ、婦人の資格として缺けて居るといふのである。これが一ヶ條。次には「一弗は百千弗なることを忘るべからず。」「一錢づつ、百積み上げたのが一圓である。一圓使ふ時には一錢といふ所に目を着けなければならぬ。一弗が一千弗になるのである。それから「一家の主

婦となつては、夫の收入に過不及無きやう計算を忘るべからず。「次には「負債をなしつゝ、流行物を買ふは、寧ろ耻辱なり。」實に適切な誠めである。それから「健全なる身體を忘れ、強ひて肺病患者の眞似を爲すべからず。」それから「日用品の小買物に一錢二錢を値切つて、他の買物に一弗二弗を惜まざるは、計算に迂なるものと謂はざるべからず。」如何にも一々適切である。「裸一貫なりと雖も、勤勉なる女は、百萬の富みある怠惰者に比して貴きを知れ。」成程斯ういふ所に眼を着けることは大切である。それから「音樂よりも美術よりも文學よりも、パンの大切なることを知れ。」それから「然りと否とを正直に語る婦人は、其の然りと否とに惑はざるゝことなし。」それから「車や馬よりも歩行の便利なることを忘るゝ勿れ。」結婚は金錢と體裁とによつて爲すべきものに非ずして、相手方の眞價を知りて後に行ふべきものなり。」以上が紐育の女學雜誌の懸賞に一等賞を得た所の婦人坐有の銘といふのである。婦女身に現じて而も婦人の爲めに説法するといふことは、唯だ御經の講釋をしたり、陀羅尼の有難いことを述べざる許りでなく、實は今の婦人に對して、今の婦人相當の説法をしなねばならぬ。初めから申す通り、觀世音菩薩は自分の身體の固定して居るものを有つて居ない。向ふ次第に應じてすらくと姿を現はして説法するのである。昔の歴史を讀んで見ると、有難いことが澤山ある。光明皇后を初め奉り色々澤山ある。種々傳記を讀んで見ると、假令當人は自覺して居つたかどうかは知らないけれども、矢張り一つの觀世音菩薩の化身であるといふて差支ないと思はるゝことが澤山ある。これは矢張り外國の

話であるが、婦人の本當の勇氣といふものは、——唯だ優しいこと許りがそれが婦人の總てとはなく、時あつては婦人にも勇氣が大變入り用である。これは米國の大統領——大統領といへば、ワシントン以來大勢の大統領があるが、其の内ヘルといふ大統領の時代に、新年宴會をホワイトハウスに開いたことがある。ホワイトハウスといふのは譯して白館といふので、大統領の居る所である、私も其の白館でルーズベルト大統領に會見したことがある。ヘルといふ大統領は其の白館で新年宴會を開いた。通例新年宴會といへば、旨い酒が出る事になつて居る。處かヘルの新宴會には酒が無い。そこで招かれた人の内で、今日酒の無いのはどういふ譯だと、大統領に聞いたものがあつた。大統領のいふには、家庭向きのことは妻に一任してあるから、それは妻に聞いて呉れ。そこで其のことを奥さんに聞いた所が、「私は元と百姓の家に生れたもので、——水飲み百姓ではなかつたけれども、私の家では、毎年新年宴會を開いても、まだ一度も酒を出したことが無い。後に夫が或州の知事になつたが、其の時にも酒を用ゐたことが無い。今此の通り大統領になつて居るけれども、矢張り昔の通りに實行して居るのである。」斯ういふ答であつた。日本では國も違ひ、風俗習慣も違ふから、敢て其儘を眞似るには及ばないけれども、併しながら、斯ういふことも私は勇氣といふて宜いと思ふ。さういふ工合に到頭酒無しに新年宴會を終つたといふことである。故に中々婦人の心理作用といふものは、餘程六かしいものである。又婦人から見ると、男の心理作用も六かしいに違ひ無い。處が觀世音菩薩には、六か

しいことは何もない、唯だ有るものは大慈大悲の意生身許りである。故に長者の女、居士の女、宰官の女、婆羅門の女、それに出遇へば、それ／＼女の身を現して而も爲めに説法する。身を現するといふのは、此の間京都で假裝行列があつて男が女の風をしたり、女が男の風をしたりして居つたが、さういふことの業ではない。一點同情の心を以て假りに色々に身を現する。それを意生身といふ。其の同情の心が起つて、それが一つの身體に現はれて而も爲めに説法するのである。

「應さに童男童女の身を以て得度すべきものには、即ち童男童女の身を現して而も爲めに説法す。」これも中々六かしい。小供に出遇つたなら、小供にならなければならぬのだが、此方が小供にならうとしても、私の顔は物騒な顔と見へて、小供が寄りつかないので困る。それで思ひ出したが、三島に接心會があつて、二十人餘りも寄ることになつて居る。其處に夫婦揃つた律義者があつて、私に對し、何時でも是非他所に行かずに、自分の宅に泊つて呉れといふので、大抵は其處に泊めて貰ふことになつて居る。其の家の小供に私が名を附けたのが二三人ある。所が其の家の主人が忠實で、同時に婆さんも知合ひであるから、私はもう始終友達のやうに話して居るが、夫婦は陰で私のことを親爺といふて居る。親爺がどうしたとか、親爺が何して居るとか、始終親爺／＼といふて居る。所が小さい小供には、親々のいふことか、チャンと印判に押されたやうに頭に這入つて居る。去年か一昨年に、例により接心會があるので、私が三島に行つて、其の家の玄關へ上らうとすると、其の子供が見附けて、

「親爺が来た」と大聲に呼んで迎へた、すると其の時子供の親が大變赤い顔をして、無禮だとか何とかいふて叱つたことがある。子供は其處が奇麗である、其の通り頭に這入つて居るのである。又子供といふものは、奇警なる一種の考を有つて居つて、鋭いことを言ふこともある。兒童研究をやつたならば私は面白いことがあらうと思ふ。觀世音菩薩は子供に逢ふと、子供に身を現して而も爲めに説法する、子供の中に居れば、我々は子供のやうになつて居なければならぬ。丁度明鏡が姿を寫すやうに、其の前に立つものに應じて如何なる形にも身を現する。さういふ有様である。即ち同感同情を以て、身を現して而も爲めに説法するのである。今日は透ひ色々のことをいふたが、此處までにして置きます。

第十四回

應以天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等身得度者。即皆現之。而爲說法。應以執金剛神得度者。即現執金剛神。而爲說法。無盡意是觀世音菩薩。成就如是功德。以種種形遊諸國土。度脫衆生。是故如等應當一心供養觀世音菩薩。

和訓 應さに天龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等身を以て得度すべ

さ者は即ち皆之を現して而も爲めに説法す。應さに執金剛神を以て得度すべきものは、即ち執金剛神を現して而も爲めに説法す。無盡意、是觀世音菩薩は是の如き功德を成就し、種々の形を以て諸々の國土に遊び、衆生を度脱す。是の故に汝等應當に一心に觀世音菩薩を供養すべし。

【講】 初めを承けて今日の所は冒頭に「應さに天龍、夜叉、健闍婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦人非人等の身を以て得度すべきものは、即ち皆之を現して而も爲めに説法すとある。是れは合せて八部衆と稱するもので最初の天と龍とは之を天龍と一と讀みに讀む場合もあるが、八部といふことになる」と天と龍と二つに分けて讀むのが當り前である。天といふことは、毘沙門天、帝釋天を始め、一切の諸天善神といふことである。我が日本でいふならば、八百萬の神々と見て差支無い。龍といふものは支那に能くある話で、繪にも描いて居るけれども、果して實際あるものかないものか、誰でも龍を明かに見たといふ者は無いやうである。或は其處が龍の龍たる所であるかも知れぬ。此龍は或る一つの自由なる働きを有つて居るもので、動物にして動物に非ず、神にして神に非ずといふやうな働きを有つて居るのである。それから夜叉とは惡神であつて總て人の善いことをするのを妨げるものである。次に乾闍婆、此の乾闍婆といふのは天の音樂師で、言はゞ天上界の樂師である。それから阿修羅は鬪争の神である。つまり一種の天部に屬する神で、鬪争を以て能事として居るのである。次に迦樓羅、これは非常に大きな鳥で、此の鳥も龍と同じく誰も見たものが無い。何でも莊子に出て居る大

鵬といふ大きな鳥、其の百倍もある程の大きな鳥であるといふ。それから緊那羅、これは天上界の歌ひ手で言はば歌うたいの名人である。次は摩睺羅伽、これは原語であるが、蟒の大將で、非常に大きい蟒である。それから仕舞が人非人、これは今お話しした八部衆以外に人も非人も總て有らぬものといふ事で、夫等のものに身を現じて而して得度しなければならぬものは、即ち坐に其の身を現じて而も爲めに説法すると斯ういふのである。斯ういふことは經文の字面だけで見ると、佛經は神話じみたものを書いたものであるとか、又は大さう不思議なことを書いたものであるやうにも思へるが、それは皮相の見て、何時も申す通り經を見るには事釋と理釋と相兼ねて行かなければならぬ。宇の形の上にも目を通して見なければならぬと同時に、理釋といふて精神的にも見て行かなければならぬ。それを忘れてはならぬ、此場合に於ても亦さうである。天といふても矢張り八百萬の神々とか、諸天善神といふた所で、そんな神が何處の天に居るかなどと、遠方を尋ねて行かうとしたのではそれでは方角がつかない。直さに自分の内容に當て、見ると、我が心の内に諸天善神が住んで居る。我々が善きことをするのは、例へば慈善のやうなことをするのも、チャンと規律を守るやうなことをするのも、忍耐するといふやうなことも、心の散亂しないやうなことも、何處までも進歩努力するといふやうなことも、斯ういふやうなことは、理釋的に眺めて見ると、我が心の内に八百萬の神々が光を放つて居るからである。即ち意生身——一念斯うといふ心の起つた時、それが一つの形、姿となつて現はれるので

ある、龍といふやうなものは、是も搜して見たならば心の中に居るかも知れぬ。天龍といふやうな高尚の精神もあれば、同時に惡龍もあれば妄龍もある。夜叉もさうである。總て善事の裏には惡事が伴ふもので、人間は寸善尺魔と云ふが能くいふたものである。善いことをしやうと思ふと、邪魔物があつて前に横はつて居る。私自身の經驗上でも、始終心の中に貪慾心が頭を擧げて居る。瞋恚といふ怒りの炎が始終燃えて居る。是れは皆夜叉である。總て善いことを妨げようといふ心は、誰れも皆持つて居る世の中に宗教が色々あるけれども、古代の宗教の中に波斯教といふのがあつて、善神惡神があるといふ。而して此の二つの神が始終闘つて居るといふのである。善い神と悪い神が此の世の中に居つて始終喧嘩許りして居る。考へて見ると我々の精神界も總てさうである。邪見と正念、善念と惡念とが始終闘つて居る。歐羅巴の戰爭見たやうに、聯合軍と同盟軍が各々手段方法を講じて、晝夜戦つて已まない有様であるが、我々の心も又その通りで試みに一日起きてから寝るまでの経過を能つく胸に手を當て、考へて見ると明かである。始終此の二つの神が争ふて居る。明るい神と暗い神に順ずる神と逆らう神、善き神と惡しき神、さういふ神が始終我が内容に働いて居る。それから乾闥婆、前にも云ふた通り天の音樂師である。是れも我が内容にある。我が内容には常に心で樂を奏して居る。自然の樂を奏して居るけれども、多くの場合には我が耳に聞へないのである。本當に耳を澄まして聞けば、天の音樂をかゝて鳴らして、佛が常に其處に説法して現はれて居る。それから阿修

羅も其の通りで、始終闘争して居る。我が心の上も時によると直きに阿修羅の戰場である。又此の世の中を眺めて見ても、娑婆世界が即時に阿修羅の世界である、政治界から見ても實業界から見ても、其の他種々の社會から見ても常に闘争して居ないことはない、喧嘩許りして居る。唯だそれが血を流して居るか居ないか、武器を持つて居るか居ないか、其處が少々違ふだけで、闘争して居ることは同じである。それから「迦樓羅」、大きな鳥である。つまり四海を併せ吞まうといふ大慾心、さういふものも我が内容にある。それから「緊那羅」、天上界の歌ひ手で華美を好む、亞米利加あたりに行つて見ると、さういふ派手やかな、新しい歌ひ手がある。矢張りさういふものが自分の内容に歌ふて居る。それから「摩睺羅伽」、大蟒で大蛇のやうなものである。何ぞといふと犍猛な執念深いものを、毒蛇或は猛獸といふが、我々も其の毒蛇を有つて居る。唯だ信仰ある人又は言ひ方に依つては悟つた人、さういふ人は恐ろしい蟒でも大きい蝮蛇のやうなものでも、自由に使ふことを知つて居る。蛇使ひになると、其の使ひ方が又違つて、蛇を襟巻のやうに首に巻いたり、たすきのやうに肩から脇の下に廻したり、随分偉らしいことをやるが、蛇もさういふ苦手に掛ると、自由自在に使はれるのである。我々も貪慾、瞋恚、愚痴を始めとして八萬四千の妄想を有つて居るが、丁度蟒や毒蛇、猛獸の如きものである。今——迦樓羅の如き大鵬より百倍も大きい鳥や、其の外人非人まで、色々のものが現はれたが、それ等のものを觀世音菩薩の大智慧、大慈悲、大勇猛といふもので、一々使つて見るとすると、其の恐

ろしい我に迫害を加へようといふものが、極く従順な極く可愛らしいものになる、と斯ういふやうに見て行くのが適切である。天龍以下人非人に至るまで、それ等の身を以て得度すべきものは、即ち皆之を現じて而も爲めに説法する、斯ういふのである。

「應さに執金剛神を以て得度すべきものは、即ち執金剛神を現じて而かも爲めに説法す」と斯ういふ執金剛といふのは、金剛を執るといふことで、其れには金剛の杵といふ字が意味に於て籠められて居るのである。金剛とは堅いことを意味して居る。即ち金剛といふことは堅固といふ意味と摧破即ち堅きを破るといふ意味が含まれて居る。進んで行く。外道を打ち破る、斯ういふ意味がある。此の執金剛を形に表現したものは、大きな寺などに行つて見ると、二王門といふのがあつて其の兩袖に勇猛神——二王といふものが立つて居る。此の二王を分けていふと、一方の二王は斷惡といひ、世の中の悪いことを悉く斷滅する、さういふ姿をして居る。一方の二王は生善といひ、善きことを生み出す、さういふ意味の姿である。一方は斷惡一方は生善、一面は殺人刀で一面は活人劍、斯ういふ風に別れて居るが、其の實は固より一つのもので、唯だ此の二つの働きを示す爲めに假りに左右に分けたものである。執金剛神とは俗にいふ二王のことである。あゝいふ勇猛の神、其の神に身を現はして得度すべきものは、直ちに執金剛神となつて而して爲めに説法する、と斯ういふ。此の執金剛は今お話しした通り、形はさうであるけれども、心のうに受取つて見ると、他所から雇つて來なくとも、自分に

執金剛神程の堅固勇猛の力を持つて居るのである。唯だそれを十分に揮ふことを知らない者が多いだけである。世間の言葉でいふならば、敢て正義人道といふ許りに限らないけれども、さういふ精神、我が國家の上でいふならば、忠君愛國と云ふた様な精神、大和魂、武士道、さういふ類の精神を現はすのが即ち執金剛神の身を現はすのである。執金剛神の働きは古人にも其例が澤山ある、肇法師が其頃の王様符堅に對せられし態度の如き又近くは鎌倉の圓覺寺の開山佛光國師が支那に居られし頃、當時宋朝は既に火の消なんとする有様であつたが、元の忽必烈が初め北方に起つて、而して宋の國を滅ぼさんといふ希望から、ずん／＼宋の領土を侵略して、殆んど支那四百餘州を蹂躪した。其の時元の兵は寺院のある山の中までも飛び込んで行つて、愚圖／＼して居ると坊さんまで斬り殺すといふ勢であつた。佛光國師は當時温州の能仁寺に難を避けられて其處で坐禪して居られた。然るに此處へも敵難は壓して來て、衆は皆逃竄したが國師のみは泰然自若坐禪して居られた、虜會が刃を以て國師の頸に加ふるに及びて、師は神色變せず、乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影である。此の偈は文字は唯だ二十八字であるけれども、意味は頗る深長である。乾坤は天地といふと同じこと、乾は上で坤は下、孤筇は一本の杖といふこと、上を見ても下を見ても杖一本卓てる所は無い。即ち此の世界は廣く廣大であるが其世界の中に杖一本卓てる所は無い。これはどういふ意味かと

いふと、少し言葉は違ふけれども、此の席で即今誰一人喋舌つて居る坊さんもなければ、誰一人聴いて居る者もないといふことである。……洵にどうも小氣味宜いことになる。「且喜すらく人空、法も亦空なり、我れは一個五尺の身、人と斯ういふ形に現はれて居るけれどもモト空である、それから法とはどういふ意味かといふと、人體を組立て、居る所の本、身體ならば身體を作り上げて居る所の元素と云ふても又は分子といふても宜い。其元素や分子によりて斯く形をなして居るものを人といふ。形をなして居る所の本を本質及は元質といふ、是が即ち法である。小氣味宜い、面白い、何が面白いといふならば、例へば百萬の軍勢が寄せて来ようとも、其の儘人空である。もう一つ突込んで言へば、法も亦空なり。此處まで至らないと徹底しない。一切の森羅萬象、其の儘にして空なり。孤節の卓て處も無く天下泰平なり。そこで轉結に持つて来て、珍重す——これは／＼どうもといふやうな言葉である、待つて居つたといふやうな言葉である。これは／＼待ち設けて居つた、何をかといふと、「大元三尺劍、大元といふは元の尊稱であつて、今新たに起つた所の元の官兵が現はれて来て、我が生首を冷たい刀で打斬つて仕舞ふ、どうも小氣味好い、洵に待つて居つたと云はぬ許りである。」電光影裏斬春風、「電光の影のやうにびかりと光つたなら跡は何も無い。同じ風ながら此の頃(大正四年十月)のやうな冬の風は身に浸むが、春の風は何とも云ひ様のない心持のよいものである。春は身體のほどびるやうな風が吹く、それが身體に觸ると氣持が宜い。此の三尺の秋水を頸に加へるのは、丁度春風に撫

てられるといふやうな心持ちである。斬るといふ字が面白い。水を斬る泥を斬る空を斬る、さういふこともあるが、春風を斬るとは面白い。それで萬事萬端が此春風を斬るといふ風に行かなくてはいけない。執金剛神が遺憾なく働くといふ點は、つまりさういふ譯のことを云ふたものである。それは男らしい話の側の事であるけれども、女の方に持つて来ても又さうである。内容は同じであるが唯だ形に於て現はし方が違ふ許りである。柔かに現はれて来る(弱者)よ、汝の名は女なりといふけれども、今の或女からいふと、強き者よ、汝の名は女なりといふ風である。所謂新しい女などは随分強い方で、亭主を尻の下に敷くやうなものも珍しくない。それが現はれたとなつては大變であるけれども、女の強さは如何に強いといふても、動しても其強さは自體女として男性的の強さとは違ひ其間に何としても、柔か味がある、併し内容に至つては變るものではない。佛光國師に道を學んだ千代能、法名は妙禪禪尼といふて、北條家の一族である、父は實時、兄さんは貞顯で何れも武力に秀でた人で、又一面には文事にもたけて居た人々である。鎌倉の稱名寺や金澤文庫などは實時の開いたものである。千代能はかゝる家柄に生長したのであるから自から和漢の學にも通じ又當時盛に行はれた禪の宗乘にも夙く心を注いだ事はあり得べきことで、佛光國師の室に參じて工夫辨道を怠らなかつたのである、其人の言葉に、「地獄遠きにあらず極樂亦眼前にあり。人生百歳古來稀なるに、秦皇漢武長生を求めんとするも、徒らに千載の笑を貽し。彭祖が一掬の菊水に、八百歳を露の間に保ち、東方朔が一技の桃、

三千年を瞬時に過ぐ。短しとや云はむ。盧生が邯鄲一睡の夢、五十年の盛衰長しとや云はむ。鐵拐琴高、今何地にありや」といふのがある。鐵拐琴高とは仙人の名前である。是丈けでも大抵其力量は分るのであるが、其の千代能が妙體禪尼といふ尼になつて、佛光國師に親しく師侍して身命を投じて骨折つた結果、豁然として大悟徹底した。其時、「ちよのうがいたゞくおけのそこぬけて水たまらねば月も宿らず」といふ歌をよんだが。如何にも確かりしたものである。明かに千代能の覺悟は、此の一首の歌に立派に活現して居るといふてもよい。此の如きを妙體禪尼の内容の執金剛神が働いて居るといつても宜い。獨り悟りを開くといふやうな場合許りでなく、日常のことに於ても、社會上の極く柔かに働き極く物靜かに振舞ふ上にも、執金剛神の力は必要なること素より云ふ迄もない事である、そこで執金剛神を以て得度すべきものは、即ち執金剛神を現して而も爲めに説法する。と斯ういふ。

「無盡意、是の觀世音菩薩は、是の如き功德を成就す」。觀世音菩薩の三十三身とか三十三應身とかいふものは、つまり觀世音菩薩の本體は正法妙如來で、それに法身、報身、應身の三身がある。此の法身を十界に宛て、見ると、佛の世界、菩薩の世界、緣覺の世界、聲聞の世界、以下餓鬼、畜生の世界と總て十應身となる。又報身を十界に宛て、見ると、矢張り十應身である。應身を十界に宛て、見ると、是も又同じく十應身である。合せて三十應身であるが、是れに元の法身報身應身の三つを加へるさういふ工合に大計して見ると、三十三應身、斯ういふ風になるのである。併しながら觀世音菩薩の

身を現はすのは、世の中の救済の爲めであるから、固より三十や五十など、そんな數に限られた譯ではなくて、其の實無量無邊、様々に姿を現はして而も爲めに説法する。元來觀世音菩薩には固定した姿は無いので、其の場所其の時に、應じて身を現はすのである。

以上佛身から執金剛神まで、三十三應身が濟んだから「無盡意」と釋尊が代表者と呼び出されて、觀世音菩薩は此の通り功德を成就して居る。色々の形を以て衆生濟度の功德を積んで居る。此の意味から云ふならば、釋迦にも身を現じ、孔子にも身を現じ、或は基督、マホメットにも身を現じたといふて宜い。宗教家許りではなく、學者にも身を現じ、政治家にも身を現じ、百姓にも身を現じ、町人に身を現じ、又は納豆賣りにも車挽きにも鍛冶屋にも左官にも色々に身を現する。又は餅屋にもなれば女にも男にもなる。我々も觀世音菩薩を體現して居るものである。斯ういふ風に餘さず洩らさず色々の形を現じて行くのである。而して諸々の國土。是れは娑婆世界に限らず、今いふ十界或は十國土といふても宜い。其處に遊行せられるのである。遊行せられるといふても、我々が遊山する如くに、山や川に遊び戯れるといふのではなく、衆生濟度の功德を積まれるのである。是の故に汝等一心に色々の話をするとか説明するとかいふことは、つまりそれは蛇足である。要するに一心に一つの觀世音菩薩を信じなければならぬ。觀世音菩薩を信じて、我々がそれと化して一團となり、所謂觀世音菩薩の化身となつたならば、其處に色々の國土が開け、色々の衆生が限りなく現はれて来る。一心に觀

世音菩薩を供養して而して觀世音菩薩を念ぜよ、と斯ういふ。今日は此處までに致して置きます。

第十五回

是觀世音菩薩。摩訶薩。於怖畏急難之中能施無畏是故此娑婆世界皆號之爲施無畏者。無盡意菩薩。白佛言世尊。我今當供養觀世音菩薩。卽解頸衆寶珠。瓔珞價值百千兩金。而以與之。作是言仁者受此法施。珍寶瓔珞時觀世音菩薩不肯受之。

和訓 是の觀世音菩薩摩訶薩は、怖畏急難の中に於て能く無畏を施す。是の故に娑婆世界皆な之を號して施無畏者と爲す。無盡意菩薩、佛に白して言さく、世尊、我れ今當さに觀世音菩薩に供養すべしと。即ち頸の衆々の寶珠、瓔珞、價值百千兩金なるを解きて以て之に與へ、是の言を作すらく、仁者、此の法施の珍寶瓔珞を受け給へと。時に觀世音菩薩肯て之を受け給はず。

講語 右を一と通り表面から見ると別に六かしいことは無い様であるが、毎時も申す通り、御經の文句には事釋、理釋といふことがあつて、ずつと事實通りから解釋することもあり、それから又、それを理觀的に解することもある。それであるから、唯だ表面をずつと眺めただけでは、十分に御經の價

値ちを見る事が出来ない。そこで今日の所を申せば、此の觀世音菩薩摩訶薩といふことは、既に度びく其意味は辯じたから、改めて申さなくてもよいが。此の觀世音菩薩摩訶薩は、怖畏急難の中に於て能く無畏を施すとある。怖畏急難といふことは、我々がもう此の通り互ひに平氣な顔をして、濟まして此處に座つて居る様なものの、恐ろしいといふ心は常に誰しも有つて居る。假令どの位の腕力を有つて居つても、學問理窟を知て居つても、或るものに出遭うと恐ろしいと思ふ。現に生老病死といふやうな四苦、又は八苦といふやうなことに遭うと、恐ろしいといふ念を懐くものである。若いくと思つて居る内に直きに年が寄る、病氣になる、遂に死んで仕舞ふ、さういふ大波が寄せて來ると誰れしも恐れる。洵に身體が健康で無事な場合には、百まで生きるの二百まで生きるのと大言壯語して居るが、一たび病氣に罹つて床に臥すと、平生の元氣は何處へやら、死に對する恐怖の念を萌して來るのである。自分自身でも覺へがあるが、病氣に罹ると平時とは氣分が違ふ。什うしても助かない、何だか死んで行くといふやうな氣分になることが往々ある。斯ういふ場合に大安心の境涯を得て居ないといふと、大變麻胡附かなければならぬ。恐れといふても、外から來る恐れは退治することも出来るし、恐れるに足らないけれども、内から來る急難には誰しも恐れる。内からといふのは心から起る所の禍で、此の恐れには誰しも後退りをするのである。處が今觀世音菩薩摩訶薩は、此の恐しい所の急難の中に於て、能く無畏を施す、と斯ういふ。恐るゝ所無い力を施す。施すには救濟もす

る法施もする。斯ういふ所が觀世音菩薩の施しである。何か品物を以て與へるのであるかといふに、觀世音菩薩の施しは、さういふ品物ではない。我々は常に怖畏といふ恐れる心を有つて居る。其の者に對して、觀世音菩薩は無畏の心の施しをする、と斯ういふ。觀世音菩薩は屢々申す通り、大慈大悲の觀世音菩薩であるが、他の一面からいふと大智慧の觀世音菩薩である。又他の一面からいふと、大勇猛の力を有つて居る所の觀世音菩薩—勇猛精進の力を有つて居る所の菩薩である。一度び觀世音菩薩摩訶薩といふ、其の菩薩を信得して、而して一心不乱に觀世音菩薩を念ずる時には、觀世音菩薩は何時でも無畏の心を我々に施して下さる。言ひ直すと、我々も亦觀世音菩薩の分身である。一つの觀世音菩薩の權化である。觀世音菩薩と我々とは、決して別に隔てのある間柄ではなく、怖畏急難の中に於て能く無畏を施す。是の故に此の娑婆世界は皆な之を號して施無畏となす、と斯ういふ。娑婆といふことは梵語であつて、翻譯すれば忍土といふ。つまり四苦八苦の世の中であるから、此世界に生息して居る上は、之を耐え忍ばなければならぬといふ所で、忍土といふのである。此の住まつて居る娑婆世界の總てのものは、皆な觀世音菩薩を號して施無畏者ともいふ、無畏を施す所の人ともいふ。つまり佛法は色々の門戸に分れて居るけれども、聖道門、淨土門、何でも構はない。自力的でもなければ他力的でもない。自力界他力界、さういふことは一切忘れて仕舞つて、唯だ南無大慈大悲の觀世音菩薩と念ずる時は、觀世音菩薩は活きたなりに現はれて來て、而してそれが即ち施無畏者となる。

「無盡意菩薩、佛に白して言さく」。先きにも屢々申上げたる如く。無盡意菩薩は大勢の菩薩方の代表者である、總名代である。其の無盡意菩薩が觀世音菩薩の説法を承はつて、感謝の意を述べる、言はる禮の表白である。「世尊よ」と斯う呼び掛けて、「我々は今當さに觀世音菩薩に供養すべし。」今までの通り、長々と有難い説法を承つて歡喜の意に堪へないから、私は今觀世音菩薩に供養したい。と斯ういふ。供養といふ講釋をすれば是れも色々あるが、煩はしいから今は略して置く。今私は御供養を致したい。何を供養するかといへば、即ち衆々の首に掛けてをる所の寶珠瓔珞其の價百千兩金もするものを解いて、而して以て之に與ふと斯ういふ。菩薩は觀世音菩薩でも無盡意菩薩でも、どの菩薩方でも多くは女性の形に現はれて居る。而して色々指環もあれば腕環もあり、瓔珞といふて首に下げて置く色々飾りや、其の外身體に纏ふて居る色々寶石類や金銀などがある。今でも印度邊では、貴婦人令嬢と云はれるやうな人々は、皆な此方といふ菩薩方の姿をして居る。菩薩は男の姿でも女の姿でも何れにしても坊さんとは違ふ。どんな飾りをつけても差支無い。そこで無盡意菩薩が觀世音菩薩に供養し奉りたい、即ち之を以て供養をしたいといふて、自分の頸に掛けて置く所の色々寶珠を以て作つた所の飾り—是れも今教相の書物を見ると、頸といふものは上にも向へば下にも向ふ、首と胸の間にあつて中和の位置を得たものであるといふやうな、さういふ色々講釋があるけれども、そんな講釋は今此處で詳しくいふ必要は無い。寶珠といふても、決して身體の飾りばかりではない。つ

まり此にある寶珠といふのは、我が寶財である所の、布施することとか、持戒とか、忍辱即ち忍耐するとか、精進とか、禪定とか智慧とか、さういふものを皆な寶珠と見たのである。身體にひかく附けてあるもの許りではない。心に持つて居る所の諸々の寶のことである。さういふやうに書物に詳しく書いて講釋がしてあるけれども、其の儘に受取るのも可笑しいが、兎に角自分の頸に掛けて居る諸々の寶珠で拵へた瓔珞、其の價百千萬兩、勘定づいていふならば、百萬兩とか千萬兩とかになるもの、それを上は佛から下は地獄までの十界、即ち佛、菩薩、聲聞、緣覺、天上、人間、脩羅、畜生、餓鬼、地獄、さういふ十界に宛て、居る者もあるけれども、餘りさういふ講釋をすることは煩はしいからくどくしくいふまでも無からうと思ふ。此の身體の飾りを解いて上げるといふのである。今無盡意菩薩が觀世音菩薩に供養する爲めに、此の頸に掛けて居る所の寶珠の瓔珞、勘定づいて千萬圓も掛ると思はれる品、頗る貴い所の寶を以て作つた飾りを解いて、惜いとも思はず其處に差出されて、此の法施の珍寶瓔珞を受け給へ。どうぞ御受取下さいと申された、法施といふのは布施の一つで布施には財施とそれに對する法施とがある、此のことは度々いふたから改めて申さないが、法施といふは、一言でいふたなら、形の上の飾り許りではなく、心の上の法財を施すといふ所から、故らに法施といふのである。此の法施、珍しい寶で拵へた瓔珞を受け給へといふて、それを差出されたが觀世音菩薩は肯て之を受け給はなかつた。何故受け給はなかつたといふと、此の珍しい寶で拵へた首

飾りの瓔珞といふものは、人々皆具有して居る筈のものである。此の物は人に與へることも出来なければ奪ひ取ることも出来ない筈のものである。されば此の寶を以て供養として差出すといつても、心に受けられない譯である。觀世音菩薩が肯て之を受け給はないといふのは、固より自分も所有して居る筈である。さういふ意味であるから、唯だ觀世音菩薩が謙遜して受取る譯には行かないといふたのではない。自分も有つて居るし、且つ人から受取るべき筈のものでもないといふので、觀世音菩薩は肯て之を受け給はないといふのであるが、唯だ斯ういふた丈では、事が六かしいから、それに就いて、私が一寸此の頃見た本に斯ういふことがある。面白と思ふからお話するが、西洋人の話で、羅馬時代にあつた事柄である。我國にも其の本は悉皆翻譯になつて居る有名な物語で、それは羅馬時代の最も盛んな時のことで、其の羅馬時代に、或る王朝のとであるが、其處に一つの葡萄園のやうな所があつた。園の中には總て一面に何か木が生え茂つて居る。其處に一つの四阿屋がある。さういふやうに本に書いてある。其の四阿屋の處へ二人の小さな子供が來た。それは兄弟同志である。二人の子供が洵に花も薫るといふやうな其の園の中を、彼方此方と逍遙して居つた。處が丁度其の時、自分の母親と招待された母親のお友達、一人の美しい貴婦人とか見へた。此の母親と貴婦人が矢張り彼方此方と逍遙して居るのを見て、小さな子供の中の弟の方がいふには、「兄さん、私は今日まであんなに美しい人を見たことが無い、今日のやうな美しい貴婦人を見たことが無い。丸であの方は女王のや

うな方である」といふと、兄のいふには、「成程今日見へた奥さんは美しいけれども、私のお母アさんはそれよりも美しい。成程あの方は美しい着物を着て居る。私の母はさうでないけれども、その代り氣高い所がある。今日の貴婦人は私のお母さん程の愛嬌が無い。」兄がさういふと、弟は、成程さうである。羅馬の市中に於ても、お母さん程に氣高い愛嬌を有つて居るものは無い。兄さん、そうではありませぬか」と弟がいふた。二人の子供の母親は、名をホーネリヤといふ人である。處が母親のホーネリヤは、洵に質素な着物を着て居る。唯ださつぱりした清らかなものを纏ふて居る許りであつた。當時羅馬時代の風習は、手先さも足先さも露はにして、色々の寶玉や黄金を以て飾ることが流行であつた。然るにホーネリヤは、指先にも裸々くもがなく、頭にも何等飾りといふものが無い。唯だ丈けなす所の黄金の髪がある許りであつた。日本では色々の鬘があり髪飾りもあるけれども、彼方では髪は編んだだけのものである。編んだだけのものであるけれども、其の髪の美しさは洵に女王の髪のやうにも氣高く見へたのであつた。其の大人二人が今小供の立つて居る四阿屋の傍に歩み寄つた時、母は子供に向つて、「今日のお晝の御飯の時に、あのお方に玉手箱を見せて頂くがよい。名高い所の玉手箱であるから、什な珍しいものが現はれるかも知れない。嬉しからう」といふた。二人の小供は羞かしさうな顔をして、貴婦人にお辭儀をした。二人の小供の思ふには、貴婦人の指に嵌めて居るさうきらしい指環の外に、如何なる所の立派なる指環が、玉手箱の中にあるであらうか、尙指環の外に頸飾

りも腕環も美しい品々が澤山あるとの事だがどんな物であらうかと、吃驚りしたやうな顔をして待つて居ると、貴婦人が其の四阿屋で質素な食事を済ませて、扱てテーブルの上にある玉手箱の蓋を明けて、二人の兄弟に見せてくれた。果して中には立派な品許り充滿して居つた、大きな滑らかな眞珠、燃え立つやうな赤いルビー、すき透るやうな玉、太陽の閃きのやうなダイヤモンド、其の外高價なものが數限りなくあつた。二人の兄弟はそれを見て、欲しい様な顔をして切りとそれに見取れて居たが私のお母さんにも、斯ういふ美玉の一つでもよいから持つて居られたならさぞよい事であらうにと、子供心にもそう思ふて眺めて居た。處が其貴婦人と云はれて、常に榮華に誇つて居る母親の友達なるものが意氣昂然と貧しい所のホーネリヤを顧み、さも得意らしく「ホーネリヤさん、貴女はそんなに貧乏して居らつしやるのですか」と云ふと其の時にホーネリヤは屹と顔色を正して、「私は決して貧乏ではありませぬ。私には斯う云ふ飾り物は身に持ちませぬけれどもその代り」と云ひながら、傍に見て居つた。二人の子供を引寄せて、「此の二人の子寶があります。此の寶は、貴女の玉手箱に満ちて居る寶よりも、何よりもモット／＼貴ひ寶であります。」と答へた、流石の貴婦人も大に赤面したといふことでありませぬがホーネリヤは、此二人の子供を慈愛の心、同情の心を以て育て上げ、二人の子供は後に至つて大人物となり。それが羅馬時代の保民官といふものになつたのである。此の保民官といふのは、平民を保護監督する傍ら、其の時代の諸々の役人の非違を糾弾する、平たく言へば役人の不都合

を取締つてそれを責める所の役で、平民撰出の高官である。さういふ風に二人の子供が共に立派な人になつたといふやうな話が、其の本に書いてある。私は昨日手にした本である。假令身には如何に貴い所の寶で作つた瓔珞を下げて居つても、火に遭へば焼かれて仕舞ふし、水に遭へば流れて仕舞ふもので、眞の寶ではない。眞の寶といふものは心の美にある。我々の精神上の眞の寶といふものは、決して形にあるものではない。さういふことを思ひ附いたのであるが、眞の寶はそれである。次手だから、もう一つお話しする。

これは貴女方も既に御存知であるかも知れぬが、支那の齊の國王が、或時自分の領分を巡回せられた久し振りで國王が地方を巡回されるといふので、沿道の人々は、我れもくと見物同様に掛けた、處が王様が不圖自分の乗り物から御覽になると、遙か遠方の桑畑の中に、一人の娘が脇目も振らずに桑の葉を摘んで居る。それが王様の目に着いた。外の人々は、老人でも子供でも、男でも女でも皆な久し振りに王様が巡回されるといふので、塔の如くに多勢群つて見物して居るのに、此の一人の娘だけは、大勢ががや／＼騒いで居るそれにも拘はらず、脇目も振らずに熱心に桑の葉を摘んで居る。それを乗物の中から齊の國王が御覽になつて、詢に珍しい娘だ。什ういふものであるか、詢に珍しい娘であると、流石に人民を治めて行く國王のことであるから、さういふ所に目が着いたのである。直ちに乗物を止めて置いて、あの娘を連つて來いと仰せあつた。そこで近侍のものが桑畑へ行つて、其の

娘を連れて來ると、まだうら若い娘である。處が其の娘の頸に、大きい瘤が出来て居る。年は若いが頸に瘤が出来て、餘り美人でもない。王様に呼び出されて、恐る／＼乗物の側に寄つた。王様は「お前の名は何といふ」と尋ねになつた所が、「私の名は別にありますけれども、斯ういふ見苦しいものが頸に出来て居るから、人が皆な私を宿瘤と譚名して居ります。」宿り瘤と讀んでも宜い。「名を呼ばずして私を宿瘤」と皆なが呼んで居ります。」斯う答へた。日本の言葉でいふと、瘤出来女とでも言ふのである。國王は重ねて「今日私が此處を通るといふので、皆なものが物珍しげに多勢見物に出て居るが、其の方だけ脇目も振らずに一人で桑の葉を摘んで居た。どういふ譯か」と斯う問はれた。其の時娘が答へるには、「私は今日王様の御通行のことは存じて居りましたが、併し私の母様は、王様のお行列を拜見せよとは申しませなんだ。桑畑に行つて桑の葉を摘んで來いと承りまして、母の命じた通り桑の葉を摘んで居りました。王様のお行列は見たいことは、見たいけれども、母の言ひ附けは桑摘みでありましたから、其の通り摘んで居たのであります。」斯ういふ工合に返事をした。王様は感心した。「成程感心なものである。母親が桑の葉を摘んで來といふたからといつて、大勢が見物の爲めに飛び歩いて居るに拘はらず、一人で殊勝に桑摘みをして居るとは、詢に心掛けの立派なものである。斯ういふ心掛けの良い女を自分の妻にしたならば、一生どの位の幸福であるかわからぬ。」と齊の國王はさういふ工合に考へて、それから直ぐに親を呼び出されて遂に其の娘を引き上げて、國王自身の後とな

されたといふ、これは有名な話である。さういふやうな譯で、今此に無盡意菩薩が自分の頸に掛けてある珍寶の瓔珞、それを解いて觀世音菩薩に献上したといふ、其ことを表面から見れば、身體の飾りといふことに、此處の經には含んで居るけれども、法施としての珍寶の瓔珞は、私は精神上の珍しい寶、心の中の洵に美しい寶と思ふ。それでよつて總ての迷ひ惑ひといふものが無くなつて仕舞つて、今ある所のものは善根功德、我々と觀世音菩薩許りであるが、其の身を捨て、仕舞つても觀世音菩薩に御供養をするといふのは有難い。禪宗の教相風にいふと、佛見法見をも打捨て、仕舞つて、今御献上申し上げるといふと同じことである。何もかも禮の爲めに御献上申し上げるといふたのであるが、觀世音菩薩は之れをお受けにならなかつた。何故かといふに、さういふ寶は人々具足して居るものである、我から彼にやらうとか、彼から我に貰ふとかいふことの出来ないものであるといふ意味が籠つて居る。若し寶が欲しければ、……一心に觀世音菩薩を念じたならば、立ち所に現はれて來るといふも同じである。「此の法施の珍寶の瓔珞を受け給へ、其の時觀世音菩薩肯て之を受け給はず」と斯ういふ。今日は此處までにして置く。

第十六回

無盡意復白觀世音菩薩言仁者。愍我等故。受此瓔珞。爾時佛告觀世

音菩薩。當愍此無盡意菩薩。及四衆。天龍夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。故受是瓔珞。即時觀世音菩薩。愍諸四衆。及於天龍。人非人等。受其瓔珞。分作二分。一分奉釋迦牟尼佛。一分奉多寶佛塔。無盡意觀世音菩薩。有如是自在神力。遊於娑婆世界。

和訓 無盡意復た觀世音菩薩に白して言さく、仁者、我等を愍れむが故に、此の瓔珞を受け給へ、爾の時、佛觀世音菩薩に告げ玉はく、當さにこの無盡意菩薩及び四衆天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等を愍れむが故に、此の瓔珞を受くべしと。即時、觀世音菩薩諸々の四衆及び天人非人等を愍れんで、其の瓔珞を受け給ひ、分つて二分と作し、一分は釋迦牟尼佛に奉り、一分は多寶佛塔に奉る。無盡意、觀世音菩薩は是くの如き自在神力あつて、娑婆世界に遊び給ふ。

講義 それで始めを受けて來まして、無盡意菩薩が復た再び觀世音菩薩に仰せられるには、仁者我等を愍れむが故に、此の瓔珞を受け給へと、何時も申す通り、仁者といふのは、總て向ふへ立つ人を尊稱して申すのである。仁は人なりといつて、人といふ字と同じやうに用ひて居る。我等を愍れむが故に、此の瓔珞を受け給へと斯ういふ。前回にも申したのであります。もう一遍一言して置きます。例に、此の瓔珞を受け給へと斯ういふ。前回にも申したのであります。一寸繪畫に就いて見てもさうです。例

へば觀世音菩薩とか、或は普賢菩薩とか、又は文殊菩薩とか、あゝいふ方々を現はした形は女性的になつて居る。婦人といふのではないけれども、其のお姿を女性風に現はして居ります。能くお姿を見ると、其の女性風のお姿の所へ、頸にずつと瓔珞を垂れて居るやうな有様である。私は少しの間印度へも行つて居つたが、彼の地では、國が熱帯で非常に暑い土地であるから、日本人に見るやうな、着物物を二枚も三枚も重ねて着るとか、又は結構な帯を締めるとか、さういふことは少しもありません。それであるから、貴婦人とか或は財産に富んで居るとかいふやうな人は、大抵瓔珞の如きものを身に付けて居る。頸には頸輪といふやうなものを着けて居る。又腕には腕輪、指には指輪と、それらに飾りをして居る。それには金銀は勿論のこと、世界に名たる所の寶玉を鑲めたものを着けて居ります。印度の貴婦人の姿を金目に積もると、餘程金高のものを着けて居るので、立派な一つの財産を始終身體に着けて居るやうなものである。丸で寶玉屋の看板見たやうなものである。印度は一國とはいふものの、廣い國だけに、地方々々によつて風俗も違へば習慣も違ふて居るが、或は地方などでは同じ印度人の一種で、鼻にまでさういふ飾りをして居る者がある。彼等に取つては非常に美しい積りであらうけれども、我々から見れば随分可笑しい風俗である。鼻に穴を明けて貴い玉を付けて居る。何でも身體中寶玉で、殆んど網羅して居るやうな有様、そんな風であります。形の上からいふと、瓔珞といふのは矢張りさういふものである。これは何時も申す通り、佛敎の經文には理と事と二つの解釋法

がある。事實の上からと心の上から持つて來る解釋とである。そこで事實の上から見ると以上の如しであるが、それを自分の心の上を持つて來ると、瓔珞といふのは滿德莊嚴ともいふ。滿德とは一に圓滿ともいひ、有らゆる善きこと有らゆる貴いことの其の圓まりである。何故といふに、我々の心の中にはさういふ値段付けをすることの出來ない貴い寶を有つて居る。滿德で莊嚴で飾り立つた所の貴いものを皆な持つて居るのである。始終さういふ工合に一念から眺めて行くと、此の心の寶位が貴いものはないが、今無盡意菩薩は、此の無上なる貴い寶を觀世音菩薩に供養し奉らうと云はれる。どうぞ觀世音菩薩——いつもいふやうに慈悲を以て心として居る方であるから、其の慈悲心を以て——どうか私の菩提心から獻する所の此の瓔珞をお受け下さるやうにと申した。私は始めに觀世音菩薩がお受取りにならなかつたことを一言したが、それは此の寶はあなた方も持つて居れば私も持つて居る。貴い人も持つて居れば賤しい人も持つて居る、男も持つて居る、女も持つて居る、老幼も皆な持つて居る。施すことも出來なければ受取ることも出來ないものであると言ふことを述べて置いたが、其のことを指して、此に重ねてどうぞ慈悲を以てお受け下さるやうにと押問答した。一方では斯ういふ粗末なものであるけれども差上げたいといふ。一方ではそれでは洵に痛み入るから、それはお收め下さいと、斯ういふ。(今日も互の間にさういふ場合は間ある。其の時に佛が觀世音菩薩に斯ういふお告げがあつた。言はゞ仲裁的に受けたら宜からうと仰せられるのである。佛の仰せに、當さに此の無盡意

菩薩及び四衆天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅迦人非人等を感れむが故に、是の瓔珞を受け
 たら宜からう。成程觀世音菩薩が、いそれと受けにならないのは、それは理由がある。併し此處に
 は其の方面のことを問はずして、慈悲の方面に心に向けてといふのである。即ち佛が無盡意菩薩及び
 四衆天龍其の他諸々の人非人等を感れむが故に、と仰せられるのは慈悲の方面に心に向けてといふの
 である。何時もいふ通り、大慈大悲の心は即ち觀世音菩薩の現はれて居る。大悲といふのは大に悲む
 といふ字であるが、それは涙を垂らして悲しむといふやうな、さういふ悲しみではない。大悲といふ
 のは、與樂拔苦といふ其の拔苦——苦しみを抜く、其の心が大悲といふ字に現はれて居る。大悲とい
 ふのは即ち與樂の方である——樂しみを興へる其の心が此の字に現はれて居る。大悲が拔苦、大慈が
 與樂で、それが觀世音菩薩の本來の持前である。其の心を運び出して、他に理由があらうとも、總代
 人たる無盡意始め四衆其の他諸々の切なる願ひを容れたら宜からうと仰せられる。四衆天龍乾闥婆阿
 脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅迦人非人等、其の解釋は前回に詳しく申したから、今日は一々には申しませ
 ぬ。此に會座に連つて居る所の四衆又は天龍以下人非人等、これで大抵の階級が網羅されて居る。此
 の中には天上の音樂師も居れば歌ひ手も居る、喧嘩好きのものも居れば恐ろしい大蟒も居るが、心を
 翻へせば佛の御弟子である。さういふ色々の階級のものが籠つて居る。現在此の大勢の衆生を感れむ
 といふ厚情を以て、故らに此の瓔珞を受けよと佛が觀世音菩薩にお命じになつた。すると即時に、此

の佛の一言によつて觀世音菩薩が心を翻へした。それは時間といふ時間無く、佛の仰せられる瞬間
 に一寸心を轉じたのである。觀世音菩薩は諸々の四衆及び天龍人非人等を感れんて、其の瓔珞を受け
 給ふた。始めてお受取りになつたのである。何卒して此の滿德莊嚴の貴いものを受取つて、而して是
 れで以て一切衆生を濟度してやりたい。斯ういふ心を運んでお受けになつた。それを受けても我
 一人が私するのではない。一の瓔珞といふのは一心——と斯う早く見ても宜い。此の一心を分けて二
 分となす、二つに分けるのである。二つに分けるといふのは何であるかといふと、今まで度びく言
 ひ現はして來たやうに、事理の二つに分ても宜い。事は事實の事、理は理想とか理性とかいふ理で
 ある。又それを分けて一つは本體といひ、一つは現象といふても宜い。又は相と用さといふても宜い、
 それは色々に分けることが出来る。之を具體的に表はすと一つは法身佛、即ち理といふものを表はし
 たので、其の相が法身佛である。理想といふもの、相を表はしたのである。一つは具體的に見ると報
 身佛になる。兎に角餘り色々の言葉に澤山移し更へると、却つて複雑になつて分り惡いから、今は理
 事の二つに分けて置く、そこで一心の我はれたる瓔珞、此の上も無い貴い瓔珞とも見るべき心を受取
 つて、其心を二様に向けて、分つて二分として、一つは釋迦牟尼佛に、一つは多寶佛塔に奉ると、斯
 ういふ。此の多寶佛塔の委しい話をするのは、矢張り法華經の中に就いて申さねばならぬが、法
 華經には元來二十八品あつて、中に獻寶塔品といふのが一つある。それに就いて見ると、委しい譯を

合點することが出来る。今釋迦牟尼佛は何の現はれであるかといふに、事理の二つに分けて見れば、事實の佛が釋迦牟尼佛である。それから理佛としての佛が、即ち多寶佛といふ佛である。初めに申した通り、佛様といふは、我々一身の現はれであるが、其の佛も多方面に眺めることが出来る。大體に分けると三つの姿に見ることが出来る。即ち三身といふ。一つは法身佛、其の次は報身佛、もう一つは化身佛又は應身佛ともいふ。是れが三身佛で、佛の三身と稱す。之を哲學風に解釋すれば、段々六ヶ敷なる許りで、今は其處まで言ふ必要は無い。三身といふものから見ると、釋迦は此に報身佛に當る。當り前からいふと、釋迦といふ佛は化身佛又は應身佛といふのが常であるけれども、此で分けるといふと、報身佛に持つて行く。報身佛といふのは、自分の修業から報ひられて現はれた佛である。或は報身佛と云はすして、事佛といふても宜い。それから多寶佛は何に當るかといふと、法身佛と斯うなる。若し釋迦は事佛或は報身佛といふならば、多寶佛といふのは法身佛又は理佛といふても宜い。つまり佛は何處から現はれたかといふと、自分の内容に顧みるが宜い。我々の智慧は固より其處にある。我々の慈悲も固より其處にある。もう一つ適切にいふならば、我等皆な共に佛の現はれである。此に觀世音菩薩を主にして云ふならば、我等は皆な觀世音菩薩の現はれてある。今は觀世音菩薩が菩薩といふ位で現はれて居るけれども、其の本を正せば、正法妙如來で即ち佛である。内容が正法妙如來で外形が菩薩の地である。それで無盡意菩薩が今献納せられる瓔珞を取つて、それを二つに分けて一つは事、一つは理といふ。此の事理の二つを原因となし。之を種として、其の結果として現はれる法身佛應身佛の位を得させようといふ。何も佛が外から現はれるのではない。皆な我々の心に有つて居る其のもの、現はれである。其の瓔珞を分けて、分つて二分となし、一分は釋迦牟尼佛に奉り、而して一分は多寶佛に奉つたので、分れば二つであるが、つゞめて仕舞へば一つである。つまり法身佛即ち化身佛ではないか。法身佛といふも化身佛といふも、此の中に含まれて居るではないか——さういふ道理が此なかに含まれて居るのである。それを只だ形の上から瓔珞であるとか、これが貴いものであるとかいふならば、それは表面のことである。世間的のことである。さういふ解釋では全然一種の理窟に陥つて仕舞ふ。形と心とは常に相兼ねて居る。一方は釋迦牟尼佛に奉り、一方は多寶佛塔に奉ると斯ういふ。決して私するのではない。皆の總代として、無盡意菩薩が色々皆なの有つて居る貴い心を、全然あなたにお任せをする、全然献上するといふ。其處が面白い。而して佛果を得ようと斯ういふ。

「無盡意、觀世音菩薩は是くの如き自在神力あつて、娑婆世界に遊び給ふ。」そこで釋迦牟尼佛が、無盡意と、大勢の總代人たる無盡意菩薩を呼びかけて、もとく觀世音菩薩は此の如き自在の神力があるを仰せられた。それは今まで申して來たことを、此で總結する——結びの言葉である。今までどういふことを申して來たかといふと、七難といふとを述べて來た。それから三毒といふことを述べて來

た。慈悲を分けて一つを抜苦といひ。つゞめて見ると、七難といふ苦しみを抜く、三毒といふ苦しみを抜くことになる。七難三毒を一々擧げて、一々それを退治して仕舞ふ。それ等は今日までに大略乍ら解釋した筈である。七難とは言ふまでもなく、火難水難盜難劍難等の七つの難であるが、御互に人の人は身分が好いとか、富貴で宜いとかいふて居つても、いつ何時爆裂彈の見舞を受けるかも知れぬいくら位の人臣を極めても、老いて益々達者でも、いつ何時兇漢に襲はれるかも知れぬ。俺は達者で元氣で、世界に恐ろしいものが無いといつて大總統から進んで大皇帝にならうとしても、到頭病氣の爲めには死んで仕舞はねばならぬ。さういふやうな有様である。さういふ難が世間に澤山ある。又貪瞋痴の三毒、斯ういふ苦しみを抜く許りでなく、——他には與樂といつて、樂しみを與へる。さういふ二つに見て法をお説きになつた。それが三十三身十九説法といふことになつて居る。七難三毒の説法は、消極的に苦しみを抜く方である。次ぎには積極的に、一步進んで樂しみを與へる説法である。どんなものにも轉じて、子供にもなれば婦人にもなる、天龍夜叉人非人等にも身を現して説法する。これ等は皆な既にお話したから、貴女方の記憶に存する筈である。それは何の力で出来たかといふと觀世音菩薩が心の自由を得て居るからである。心の自由といふのは、言ひ直すと解脱である。解脱といふのは物に滞らぬことである。我が悟りによつて物を恐れなければ、實に自由自在の力が得られよう。心は元來自由なものに拘はらず、我々は迷ふて不自由になつて居るのである。其の不自由とい

ふ穢れ來つた所の着物を脱ぎ棄て、仕舞へば、赤裸々の身體である。其の赤裸々な自由自在の身體を求めようといふのが、佛教修行の目的である。これは觀世音菩薩に限らないが、今は觀世音菩薩が主になつて居る。兎に角佛は自由自在である。菩薩は寢床に始終尻を下ろして居るのではない。何處へでも飛んで行く。天龍夜叉乾闥婆の中でも何處へでも身を現はす。此處と限つて寢床を構へて居るといふのではない。此處でなければ住まへないといふ不自由なものではない。自在神通力といふのはそれである。神通力といへば特別の力のやうに思ふが、決してさうではない。世間の言葉にも、聖人は物に凝滞せずして能く世と推し移ると、儒者の言葉にも云つて居るが、それと同じことである。何物にも滞らない引つ着かないといふことである。引つ着く時には柳は緑になることが出来ない。花は紅になることが出来ない。引つ着かないから、柳は緑に花は紅に、秋は紅葉する、春は花咲くといふのである。丁度草花に置く露のやうなものである。露は透明玲瓏な清らかなものであるから、それが紅葉に置けば紅の珠とも見える。又柳の上に持つて行けば、碧瑠璃の珠の如くに見える。置き所によつて皆な自由である。それが即ち神力といふのである。觀世音菩薩は此の通りの自在なる神通の力がある爲めに、娑婆世界に遊び給ふ。さういふ滞りの無い汚れの無い力であるから、汚れた滞りのある、不仕合せな、洵に味氣ない、涙の谷位な、苦しみの海見たよな此の娑婆世界、さういふ汚らしい中に這入つて、遊戯三昧せられるといふ。觀世音菩薩が此の娑婆世界にお出でになるのは

遊戯三昧——遊び戯れる如くである。丁度小供が飯事して遊ぶと同じやうな、自由な樂な心持ちを以て苦しみ惱みの多い衆生を濟度して遣はさうと、斯ういふのである。娑婆世界の娑婆といふのは、前にもお話しした如く、これは梵語であつて、翻譯すれば忍土である。苦しみ惱みの多い世の中といふことである。其の娑婆世界に遊び給ふと斯ういふ。これは今までの總ての説法を總結した言葉である。これから卷を改めて、無盡意菩薩の偈があるが、それは次に譲つて今日は此處までにして置きます。

第十七回

爾時無盡意菩薩以偈問曰

世尊妙相具 我今重問彼 佛子何因緣 名爲觀世音

具足妙相尊 偈答無盡意 汝觀聽音行 善應諸方所

弘誓深如海 歷劫不思議 侍多千億佛 發大清淨願

和訓 爾の時、無盡意菩薩偈を以て問ふて曰く、世尊妙相を具し給ふ、我れ今重ねて彼を問ひ奉らん佛子何の因縁を以てか、名つけて觀世音と爲す。妙相を具足し給へる尊、偈を以て無盡意に答へ給はく

汝聽けよ觀音の行は、善く諸々の方所に應し、弘誓深きこと海の如く、歷劫にも思議せられず。多の千億の佛に侍へて、大清淨の願を發せり。

講話 此普門品は、丁度此前に講じた所までを長行の文といひ、これから以後が、偈を以て更に長行の文の意味を繰返すのである。斯いふことは、つまり餘計のやうなものであるけれども、初め長行の文をお説になつた時期に於て、どうもまだ十分真相が腹に這入らない人も、多くの中には偶々ある。それから又其時分には、餘儀無い色々の故障があつて、會座に列なることが出來ず、是から新たに來つて法に就かうといふやうな、さういふ人もある。それ故に重ねて其の意味のことを此にお説になるのである。偈といふ字は、これは矢張り佛教の説法の一つで、經文に於ての一の特色ある所の文字であらうと思ふ。大體偈といふことは、或は頌といふたりすることがある、偈といふのは梵語の偈陀を漢譯すると孤起又は妙玄といひ、頌といふ字は頌讚など、續く字であるから、ほめる意味がある、徳をほめる、いふやうなことで、此では菩薩が佛の徳を讚美し頌歎する意味である。此の頌に風頌と重頌との二つがある。其の一つ即ち風頌はどんなものかといふに、諷じて而してほめる。故に本來ほめるといふことが持ち前であるけれども、たゞほめる許りが諷頌ではない。例を擧げていふと、諸行無常、寂滅爲樂など、いひ。又、或は迷或三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北、などいふものは皆諷頌の一つである。諷頌は或場合には孤起といふ字を使ふ。單獨に佛法の深義を頌表するの

であるから孤起といふ。それから重頌といふのは、どういふ意味であるかといふと、今まであつた長行の文、即ち是れ迄觀音の徳を段々述べて来た、それを再び偈を以て説く如きが即ちそれである。それ故に重ねて説くといふ意味で、重頌といふのである。猶重頌を應頌といふ場合もあるが、其時の意味は、長行の文にあつた説法の意味と照應するといふのである。互ひに照應して前後チャンと關係を有つて居る意味である。重頌ともいふたり應頌ともいふたりするのは、さういふ意味である。これから説く所の偈の意味は即ち重頌であり應頌である。一遍長行の文で散文的に説法したものを、詩のやうな偈で再び其の意味を述べるのである。

そこで爾の時に無盡意菩薩が偈を以て問ふて宣はく——毎度云ふ通り、無盡意菩薩は大衆に代つて始終問主となつて居る、問ふ方の主になつて居る。けれども、これは我々の活きた宗旨からいふと、獨り大衆の總代たる無盡意菩薩に許り委任して置くのではない。會座に列なつて居るものは、老若男女に拘はらず、皆一の無盡意菩薩である。無盡意菩薩は何かといふと、即ち我々である。我々は直き直きに佛に向つて法を聴く、如何にも親しく感ぜられる、そこで述べられる佛の法が、我々に向つて親しく感じられるのである。其の時に無盡意菩薩が偈を以て問ふて云はれるには、「世尊妙相を具へ給へり、」——これを平たくいへば世尊とか如來とかいふことは、今までもいふた通り、總てお釋迦様を尊稱した言葉である。兎に角三界に大導師たる所の世尊は、妙相を具へ給へりと斯ういふ。妙相を分け

ていふと、佛は我々と違つて、三十二相八十種好といふて、三十二通り變つたお姿がある。其の三十二通りの變つたお姿の中にも、又細かに分けて見ると、八十種類の好きお姿を具へて居られる。平たく云へばそれである。——本來姿といふものは、餘程大事なものである。これは東洋には、姿に依つて其の人を判じたり、骨相に依つて運命を見たりする、昔も今もあることである。東洋許りではなく、西洋にもあるらしい。一體姿が其姿となるには必ず由つて來る所があつて。漫りに偶然と現はれたものではない。人間は人間として姿に於て大體同じであるが、馬とか犬とか猫とかは、又それ相應に其姿を現はして居る。姿は心の現はれに外ならないのである。猫のやうな境涯にも、猫相應に現はれる姿がある。犬のやうな境涯にも、犬相應に現はれる姿がある。馬に於ても亦それ相當に姿を現はして居る。つまり姿は心の反映であるといふも宜い。それが證據に、美人であるとか好男子であるとかいふても、其のものが怒つた時の姿を見ると、如何に平生優しい顔であつても、美しい姿であつても、非常に不快な感じを現はするのである。又泣いて居る時の姿を見ても、矢張り愉快でない顔を現はするのである。所謂表情といふ言葉がある通り、心の現はれて居る姿である。殊に婦人が大に姿に注意するのは、昔からたしなみと云はれて、悪いことではないが、併しながら、人間が餘り外面の姿に重きを置くと、内心が留守になる。總て世間の仕事は其の通りで、一方に重きを置くと一方がお留守になるのは、どうも免れないことである。それ故に佛の姿が妙相を具へて居るといふのは、決して偶

然ではない、好き相恰を有つべき所由がある。つまり慈悲、忍辱で、同情が深い、心柄が優しい、それ故に此の如く現はれて居るのである。例へば、須達長者の媳婦は大變評判の美人であつたが、人間は顔が美しく姿が好と、存外心の方を無視する爲に、色々嫉妬が起つたり、虚榮心が起つたり又は憤つたり、偽りの心が起つたりするものである。それでは美人ではない。本當の美人は心からして麗はしくなければならぬ。須達長者の媳婦は心から美しい美人であつた。此の意味からして形よりも寧ろ心が大切である。形の美は時々刻々に變化して、年寄る程見にくく變化して、段々朽ち果てる許りである。それを飾つた所がそれは一時的に外ならない。之に反して心の美といふものは、一日経てば一日、一年経てば一年、言はゞ心は年寄る程美しくなる。修行を積み修養を重ねる程、段々若返つて行く。心と形とは全くあべこべである。心に重きを措くからお前は美しいといつて、鹿野苑で王耶女に對して徳を説いたのは世尊である。三十二相八十種好を具へる、……生々世々生れ換り死に換り、有らゆる功德善根を積んだものが此の如く現はれたのである。昔の英雄豪傑などの姿も立派であるけれども、萬徳圓滿願行具足したものゝ姿は猶貴といふ。世尊妙相具佛のお姿はその通り具つて居つたのである。

「我れ今重ねて彼を問ひ奉らむ、佛子何の因縁あつてか、名づけて觀世音と爲す」——我れといふのは無盡意菩薩である。重ねて彼を問ふ、彼といふのは觀世音菩薩のこと、無盡意菩薩が重ねて佛に向つて觀世音菩薩のことを問ふのである。佛子何の因縁あつてか名づけて觀世音となす。佛子といふ

のは、佛の種子の成熟したものは皆な佛子である。是れは菩薩許りではない。我々でも淨い所の信仰を有つて居るものは皆佛子と謂ふて宜い。……要するに淨心を懷いて居る人は皆佛子と謂ふて宜い。其の中でどういふ因縁あつてか、名づけて觀世音といふのであるか、是れは本文にあつたが、念の爲めに重ねて、理由因縁を尋ねるのである。(觀世音菩薩、或は地藏菩薩、或は藥師如來、此れ等の名は漫りに附けたものではない。)なぜ觀世音と名づけたのであるか、斯う尋ねると、妙相を具足し給へる尊、即ち三十二相、八十種好、世にも稀なる所の美妙相の尊、即ち佛が之に對して偈を以て無盡意に答へ給はく、「汝聽けよ觀音の行は、善く諸々の方所に應ず」と斯ういふ。今ありくと佛は三千年以前にお隠れになつたといふが、併し一點信仰上から眺めると、佛は現存して居る、決して隠れたのではない、これはチャンとありくと現はれて居る。其の活きた佛から、直ちに我々は教を受けるのである。即ち無盡意菩薩を我々自身と認める。其の無盡意菩薩に偈を以て答へ給ふ。偈は五言或は七言と色々あるが、此れは五言である。汝聽けよ——汝とは勿論無盡意をさすのであるが、同時に我々にお答へになると見て宜い。觀音の行——言はゞ讀んで字の通りで宜いのだけれども、初めから段々お話して來た通り、先づ觀音の行といふものは、詳しくいふと限りもないが、一言でいふと一心三觀の妙智力といふ。一心三觀といふことは、先きにもお話したやうであるから、或は重複するかも知れないが、三觀といふことは何かといふと、言ふまでもなく空、假、中の三つである。天地間ありと有ら

ゆる一切の相何物をも總て此の三方面から観るのである。即ち空觀、假觀、中道觀といふ。凡そ一つのものゝ其處にあると、それを一面から見ると、心の現はれて物ではない。これが空觀といふので、何も無いと観るのである。無いとは、心といふものに換へていふので、茶椀は何の現はれかといふと、心の現はれである。それが空觀である。姿や形に拘はらず、其の形なりに心が現はれるのが空觀である。言ひ換へると、姿といふものに何の姿も無いと謂ふて宜い。同時に他面からは其のものが假觀といふて假りの相である。内から眺めると空觀であるが、外から眺めると假觀で、假りの相である。色々の因縁が和合した所から、色々の姿が現はれたのである。假りといふは洵に深く考へた文字である。此の本堂の如きも、柱、敷居、疊、石、竹、色々の物質が組合はされて立派に出来て居るけれども假りの現はれてある。之を一々解きほどし、元の如く壊した以上、一々別にした以上は、野原同然である。けれども矢張り現はれる所は、現に此の通り秩序正しく、洵に方法宜しきを得て立派な本堂となつて現はれて居る。それが假觀である。處かそれならば物質の現はれかといふに、さうでもない。物質の中に心が表現されて居る。心は何かといふと、心即ち物質の現はれである。心と形と、物質と精神と、有形と無形と、何といふて宜いか、……何も別つべきものが無い。それを何と言ひ現はしたならば宜いかといふに、中道觀である。空に非ず假に非ず、而して空に屬し假に屬して、空と假との中間になつて居る。どつちへも片寄つて居ない。さういふ三つの見方がある。併し三と云ふけ

れども、其の實一心の現はれてある。一心が空、假、中道と現はれて居るのである。それ故に一心三觀といふ。これは教相門によつて講釋をすると、もつと詳しいことを云はねばならぬがそれは後日其機會があるから、此では大體だけといふ、文字だけをいふ。一心三觀のことは、即ち空觀、假觀、中道觀、此の三通りの見方である。觀音はさういふ見方を有つて居る。其の一心三觀上より物を見やうといふ、決して耳許りで聴くのではない、目許りで物を見るのではない。目と耳と鼻と口と、總ての身體が融通せられて居る。鼻、口、目、耳と機關は大體に分れて居るが、總て融通せられて居る。一心三觀の大きな耳から見ると融通せられて居る。口で書くともいひ鼻で喰ふともいひ、……全く自由がさく。けれども、人間は其の通り自由の利く機關を有つて居るが、餘り便利過ぎて、機關に重きを措いて、何か標準に五官で物を教へる癖がある。目に見へないものは眞理でないといふやうなことを直ぐいふ。五官許りに囚はれると、遠方を見ることが出来なくなる。所が觀音は一心三觀の妙智力を以て世の中を見る。唯だ見る許りでなく冷靜に悟る。目を以て見る許りでなく、直きに身を以て實行の上に現はす。要するに興樂拔苦で、大悲といふことは拔苦、大慈といふことは興樂、大慈大悲は即ち興樂拔苦である。其の實行の仕方はどうかといふと、長行の説法にもあつた通り、觀音は初めから、七難といふ七通りの災難、それを一々逃れさせたいといふ。我々は始終七難の爲めに苦しめられて居る、其の苦しみを抜かうといふのである。又貪瞋癡の三毒、之に依つても非常に苦しめられて

居る。其の苦しみを抜かうといふのである。それから二求の求め、それを叶へさせてやらう。それに就いて三十三身十九說法、三十三通りに姿を變へて、而して十九通りに說法をなされた。それは三十三に限つたことではない、又十九に限つたことでもない。それが觀音の行である。汝聽けよ觀音の行——斯ういふやうな觀音の行ひであるから、能く諸々の場所に應ずる。方所といふは、言はゞ空間的場所といふても宜い。國土といふても宜い。國土といふことに就いても、寂光淨土とか十方佛土とかいふのがあつたり、同居土或は方便土ともいふものもあり、色々あるけれどもつまり、娑婆も淨土も遠いも近いも、何處にもかしこにも應ずる。大鼓見たやうなもので、大きく叩けば大きく應へる。力を籠めて叩けばドーンとなる、小さく叩けばドンと應ずる。高い所にも届くし、近い所にも届く。或は明鏡の姿を寫す。出て來たものは何でも寫す。天竺錫蘭倫敦巴理直きに其儘に現はれて來る。天竺にも一ぱい英國にも一ぱい、狭い所ではない、十方にも映ずる所があつて現はれる。それ故に菩薩は意生身といふて、心の儘に生れて行くのである。——本來心といふものは頭に引つ附いて居るとか、生理學者の云ふが如く、腦の中樞に機關があつて、それから生ずる、頭を取つて仕舞へば心は無くなつて仕舞ふなどといふ譯のものではない。又昔の人は心は臍の下にくつ附いて居ると思つて、氣海丹田など稱して居る。成程さういふ所にも見へぬでもないが、一體心は頭にも一ぱい、腹にも一ぱい手足にも一ぱい、廣く所にも一ぱい、狭い所にも一ぱい、何處にも現はれない所はなく、到らない所

はない。羽なくして飛ぶことも出來れば、足無くして到ることも出來る。錢のことを足が無くともあつて、あしといふけれども、錢どころの騒ぎではない。我々の心は手足の相を現はさず手足の用をなして居る。總て心の現はれる通りに身體も現はれて居る。肉の目を當てにして居るから、物が見えるの見へないのと、いふけれども、五官を超越した所の一隻眼を以て眺めて見ると、心と身體は別々のものではない。さういふ鹽梅に能く諸々の方所に應ずるといふ、應じない所はないのである。

「弘誓の深きこと海の如く、歴劫にも思議せられず」——斯ういふ佛菩薩方は、皆な弘誓——誓願といふても宜く、或は願念といふたりする。少し文字が變るけれども、意味は大抵同じことである——皆な誓ひといふものがある。坐禪修行するといふても、唯だ學問的にするとか或は物好きにするのではない。此の修行學問をして、而して一切衆生を濟度してやりたい、それが目的である。即ちさういふ誓ひが皆なある。誓願といふことを詳しく分けると、通願、別願の二つとなる。通願といふのは共通した誓願である。別願といふことは、一の佛、一の菩薩、皆な別々に誓願を有つて居る。一例を擧げると、釋迦牟尼佛は五百通り、阿彌陀は四十八通りの誓願がある。それには各々特色がある。觀音には三十三といふものがあり、藥師如來には十二の誓願といふものがある。さういふものが別願である。通願といふことは、我々も矢張り佛の弟子として、菩薩の片割れとして、通願を有つて居る。共通した誓願を有つて居る。それは何かといふと、我々が朝晩唱へる所の、衆生無邊誓願度、煩惱無盡

誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成、之を四弘誓願といふのである。今いふた通り、坊さん讀みにすると其の通りである。衆生は無邊であるけれども、誓つて度せんことを願ふ。煩惱は無盡にあるけれども、誓つて斷たんことを願ふ。法門は無量であるけれども、誓つて學ばんことを願ふ。佛道は無上であるけれども、誓つて成就せんことを願ふ。これが四弘誓願である。汝は何の爲めに坐禪工夫するのかと問ふと、はつきり答へ得るものが少ない。誰れしも緩くり考へると答へることが出来る譯であるけれども、一寸直ぐには答へられない。公案でも坐禪でも學問でも、何れも四弘誓願の通りに進んで行くべきである。其の第一が衆生濟度の誓願、これが最初の動機である。生きとし活けるものは、無量無邊に澤山ある、此の衆生は盡きるといふことはないけれども、併し衆生の盡さない内は我れの願ひも盡さない、衆生は無邊にあるけれども、誓つて濟度せんことを願ふ。これが爲めに色々頭を使つて居る。煩惱といふものは、一點の無明から、五慾三毒八萬四千の煩惱となつて、中々盡きることが無いけれども、誓つて斷ち盡さんことを願ふ。而して三番目には、法門無量で、有らゆる學問、有らゆる宗教といふものは、無量無邊に數限りもないが、これも亦私は誓つて、之を學得し修行せんことを願ふ。四番目は佛道無上、佛の道は此の上もなく、實に道の極であり真理の極致であるけれども、我は誓つて之を成就せんことを願ふ。此の四弘誓願は、見やうによつては色々であらうけれども、要するに佛道を成就するは何の爲めであるかといふと、衆生濟度の爲めである。衆生濟度は

どうしたならば宜いか、佛道を成就しなければならぬ。斯ういふ工合ひに初め終り、終と初めと始終連關して居るのである。これが四弘誓願である。斯ういふ鹽梅であるから、其の大なる誓の深いことは海の如く、底知れずである。それ故に佛法は大海、漸く入りて漸く深しともいふ。歴劫思議せられずと斯ういふ。劫は長い時間。此の劫のことも、通俗に分り易くいふと、四十餘方里の大きな石があつて。其處へ百年目に一遍づゝ天人が天降つて、其の羽衣を以て石に觸はる、それが段々重なる、遂に石が磨滅して仕舞ふ、其の間非常の長年月を費すことは言ふまでもない。此の石の磨滅した時が即ち一劫である。劫の字に就いては色々説があるけれども、通俗に分り易く云へば、さういふ意味である。さういふ長時間に亘つても、觀世音菩薩の功德は絶へて思議せられない。我々の小さな思慮分別では、中々批評を加へようとしても及ばないことである。弘誓深きことは海の如く、劫を歴て思議せられない所のものと斯う云ふのである。

それから多の千億佛といふのは、千億が多といふのであるから非常に澤山といふ事で、其數限りのなきあらゆる諸佛、無量無邊の諸佛、其佛には前にも云ふた通り別願といふて夫々其佛に於て特別の志願といふものがある、例へば阿彌陀佛には極樂往生の志願があり、藥師には諸病悉除の志願があると云ふ工合に諸佛の志願は別願から見ると一々異なつて居る、其様々の志願を持つて御座る多の千億佛に待へてといふのであるから、つまりあらゆる諸佛の御援けによりてといふことで、云ひ換ゆれば千

此の三つの秘密の外に無い、即ち身に行ふ所悉く是れ成佛の印し、口に言ふ所悉く眞言、心に念ずる所悉く三摩地、三密悉く相應する時に即身成佛するといふ。此の口、此の身、此の心、言はば三拍子チャンと一緒になつた所に、そこに信仰の光りが現はれて来る。今世間の宗教者は、念佛といふと唯だ後生を願ふこと、——口に名號を唱へることを念佛といふ。南無阿彌陀佛と口に許り唱へることのやうに思ふて居るけれども、實は口許りではいけない。口に唱へると同時に矢張り身にそれを現はす。口に名號を唱へる許りではまだ足りないから、身に現はす。身に現はす許りでも心が留守になつて居つてはいけないから、心に念じて空しく過さすといふ。其の心とは、言ひ直すと誠といふ一字である。此の口も身も而して此の心も、此の三つの業が殆んど一つになつて、即ち一心不亂の境涯に到つて、初めて其處に信仰の光りといふものが輝きを發して来る。今も其の通り、何事に會ふても南無觀世音菩薩——と斯う口に唱へて身に現はし心に念じた其時には、其の中に嚴しくいふと、火も燒くこと能はず水も漂はすこと能はざるものがあるといふて決して差支無い。此の中には水一滴と雖も通ずることが出来ない火一點と雖も燒くとが出来ない。故に十句觀音經には、朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心、といふてある。これは棒讀みにしたのであるが、碎いて讀めば、朝に觀世音を念じ暮に觀世音を念じ、念々心より起り念々心を離れずと讀むのである。即ち夜の明けから日の暮れるまで觀世音を念じて、一刻も南無觀世音菩薩といふことを心の先きから離さない。詳

しくいふと時から時まで、行住坐臥、仕事をして居る時でも、おつとして居る時でも、寢て居る時でも、坐つて居る時でも、又人に應接して居る時でも、外に出歩いて居る時でも、時から時までずつと觀世音菩薩の大慈悲心、大智慧、大勇猛心といふものを體得して、身口意の三業の上に實現する。故に念々從心起、——一念く心より起ると十句觀音經に書いてあるのである。南無觀世音菩薩と唱へるのは、中心の誠から起つて来るので、口に許り唱へるのではない。心より起るといふのは、即ち誠の心から湧き出で、來るといふのである。明治天皇の御製に、「目に見へぬ神に向ひて愧ぢざるは、人の心の誠なりけり」。もう一言もこれ以上に加へることが出来ない。全くそれである。それが身口意の三業取りも直さず一つになつた所て、其處を眞言の方でいふと三密の加持といふ。加持といふのは、佛の心が我に加はり、佛の心を我に維持して居るのである。言ひ換へれば念々從心起といふ願ひが我にあり、我に佛の心が達すると斯ういふ。三密の加持といふのは即ち其の意味である。故に名を聞き及び身を見而して心に念じて空しく過さずと斯ういふ。そこに於ては少しの隙間も無い。故に之を深く信するならば、家庭の上になつても、少くとも進んで仕事をする力は且らく措いて、其の前に第一に大なる慰安を得るであらう。人間には苦しいこと辛いこと怨めしいこと悔しいこと憎しいこと可愛いこと絶間無く起つて來るのが我々の迷ひの常である。情波色浪の大波小波が絶えず打返して居る。其の大波小波の中に立つて、身口意の三業、一心不亂に觀世音菩薩を念じたならば、其處に心

の慰安を得るであらう。心の慰安を得るだけでは消極的であるが、もう一つ進んで心の力を本として
 どんな複雑な世の中に這入つても、其處に心の据場があつたならば、安心して仕事をすることが出来
 る。斯ういふ時に觀世音菩薩は我々に對して活きた佛である。朝から晩まで愉快に働いて、次から次
 へと良き希望が心の内に頭を擧げて來ると同時に、感謝の念が常に絶へないのである。人間は希望に
 生きて居るといふて宜しい。希望無き人間は、如何に好く食ひ暖く着て而して長生きしても、其の存
 在して居る意義が失はれて居るので、生きて居る甲斐が無いのである。人間は日々の希望を無限に
 重ねて、何處までも進んで行くといふ所に生存の意義があるのである。生々世々、堅い言葉でいふと
 大理想を現はして、世界の太平和に達するまで屈せず撓せず進むといふ、さういふ理想が湧て出ると
 同時に、お禮を申上げる感謝の念が絶へず日々出て來るのである。同じやうな顔をして居る我々も、
 一人一人尋ねて見ると、假令身は綾羅錦繡を纏ひ口は山海の珍味に飽き金殿玉樓に起臥して居つても
 朝から晩まで不平、不満足、不愉快といふやうな、さういふものの中に苦しんで居る人もある。あ
 ても無い斯うでもないといふ、何につけても感謝の意、希望を懐くといふ美はしい心の失せた人は、何も
 かも不足不満で、何處まで行つても貪慾、嗔恚、愚癡とさういふ三毒、それから五慾、さういふもの
 に追ひ廻はされて大満足の境遇が得られない。所謂有財餓鬼で、色々の財寶を持ちながら、餓鬼の心
 を以て目をつぶつて居る人が、世界に段々多いのである。然るに今此の大慈大悲の觀世音菩薩を、洵

に我が身體の上に實現する。活現する、而して名を聞き及び身を見、心に念じて空しからずといふ次第
 になつて來ると、洵に愉快此の上も無く、天をも尤めず人をも怨みず、大満足の心を捧げて、日々お
 禮を申しながら暮らすことが出来る。故に能く諸々の有苦を滅すると斯ういふ。
 諸々の有苦といふのは、今まで前段にあつた長行の文の中に、七難三毒とあるそれ許りではない、或
 は四苦八苦、それも何時かお話した。又は三苦、つゝめていふと三つの苦しみといふ。一寸いふて見
 ると、同じ苦しみてても苦苦といふ一つの苦みがある、其の次は壞苦——破壊する苦み、それから行苦、
 佛敎の定義では遷流を行とする。若し三苦といふことに縮めていふならば、今いふた通り苦苦、壞苦、
 行苦と斯ういふ。苦苦といふ文字は全體どういふ意味かといふと、我々はつまり苦みの因縁によつて
 此に生れ出て來て、衆苦といふて諸々の苦みを受けて朝から晩まで苦しんで居る。苦の因縁に依つて
 而して諸々の衆苦を受くるといふのである。それは一々持つて廻つて言はないでも、貴女方が色々の
 ものを經驗してお出でになつたことを觀じて見ると、能く合點が行く、多くの苦みの因縁に由つて此
 に身を持來つて、而して更に又色々のことをして新たに苦しみを受けつゝある。斯ういふ工合に觀じ
 て來ると、片々に樂な方面もあり、又一方に苦しみの方面が廻つて來る。故に苦中の樂、樂中の苦と
 斯ういふ。其間にありて大に自分の心を安んずる所謂宗教的安心が無ければ、苦に生れて苦に死ぬ、
 何ものも皆苦ならざるは無してある。唯だ一の信仰があり又は徹底した力を得たものにあつては、苦

しみを轉じて樂しみとなすことが出来る。それだけの作用があつて新たに生れて來ると、禍を轉じて福ひとなすことが出来る。其の差がある。無宗教者と宗教者とを併せ考へて見ると、一方は學問あり理窟あり而して榮耀あり富貴ありといふても、一點の宗教心無き人は、常に苦しみを生れて苦しみに死んで行く。それが歴々として現はれて居る。それを苦苦と斯ういふ。次に壞苦といふは、即ち破壊の苦しみ。これは苦と樂とを比較して考れば能く分る。或る一つの樂みが失せた時には必ず一つの苦みを感じて居る。所謂歡樂極まつて哀情多しで、何か斯ういふ快いことをしたとか面白い樂しいことをしたとかいふ時に、それが盡きた場合は最早悲しみ苦しみを感じて居るのである。世の中のことは皆それである。壞の字は目前の樂しみが潰れたといふ意味である。それが壞苦。次に行苦といふのは前にいふた通り遷流の苦、色々遷り變つて來る苦み。「いろはにほへとちりぬるを」、弘法大師が諸行無常、寂滅爲樂の意をいろは歌に作つたやうに、「わかよたれそつねならむ、此の世の中は常に遷り變つて行く、殆んど滾々として流れて盡きない所の水の如き有様である。能く何かの本で見たことであるが、例へば婦人の身の上でもさうで、小供／＼と思つて居るのが何時の間にか成人して、娘盛りになつたかと思ふと、もう嫁に行つて子を持つて母となり、忽ちお婆さんになつて仕舞ふ。それを何とか面白い言葉に書いてあるが、「世の中の娘は嫁と花咲きて嬢としぼんで婆々と散り行く」。其の通りに違ひ無い、花に譬へて見るとさういふ有様である。若いとか年寄りとか美しいとか醜いとかいふ内に

ずん／＼遠慮容赦も無しに老ひ朽ちて行く、何物か始終我々を追つ掛けて居る有様で、常に遷流して居る、移り變つて居る。さういふ苦しみである。併し其の苦しみも、今申した信仰心でどうにでも取り除くことが出来る。若し此の身口意の三業で、活きた觀世音菩薩を心の誠から信ずることが出来るならば、能く諸々の有苦を滅する。有苦とは苦しみありといふのではない、有らゆる苦しみといふ意味である。三界——慾界、色界、無色界といふ、つまり慾の世界、色の世界——色戀の意味ではない、それから心の上の世界と此の三つ、どつちにしても多少の煩惱は免れない。それを總稱して三界といふ。此の三界といふものを、もう少し詳しく分けると廿五苦といふことになる。衆苦の多き意味からいふと、三界といふものも、ずつと下は地獄、餓鬼、畜生、脩羅、此等の所皆な苦しみあり、それから段々人間界それから天上界に及ぶ。それから同じ慾界の中にも、我々よりも優れた六慾があつたり、それから色界には自然的といふやうなものがあつたり、一寸言ふ丈けでは通しないが、それから色を離れた世界——形を離れた世界、心の世界になつても、まだ心が本當の解脱した境涯に到らないから苦しみがあつた。要するに三界は苦しみであつて其の色々の苦を算へると、合せて二十五通りになるといふのである。これは皆迷ひから來るので、此の廿五苦の中には、今いふた行苦許りではなく、苦苦、壞苦皆含まれて居るのである。さういふ苦しみを奇麗に滅ぼすことが出来るのは、觀世音菩薩のお蔭である。

「假令害意を興して大火坑に推落さるゝも、彼の觀音の力を念ずれば」——之を「念ずる彼の觀音力と讀む人もあるが、自分の考へではどつちに讀んでも宜い、此處では彼の觀音の力を念ずればと讀むことにする、其の方が誰にも通じ易い——火坑變じて池と成る。假令若し此に惡人があつて、我に向つて一つの害意を爲す場合があるとも、と斯ういふ。どうも人といふものは、或場合には同胞兄弟と云はれると同時に、又或場合には仇敵の如くなる。此方では其の人に對して何等惡意を挿さぬに、向ふの人が惡意、害意を以て自分に對することがある。同じ同僚の仲間同志でも、自分が出世をするに隣りの人が嫉み惡む。女同志でも矢張りさうである。一人運が好いと、外の女がそれを羨むと同時に嫉み惡む。又容貌が美しい、自分が及ばぬといふ點から憎み妬む。甚しきは害意を挿さむ。世の中はさうしたものが多し。それは個人間許りではない。それ／＼團體的に行動して居るものでも、矢張りさういふ所が多い。宗教界でも同じ人間の集まりであるから、中々さういふことがある。如何にも世の中は持ちつ持たれつ、お互睦ましくして行かねばならぬのであるが、宗教心が通つて居ないと、嫉みそねみの心が銘々に起つて、人に向つて害意を起すやうになる。處が宗教心があると、同じく害意を受けても其の受け方が違ふ。普通ならば人から害意を受けると、自分も人に向つて害意を起すやうになるが、宗教心があると、例へば強盜が這入つて來て直ちに自分を脅かす時にでも、自分は之に對して一點同情の念、大慈大悲の心があれば其の受け方が大に違ふ。昔の歌に「人は皆吉野の山

の花と見よ、我を浪華の蘆とこそ思へ」。中々面白い。多くの人が害意を挿んで我に向つても、自分の方から向ふに對して、常に吉野の花見たよな美しい人と見るが宜しい。又人を使ふ身分の人などは雇人に對して短所を見るのはいけない。務めて短所を忘れて長所を見るが宜い。多くの人を使ふにはさうなければならぬ。馬鹿にも長所があるもので、昔し楠正成は部下を使ふに、さういふ遣り方をやつたものである。有名な話であるが、正成の部下に一人の馬鹿者があつた。外のことは何も出來ないが、泣くこと許りは上手である。そこで正成はそれで宜い、それなら用ゐてやらうといふて、泣き上手を巧みに使つて大に敵を破つたことがある。さういふ譯で人間は務めて人の至らない所を忘れて其の特長を認めて使ふやうにするが宜い。まして況んや迫害の多い世の中である。向ふがどういふ敵意を挿んでやつて來まいものでもない。唯だ我に之を受流す力があれば、敵を化して味方にする事も出来る。要するに人が如何なる害意を以て我に加ふるも、受流す力を養つて置けば何も恐るゝことはない。即ち宗教の力、信仰の力があつたなら、必ず之を受流すことが出来る、つまり惡意を以て來たものを、我は受取つて善意に解釋する。蓮月尼の歌にも申す通り、「宿かさぬ人のつらさを情けにて馳ろ月夜の花の下臥」。折角一夜の宿を頼まうと思つても貸して呉れない。一寸考へれば如何にもつらい仕打である。併しそれが爲め、馳ろ月夜に爛熳と咲き匂ふ櫻の下に假寐をすることが出來た。此の風流は金殿玉樓に絹布團に包まれて寢るもの、一寸思ひ附かぬことであらう。若しあの時宿の主人が

我が願ひを聽いて呉れたなら、斯ういふ樂みが得られなかつたのであらう。他人のつらさが却つて情けになつたといふのである。中々面白い。矢張りさういふことは、宗教心即ち慈悲心で養つて行かねばならぬ。假使今ま如何なる人間が、我に向つて害意を起し、大火坑に推し落しても——斯ういふことは事實上無いかも知れぬ。火の穴の中に推し落とすといふやうな惨酷なことは、形の上にはあるまいけれども、心の中に現在する人間の嫉み憎みといふものは、人を火の穴見たやうな境涯に陥すことが多いのである。何時も申す通り、佛經の解釋には「理釋と事釋——道理の解釋と事實の解釋」と二通りある。事實上の解釋から見れば、大火事が起ると、ポンプや其の他有らゆる消防の道具を提出して大騒ぎをすれば消すことも出来る。現實には大火事を防ぐ道具があるけれども、心の火の大きな場合には、佛は瞋恚の火——怒ることを火に譬へて居る、瞋恚の火は能く功德の林を滅すと仰せられて居る。斯ういふ文句が經文に出て居る。涅槃經に瞋恚の火は諸々一切の善行を破壊すると説かれて居る。つまり怒る心を火に譬へたので、此の文句を道理的に解釋したのである。今日東京には大火事が無くなつたが、精神上から見れば到る處に大火事がある。我々人間の皮を被つて居るもの、心の眼を透して此の人間界を眺めて見ると、矢張り嫉みそねみ憎みといふことが、多く怒つた場合に心に起る様である。昔の人は一度び怒つて天下治るといふ事もあつたが、さういふ怒り方ならば別に悪いことはない。寧ろ何度怒つても、天下が治まるならば怒るだけ宜い譯である。併し是れは公共の怒りで私

の怒りではない。天下の爲め國家の爲めに怒るのである。さういふ爲めに昔の人は大に怒る。又我に向つて腹を立てるのもある。人を怒らずして己れを怒る、自分を責め自分を憎むのである。斯んなに怠けて居つてはいけない、斯う無慈悲ではいけない、何でも自分を何處までも叩き上げなければならぬといふて、我に向つて我を怒るのは、是れは怒りの良き怒りである。(一概には言へないが)併し大抵の怒る人は、自分を可愛がる人に相違ない。假令他から惡意に仕向けられて、大火坑の中に推落される境涯になつても、怒ることは人を使ふて居る人と人に使はれて居る人とに依つて違ふ。人に使はれて居る人は怒つても仕方が無い、自分の意を通すことが出来ないから怒ることも少いが、人を使ふて居る人は、怒れば我儘が通る。相手の人が心に服さないでも、怒鳴りつけて服させることが出来る。怒りの心といふものは、假りに人間に等級を別けると上等の人に害が多い。世間に所謂自分の樂な人に怒りの心が盛んなのは、大に誠めなければならぬ。どんな淺ましい境涯に推落されても、腹を立ててどうなる。悔しくて耐らなくとも、一と息を翻へして、南無大慈大悲の觀世音菩薩を心に念じ身口意の三業を喚び起して見よ、怒りの焔ははたと消へて仕舞ふ。「香爐上一點雪」で一杓の水を注いだやうになる。南無觀世音の力を念ずるといふと、今度は火坑變じて清凉なる涼しい所の池になる。今までは赫として怒つて居つたのが、雪の如き心となつて現はれるやうになる。

「或は巨海に漂流し、龍魚諸々の鬼難あらんに——是れは皆道理的に解釋すると、初めの長行の文

にあつた三毒の意味である。巨海といふのは大きい海、大洋といふことである。海も此の頃大西洋とか地中海とかは中々危ない。色々の潜航艇が出没するとか、敵艦の砲撃があるとかいふので、人命も損へば莫大な財も失つて居る。さういふことは事實の海で、恐ろしいことは恐ろしいが、方法に依つては防ぎようもあらう。けれども防ぎ難いのは我が精神界の海である。此の大海は愚癡の海、貪慾瞋恚の海、因果の道理も分らず、神佛の實在も認めないといふさういふ恐ろしい深い海、其の海のどん底に漂ひ流れて居ると斯ういふ。身體はどういふ處に安全に据つて居つても、心は常に分らない大海原に漂ふて居る人がある。社會の内面の事情を穿つて見たなら、一家庭の内にも愚癡の海がある。其の事實を此にさらけ出したならば恐ろしいものである。色々の毒龍も現はれて居れば色々の惡魚も現はれて居る。事實の海の中には色々恐ろしい龍も色々恐ろしい魚も居つて、人を惱まして居る有様であるが、我が精神内にあつても、平生は洵に穩かな長閑な海が、一度び瞋恚、愚癡、貪慾の念萌す時に直ちに慘憺たる景色を呈して來る。巨海に漂流して龍魚諸々の鬼難あらんといふ、鬼といふのは總て害をなす所のものを鬼といふ。さういふ風に恐るべきもの、中にあつても、一度び大慈大悲の觀世音菩薩を心に念じ、身口意の三業を以て、雷に名を聞き身を見る許りてなく、身體を擧げて現さねばならぬ。故に彼の觀音の力を念ずる時には、波浪も没すること能はずと斯ういふ。どういふ大波小波の驚くべきものがあつても、決して没溺することが無い。假令没溺しても浮び上がることが出来る

屹度出來る。其の實例は觀音靈驗記に澤山ある。古いこと許りてなく、今の新しい實例も段々ある。今日はさういふ實例をお話することは略して、此處までにして置きます。

第十九回

- 或在須彌峰 爲人所推墮 念彼觀音力 如日虛空住
- 或被惡人逐 墮落金剛山 念彼觀音力 不能損一毛
- 或值怨賊遶 各執刀加害 念彼觀音力 咸即起慈心
- 或遭王難苦 臨刑欲壽終 念彼觀音力 刀尋段段壞

或在須彌の峰にあつて、人の爲めに推し墮されんに、彼の觀音の力を念ずる時は、日の如くにして虛空に住まらむ。或は惡人に逐はれて、金剛山より墮落せんに、彼の觀音の力を念ずれば、一毛をも損すること能はず。或は怨賊の遶るに値ひ。各々刀を執つて害を加へられんに、彼の觀音の力を念ずれば、咸な即ち慈心を起さむ。或は王難の苦に遭ふて、刑に臨んで壽を終らんと欲する時、彼の觀音の力を念ずれば、刀尋て段々に壞せむと。

或在須彌の峰にあつて人の爲めに推落されんに、彼の觀音の力を念ずれば日の如くにして虛空に住まらむ。文字はさう六かしくはないけれども、世間的の考で行くと、御經の文句といふものは

も皆一つである、佛と人許りではない、諸々の動物、植物も大もとを正して見ると皆一つであるといふ、是れが佛教の根底になつて居る。外の宗教のいふやうに、人間は初めから罪の塊である、神は何處までも全智全能で、初めから全然別なものであるとしない所が大分違つて居る。それであるから、能く其處に眼を着けなければならぬ。そこで須彌峰といふて、此に出て居るのは、我々が悟りの眼を以て心の一番高い所にちやんと坐つて居るといふ、そつといふ工合に觀て置いたら宜しう。

所が其處に大事のことがある。本來悟るといふ事は迷ひがあるから悟りがあるので、迷ひといふものがなかつたら悟るといふものも亦ない譯である、然るに迷ひといふものが幾かに取れたかといふて、今度は悟るといふ所に尻を据える輩がある。自ら悟るといふ高い山の上に坐つて、總てのもの總ての人間を我が眼下に見下すといふやうなものが世間に少くない。さういふものは佛の道でない。本當に悟りを開いたものならば、頭から迷ひも無ければ悟りも無い筈である。菩薩方が世の中に出て働く時には既に迷ひも悟りも一切忘れて仕舞ふて、而して朝から晩まで働き通すといふ所に有難味があるのである。例を擧げると、白隱禪師は御承知の通り優れた人であつて、其の下には偉らい坊さんも澤山出て居るけれども、世間の側でも優れた人がどつさり出て居る。男許りてなく女でも白隱禪師に參禪して優れた人が澤山出て居る。就中最も名高いのはおサツといふ女性である。此のおサツは、どういふ人であつたかといふに、小供の時分から賢こかつたと見へて、十五六の頃所謂物心が附いて來る

と、我は幸にして満足の形を受け得た以上、どうか是れから先き良い縁を得て然かるべき夫を迎へ、言はゞ一生涯樂しい家庭を作りたい。それにはどうしても信心しなければならぬといふて、そこで高王觀音經といふのを始終讀誦して居つた。程遠からぬ。赤野觀世音に祈願を籠めて、觀世音、南無佛與佛有因、與佛有緣、佛法僧緣、常樂我淨、朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心。つまり碎いていふと、朝に觀世音を念じ暮れに觀世音を念じ、念々心より起つて念々心を離れずといふ誰でも知つて居る十句觀音經、あれを唱へてそれ許りに心を一つとして信心して居つた。所が段々それを唱へて居る内に一つの境涯を得た。ふいと自分で氣が着いたことがある。言はゞ一つの悟りの眼が開けて來た。そこで態度が餘程變つて來た。或時自分の部屋に坐つて居つた時に、其處にあつた所の法華經——を自分の尻の下に敷いて、知らぬ顔をして何か裁縫をして居つた。其處へ彼女の父が不意と這入つて來てそれを見たが、今まで觀音様を熱心に信仰して、小さい娘にも拘はらず觀音經を難有がつて唱へて居つたのに、今日は如何なる有様か、法華經を尻に据えて知らぬ顔をして坐つて居る。それを見て父は大に驚いた。これは何たる有様である、氣でも狂つたのではあるまいか、此有難い尊い勿體無い法華經を、どうも女の尻に据えて知らぬ顔をして居るとは何たることぞといふて大に驚いた。おサツは平然として、別に何たることもありませぬ、私のお尻と御經とどれだけの異りがありますか」と答へて平氣で居た、父には其意味が分らない、そこで白隱和尚の所へ飛で往つて、「實は私

の娘のことでありますが、常日頃觀音様を信じて信心怠らなかつたのでありますが、今日はかく／＼此の通りの始末でありまして、私が驚いて何たる有様だと申しました所が、別に自分のお尻と御經と異りが無いといふて居ります、私は申譯が無い、どうぞ貴下から能く間違ひの無いやうに御説得を願ひたい」と汗みどろになつて訴へ出ると。白隱和尚は、「さうか、それならば。試みに斯ういふ歌を——昔から能く人のいふ歌であるが、闇の夜に啼かぬ鳥の聲聞けば、生れぬさきの父を戀しき」。さういふ歌を書いて見せて、「娘が悟つたが悟らぬか、これに試験して見よ」と云はれた。親爺は左様ですか、それならさう致しませうと、その書いたものを貰つて持て歸つて見せた所が、おサツのいふには、「白隱和尚も矢張さうか、中々偉らい、私の觀て居る所と白隱和尚の觀て居る所と別に違ひが無い」と笑つて居た。親爺はそれを見て益々呆氣に取られて、又白隱和尚の所へ行つて其のことを話すと、「それなら連れて来い」といふことになつて、到頭白隱和尚の室内に入れて見ると、中々素人に分らないことをすらく／＼と捌いて行く、相當に骨を折つた禪僧でも分らないことを、おサツは尋常茶飯の如くに何の苦もなくすらく／＼と捌いて行く。さういふ珍らしい娘であつた。併しながら、須彌峰といふ唯だ氣高い所に自分の心を据えて仕舞ふと、斯ういふ事にもなる、世の中のこととは何もあくせくするに足らない、嫁入りするとかどうするとか、丸で夢の中に夢を説いて居るやうな状態ではないか。さういふつまらない事に囚れて居るより、私は一生獨身生活をする——近頃新しい女といふものが出来

て、色々無茶なことをするのも、矢張りそこに尻を据えて居るのである。おサツも初め小供の時分には、良い所へ嫁入りしたいといつて居たのだが、今度は獨身生活をしたいといふ。矢張り須彌山の峰の高い所の悟りに執着することになつたのである。それから何處へも縁附く氣色が無い。親が驚いて色々勤めても、もうそんなことは聞き度くないといつて、頑として應じない。到頭親も呆れて又白隱和尚の所へ連れて行つた。そこで和尚が「お前は佛教が分つたといふが、佛教が分つたなら世法が分らぬ筈は無いが」と云はれた。是れが聞き所で、佛教が分つたなら世間が嫌やだの人間が蒼蠅いなどいふて居るべき筈でない。佛法が分つたなら世間の法が分らぬ筈は無い。世間の法はどうであるかといふに親子夫婦兄弟一家族、それ／＼分相應に働いて、世の爲め人の爲めに盡して行くのである。人間は互に協同して生活して行くのは、これが世の中の常である。さうして見れば、矢張り女は人の妻となり母となつて、女たる道を盡して行かねばならぬ。嫁に行かないの獨身生活が宜いといふて、何か悟つたやうな顔をして居るのは、まだ本當に分つたのではない、どうだ考へて見よと言はれて、成程悟りを細かくいふて見ればそれに違ひ無い。おサツも漸くほんとうの悟りの眼を開いて、續いて良縁があつて縁附くことになり、而も長生きして八十幾つまで生きた。其の位の長生きしたから、孫も出來曾孫も出來たが、孫の死んだ時におサツは悲んで、立つても寝ても居られない、大聲揚げて朝から晩まで泣いて／＼泣き通した。隣りの老爺がそれを聞いて、怪しからぬ話である、娘の時分から始終

白隠和尚に就いて、悟りを開いて居りながら、孫が死んだといふて譯も無く泣き喚ふとは、實に怪しからぬ。私が行つて忠告して來るといふて、おサツの所へやつて來て、お前はかねて十分に修業して居ながら、どうしてさう譯もなく泣いて居るのかといふた所が、おサツは「其の御忠告は有難いけれども、私の泣のが、百味の供養よりも千僧の招待よりも孫は喜びませう、これで孫が住生しませう」といふて、又泣き續けたといふ話である。後には其の位にまで至つた人である。矢張り須彌峰といふのは其處を指す。人間は位が高くなるとか財産が殖へるとか又は學問が上達するとか、總て身分が高くなるに随つて、其處に尻を据えて安んずる、而して總てのものを眼下に見て仕舞ふと、終に人の爲めに打落されることになつて來る。須彌峰の高い所を心掛けるのは宜いけれども、それに安んずる爲めに遂に押墮されることになる。大抵さうであるが、御馳走を喰ひ過ぎた時にお腹を悪くする、自分の善い時にどうも墮落することになる。修行中は決して間違が無いけれども、世の中に出ると勤め振りに隙が生ずる。そこである。人からといふても、何も他人から害を受けることでは無くて、自分で身を縮めることが多い。人から受けるといふよりも、皆自分の心からである。自分の一種の我慢心が高ぶつて來た時に、遂に身を縮尻ることになるのである。それを指して斯ういふ。斯ういふことは事實の上では觀音靈驗記などに澤山因縁話があるが、今は心の上で解釋する。

「或は須彌の峰にあつて、人の爲めに推墮されるやうな危険の場合に臨んでも、彼の觀音の力を念ずれば、日の如くにして虚空に住す」と斯ういふ。此觀音様が人間の心に御座る時は、人間の心に現はれ出でられた時で、日の如くにして虚空に住す。今まで屢々言ふて來た通り、觀音様は慈悲の團まりである、獨り慈悲許りではなく智慧の團まりである、獨り智慧許りではなく勇猛精進の團まりである。世間の言葉でいふと、智仁勇と斯ういふ、此方でいふと、大勇猛心、大慈悲心、大智慧の力とも身ともいふ。斯ういふ觀音様を我々が常に信じて居ると、假令獨り一室に坐つて居る時でも、ちやんと觀音様と差向かひで坐つて居ると同じことである。何も寂しいことはない。又如何なる不意の出來事に遭つた時でも、ちやんと我が身を守つて下さるの誰かといふと、觀音様が守つて下さるのである。又どういふ知らない所に進んで行く時でも、常に觀音様を念じて居ると、觀音様は我を手引きして下さる。心に生きた觀音様が現はれて居る時には、我々は其の日／＼に何も不足無く不平無く、煩悶懊惱といふ心の雲は跡方も無く打拂はれる。今もいふ通り須彌山の山の高い所から人に推墮されるやうな大危険があつても、一たび觀音様の慈悲の心、智慧、勇猛心の力を念ずる時は、其の身は丁度太陽が空中に掛つて居るが如くになつて、——太陽許りでなく此の地球が空中にちやんと住まつて居るやうなものである。それを學問上からいふと、遠心力、求心力の作用といふが、さういふことは申さぬで宜い。矢張り地球が空に住まつてそれで廻轉して居るのは、道に適つて居るから危険なことが無いのである。其のやうに我が身も此の地球の如き有様で、一たび觀音様の力を念ずれば、丁度太陽

が空に掛つて居つて危なくないやうに、我が身も危ないことが無く、依然として其處に住まつて居ると同じ有様である。彼の觀音の力を念ずる時に、日の如くにして虚空に住す。と斯ういふ。

「或は惡人に逐はれて金剛山より墮落せんに」。此に出て居る金剛山といふことは、實は前の須彌峯といふことに續いて現はれる言葉で、須彌山と同じく外國にある山である。此等の事實上の話は、佛經の中にある俱舍論の本文を見れば詳しく分る。我々が金剛山といふと、常に破壊しないといふ意味を有つて居る。そういふ堅固の山である。其の山は何處にあるかといふと、矢張り我々の心に向つて金剛なるものを尋ねて見ると、自然に自分で合點し得ることが出来る。形の上からいふと、惡人に追掛けられて其の高い金剛山から推墮され墮落せられるといふやうな場合でも、——斯ういふ惡人は此で見ると他人の如くに思はれるけれども、決して他人許りではない。我々の精神の内に、我々自身の心の内に色々の惡人が住んで居る。妙なものである。貧慾、瞋恚、愚痴、それから八萬四千の妄想煩惱は、即ち此にいふ惡人とも稱すべきものである。實は本當の觀音様になつて仕舞へば、世の中に惡人といふものは絶無といふて宜い。世間の言葉に能くいふ通り、涉る世間に鬼は無い。本當に菩薩なり佛の身になつて仕舞へば、惡人といふものは一箇も半箇も無い譯である。實は此の世に惡人の全く絶へないのは、我々始め各々皆我が心に貧慾、瞋恚、愚痴の心が高ぶつて、或は又嫉み猜み可愛い憎い悔しい惜しいといふやうな、さういふ色々の妄想煩惱を我々自身が皆有つて居る。それが真に無くなつ

て仕舞つたならば、世の中に惡人は一人も無くなるといふて宜い。又人を見たらば盜人と思へといふのは。油斷するな、油斷してはならぬと誡めた言葉であらうけれども、此れは人と人との關係を注意したので、若し一旦佛菩薩觀音を心より信じて居る者から觀たならば、世の中に惡人は無いといふても宜いのである。例へば惡人が我を迫害し我を惱まして、我に佛菩薩の心あり側隱の心があるならば、惡人を導いて悔悟せしむることも出来るのである。さういふ工合で惡人は餘所のものではなく多くは我が心の内にある。其の惡人に追掛けられて——實は我が心の惡人に追掛けられて金剛山から滑り落つる、即ち迷ひの惡人ともいふべき心の爲めに、金剛山から遂に墮落して仕舞ふといふ、さういふ危険な場合に臨んでも、觀世音菩薩の力を念ずる時は一毛を損する能はず、卵の毛一本でも決して傷つけない。此の位の精神でなければならぬ。我々が觀音様を念ずる時卵の毛一本でも損じないといふ決定せる信仰があつたならば、卵の毛所ではなく、萬々一音を斬られて仕舞うやうな危険に遭つても、決して其の害を被ることが無い。さういふ精神で深く信じて掛つたならば、世の中何處へ行くても恐ろしいことは無い。或は惡人に逐はれて金剛山より墮落せんに、彼の觀音の力を念ずる時は一毛をも損する能はずと斯ういふ。これも實例などをお話すれば澤山あらうと思ふ。勿論觀音靈驗記には澤山あるが、其の方面でなく心の上の實例をお話すれば、雲居禪師と云へるは伊達政宗の尊崇した優れた禪宗の高僧であるが、あの人は道の力は言ふまでもなく、身體の力も大にあつた。或時雲水旅

行中、美濃の青野ヶ原で追剝ぎに出遭ふた。大分此の和尚は福々しいから何か持つて居るに違ひ無いといふので、持つて居るものを皆其處へ投げ出して仕舞へと、大勢の山賊共が禪師を取捲いて迫害した時に、禪師は、さうか仕方が無いそれならやらう、おぬし達は大勢で俺れは一人だ、欲しくば何でもやる、着物も何も皆脱いでやる、此の身體も欲しくばやりませう。併しお前方は此の身體を奪ひ去つても、どうしても斯うしても奪ふことの出来ないのは此の精神の力だ、一口にいふと、お前方は此の身體に附いたものは何でも奪ふべく、此の身體も殺して仕舞ふことも出来ようが、我が心だけは決して奪ひ去ることは出来まい。それが承知ならば外のものは皆持つて行け、さア来いと、どつしりと道の真ん中に坐つた。其の勢ひに吞まれて大勢の山賊共はふるくくと震ひ出した。心の力は偉らしいものである。到頭剝き取る所ではなく、和尚の精神上の力に打たれたから、山賊共は閉口して、仕舞にはお弟子にして呉れとひた詫びに詫びた。さういふ話が本に書いてある。悟りの力といふものであるかも知れぬけれども、もう一つ飛んでいふと、觀世音の力。南無觀世音菩薩の力が吾が全體に感じた時には、即ち威武も屈する能はず富貴も淫する能はず貧賤も移す能はずといふ力が現はれて来る。即ち彼の觀音の力を念ずれば一毛をも損する能はずと斯ういふ。

「或は怨賊の遠るに値ひ、各々刀を執つて害を加へんに、彼の觀音の力を念ずる時は、皆即ち慈心を起す」と斯ういふ。是れも今いふた話と同じやうなものである。怨賊といふと、今世が開けたから、

人民保護の爲め到る所警察が設けられて、どんな片田舎に行つても、相當人民保護の道が開けて居る随つて怨賊といふものも少く、又それが現はれても、それく處分の法が設けられて居る。併しそれは世間並みのことで、心の上から之を眺めて見なければならぬ。實は怨賊といふも、我に仇するは誰か、我が財を盗み去るは誰か、盗人を捕へて見れば我が子なりけりて、つまり自分の迷ひの心が總て怨賊である。此の仇敵此の盜賊は外に住んで居るのでなく、我が心内に住んで居ると、さういふ工合に眺めるのである。例へば如何なる妄想煩惱即ち怨賊が腹一ぱいになつて住んで居つても、又それが兇器を携へ來つて我に害をなし我が生命を脅かすやうな危難に臨んでも、彼の觀音の力を念ずる時は、さういふ危ない際どい時に臨んでも、一度び觀世音菩薩の力を念ずる時には皆即ち慈心を起さんと斯ういふ。妙なものである。それ程の恐ろしい怨賊でも、皆んな自分の慈悲心に感化せられて、彼等も又慈悲心を起すであらうと斯ういふ。今昔の偉らい尼さんのことを調べて見ると、江州に慈門尼といふ名高い尼さんがある。其の家へ盜賊が這入つた。盜賊に這入られては大抵の人は驚くであらうが慈門尼は非常に慈悲心に富んだ人て、盜賊の顔を見るや「お前はさういふ風に盗みに這入るやうては定めて難儀して居るのであらう、見れば着物も薄いやうだし、此の夜中に腹もすいて居るだらう、先づ腹を拵へてそれからの事にしてはどうか」といふて、自身臺所に行つて御飯を焚いて、「さアお前を喰べて身體を十分に煖めて、それから欲しいものがあつたなら、私の庵の内にあるものは皆上げるから

遠慮なく持つてお出でなさい。併し唯だ一つ私のいふとを聴いて下さい。見れば立派な身體を有つて若い年をして居ながら、人を惱めて潜かに物を集めることは辱かしいことである。お前が一たび不利益を起したなら、お前を生んだ親はどんな心持をするだらう。お前の兄弟や姉妹は、お前が盗をした噂が世間に廣まつたなら、どんなに肩身が狭からう。而してお前は多くの人に難儀を掛け、多くの役人に厄介を掛けることになる。若し尙深く考へたなら、お前に妻があり子を生んだ時に、お前の子たるものは何時が何時までも盗賊の子である悪人の末であると云はれることであらう。唯だ一念の或迷ひの爲めに、此の世に何時までも汚名を残して行かねばならぬ、それが實に可哀相である。どうか此の尼のいふことを聞いて見て、お前の仕方が悪いと知つたなら、今晚限り止して貰ひたい。其の代りお前の欲しいものは一切進上する、盗むのではない差上げるから、皆な持つて行つて呉れ」と、一心に誠を籠めて云はれたものであるから、初め脅し文句を並べた兇賊も、此の慈門尼の慈悲心に對して、丁度朝日に遭ふた露霜の如くに、快よく恐ろしい心が消えて仕舞つたといふ有難い話がある。貴女方は盜賊に出遭つた場合でも、又多くの人を使ひ多くの人と交はる時でも、身を安らかにしたいと思ふならば、第一に斯ういふ所に心附けなければならぬ。怨賊は外にあるものではない。皆な自分の心にある。其の怨賊か刀を執つて我に害を加へんとする場合に於ては、彼の觀音の力を念ずる時、それ等の恐るべき輩も皆な悉く慈悲心を起すであらうと斯ういふ。

「或は王難の苦に遭ひ、刑に臨んで壽終らんと欲する時に、彼の觀音の力を念ずれば、刀尋段々に壊せむ」これも實例を擧げると澤山ある。丁度我々の法燈を傳へた祖師が、お釋迦様から達磨大師迄に廿八人ある。其の祖師の内に獅子尊者といふ方がある。此の方が時の鬪寶國王といふ王様の爲めに、遂に命を絶たれて仕舞つた。其の時の問答を今心に記憶して居るが、此王様は大變亂暴な人で、或時斯ういふ難問を獅子尊者に掛けた。お前は未曾有の法を得たといふが——一切眞實未曾有の悟りを得たといふが本當か。獅子尊者は答へて、さうです、私は一切其の法を得ました。そこで國王は、未曾有の法を得たならば、生死を脱したに違ひない——生き死に自由であらう。獅子尊者又答へて、及ばずながら何でもないと思ひます、生死を脱するものは恐ろしいことは何もありませぬ。國王は、さうか恐ろしいことが無いならば、お前の生首を貰はうと。さういふ亂暴なことを言ひ出した。獅子尊者はそれはいと安い御用、頭のでつべんから足の爪先きまで……元來私は斯ういふことに執着しませぬ。身體は無論のこと、况んや首一つ何てもありません。差上げませう。さう答へるや否や、國王はすばりと一刀の下に首を切落して仕舞つた。と傳記に書いてある。これは別に觀音様に關係は無いけれども、觀音様を信じて居つた場合もさうである。それから又唐の世に、僧肇といふ大變優れた智慧あり學問ある坊さんがあつた。國王はどうしても還俗させようとしたが従はない、道の爲めに命に従ふことが出来ないといふて斷つた。處が王命に従はないと殺すぞといふ事になつた。殺されても

仕方が無い、世間法に従つてどんな目に逢つても、道の爲めには仕方が無いといふて聽かない。愈々といふ場合刑に臨んで「四大本非有。五蘊畢竟空。以頭臨白刃。猶似斬春風」といふ偈を唱へて自若として首を刎ねられたといふことである、それから又圓覺寺の開山佛光禪師も、元の忽必烈の亂暴に遭つて有名な偈頌を作つた。乾坤無地卓孤筇、且喜人空法又空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風。これも名高い偈である。其の偈は肇法師の偈から來て居る。又態度は獅子尊者から來て居る。けれどもさういふことは、皆な力を得た人が矢張り十人よれば十人、百人寄れば百人、心の極め所は一つとて敢て眞似をしたといふ譯ではない。或は王難の苦に遭ひ——今は國王と雖も濫りに人の首を取つて仕舞ふことは出來ないが。古は國王の命令次第のものである。そこでさういふやうな王難の苦に遭ふた時、さういふ苦みに出遭ふて、刑に臨んで壽終らんと欲する時、今此の生首を打落されるといふ危険な場合に臨むと雖も、彼の觀音の力を念ずれば、刀尋で段々に壊せんと斯ういふ。これも日蓮上人が龍ノ口に於て、既に此の生首を打落されんとした時に、觀音様を念じた爲め刀の刃が千切れて飛んだといふ因縁話がある、これは確か前席で御話したかも知れぬが、觀音の名號を唱へて一心に念じた所で、刀が千切れ／＼に飛んで仕舞つた。そんなことがある筈は無いといふ人もあるけれども、眞に觀音の慈悲の力を體得して來る時には、もう刀と雖も切れるものでない。刀であらうが石であらうが、そんなものでは到底之を割き切るとは出來ない。昔し漢の李廣といふ弓の上手な名高い將軍、そ

れが或時獵に行つた。處が草原の中に一疋の虎を見つけた。これを好い獲物射て取らうといふので一心に力を籠めて射た所が、盲く腹を貫いた。飛んで行つて見ると、それが石であつて虎でない。矢の先きが石の中に這入つて居るのだ。そんなことは物質的にある筈は無いといふが、精神一到すればそんなものである。李廣將軍はそれを見て驚いた。妙なこともあるものだ、もう一遍射て見ようといふので同じく力を籠めて其の石を射たけれども、今度は石が跳ね返してくすからない。初めから石と思へば射込められないのであるが、前には此に虎が居と思つて、全力を籠めた精神から石を貫ぬいたのである。精神上の力といふものは、到底物質學者の思ひ及ばないものがある。まして況んや宗教的信仰……それ以上の信心の力といふものは宏大なものである。それがやがて或は王難の苦に遭ひ、刑に臨んで壽終らんと欲する時、彼の觀音の力を念ずれば、刀は切れ／＼に折れて仕舞ふといふことである。昔から女の念力岩をも透すといふが、女に限らず人の精神力は其の位の力がある、何もこれが土の力、水の力、火の力、金の力、そんな迷信の力などでは到底さういふ力が出るものではない、それに超越した所の力であるから、刑に臨んで壽終らんとほつするやうな危険な場合でも、刀が尋で段々に壊するのである。日蓮宗の信者などは、龍ノ口の遭難の時にちやんと日蓮上人が觀音を念じた爲刀が尋が切れ／＼に飛んだのであると今も信じて疑はないのである。今日は此までに致して置きます。

第二十回

或囚禁枷鎖 手足被杻械 念彼觀音力 釋然得解脫
 呪詛諸毒藥 所欲害身者 念彼觀音力 還著於本人
 或遇惡羅刹 毒龍諸鬼等 念彼觀音力 時悉不敢害
 若惡獸圍繞 利牙爪可怖 念彼觀音力 疾走無邊方

和訓 或は囚はれて枷鎖に禁ぜられ、手足杻械せられむに、彼の觀音の力を念ずれば、釋然と解脫するを得ん。呪詛諸毒の毒藥、身を害せられんと欲する所の者も、彼の觀音の力を念ずれば、還つて本人に著かむ。或は惡羅刹、毒龍諸鬼等に遇はんは、彼の觀音の力を念ずれば、時に悉く敢て害せず若し惡獸に圍繞せられむに、利牙爪爪怖るべきも、彼の觀音の力を念ずれば、無邊方に疾走せむ。

講話 觀音經も段々と會をかさねて此まで講じて來たが、何時も申す通り、觀世音菩薩は大慈悲の團まりである。獨り大慈悲の團まりといふ許りでなく、もう一つ擴げていふと、大智慧の團まりであるといふて宜い。大智慧許りでなく、大勇猛心の團まりであるといふて宜い。總て此の三つが即ち一つであつて、智慧と慈悲と勇、世間の言葉でいふと智仁勇と斯ういふ。斯かる因縁によつて觀世音菩薩は世の中に現はれて三十二應身といふやうにどんな者にも姿を現はして、所謂人見て法を説くといふ有様である。そこで我々互ひも直きに自分自身が即ち觀世音菩薩の現はれてあるといふ、それが信仰である。觀世音菩薩といふて唯だ向ふに崇めて居るだけではない。自分が元來慈悲なり智慧なり勇猛心なりの表現である、少なくとも其の片割れであるといふ、其の信仰をずつと初めから貫いて居なければならぬ。

今日の所は、「或は囚はれて枷鎖に禁ぜられ、手足杻械せられむに」と斯うある。枷鎖といひ杻械といひ文字は違へて居るけれども、要するに首がせであるとか手がせであるとか又は足がせであるとかといふことである、我々は從來嘗て罪とがを犯した譯でないから、牢獄に囚はれて、而して手がせであるとか足がせであるとか又は首がせであるとかいふやうな、さういふものを掛けられたことはまだ覺えの無いことである。またさういふ目には遣はないけれども、何時も申す通り御經の解釋といふものは事實的の解釋と解釋といふ始終其の二つがある。解釋といふは道理的解釋である。事實といふのは事實的解釋である。此の言葉も初めから幾度か繰返して話致して居る。其の事實、解釋と假りに二つの解釋はあるが、就中、我々の今重きを措く所は解釋即ち精神的に始終眺めるので、事實は第二である。御互は今此に首がせ手がせ足がせといふそんな汚らはしきものは、何にも身につけては居ないと云はれるであらうけれども、併しながら一たび我が精神界に目を注いで見ると、どういふ立派な所に住ん

で居る人でも、何不足無く榮耀榮華に今日を送つて居る人と雖も、自分の内心を振返つて能く考へて見ると自分はナニカ或物に縛られて、抜けやうもなく脱れようもなきことに氣が附くであらう。さうして見ると御互に我々はよしや他から縛られて居なくとも、自分自身に縛られて居るのである。斯う調べて見ると束縛にもいろ／＼ある、此の御經でいふならば七難三毒といふやうなことが本文に於てあつたのであるが、七難といふても獨り七つに限つたのではない、三毒といふても決して三つに限つたのではない。言はゞ七難三毒を初めとして八萬四千の妄想煩惱といふものがあつて、それが首かせ又は手がせ足がせとなつて現はれて居るのである。例へば世間の道德上に於て、我々は生れ出で、後ち今日に至るまで、決して人の生命を取つたことはない、盗みをしたこともない、邪淫を犯したこともない、大なる嘘をついたこともない、と斯ういふ。それ等のことを犯さへしなければ、別に宗教といふものゝ必要はないではないかといふ人が随分世間に澤山ある。世の中の實踐道德上から見ても、心立命を得て居るか、どうか。如何なる境遇に對しても、今や息を引取るといふ絶體絶命の場合に臨んでも、少しも心に煩ひ無いといふ、其安心立命は得られて居るかどうであらうか。其處に到ると道徳から轉じて宗教上の大問題となつて来る。そこで立ち代つて扱て我が心を調べて見ると、人の目に見へない耳に聞へない所で、我自身には動しても許されない安んせられない或物が必ず心内に横は

ることを覺るであらう、名譽のある者ならば、其名譽に桎梏されて居ることはいか。財産のある者ならば其財産といふものに桎梏されて居ることは全くないであらうか。何か其の自分の心に――斯ういふ場合には執着といふやうな字を能く使ふが――ひつ／＼、何かに囚はれて居る様なことはないであらうか、平生を能く考へて見ると中々我々は樂々とは行けない。學問があればあるだけ囚はれて居る。又一種の悟りが開ければ悟りといふものに囚はれるといふことが容易には免れ得ないので、迷ひを有つて居なくなつたかと思ふと、今度は悟りといふ重荷を擔いて居る。迷信は無くなつたが、又一の見識といふ――殊更らに見識といふものに羈絆される様になる。迷ひが無くなつたならば悟りに中てられる。病になやまされるとは免れたが、藥に中てられる。故に本當の悟りに這入つたものは、悟りといふものにも拘泥しない。眞に佛の境涯に這入つたならば、佛らしいことも忘れて仕舞はなければならぬ。こゝがつまり我々のいふて居る宗教家の信仰である。何物にも執着しない、何物にも囚はれないと、口にはさういふ工合に始終いふて居るが、本當にさういふ境涯に達するには中々努力しなければならぬ。つまり桎梏といひ枷鎖と稱するのは、ナニモ木で造つたり金でこしらへた手がせ足がせ首がせといふ様なものを指していふ許りではない。矢張り一つの見識とか悟りとか理窟とかいふものに囚はれるのも枷鎖され桎梏せらるゝのである。昔或る坊さんが出て来て、趙州和尚に一物不將來の時如何と尋ねたことがある。其時趙州は放下着――と答へた。棄て、仕舞へといふことである。す

ると問ふた坊さんが、既に一物不將來である、何んにも持つて居りませぬのに何を棄てるので御座りますかと突込むと趙州は平然として「放不下ならば擔取し去れ」棄るものがないといふなら、引擔いで行けといはれた。此等の實例を以てそれを自分自身に味はつて見ると、何物か其處に見出すことが出来ましよう。我々はどうしても柵械枷鎖なるものに始終繫縛されて居るのである。

昔の女性には此解脱をした人は澤山ある。前にも御話したのであるが、彼の千代能は佛光國師に參禪して柵械枷鎖——我れ自身が此の心中に有つて居る首がせ手がせ足がせを、そつくり解脱しようと思つたのであるが其揚げ句其の得た境涯を言ひ現はした歌に「千代能がいたゞく桶の底抜けて、水溜らねば月もやどらず」といふのがある、中々確かりした所があり、又徹底して居るといふて宜い。其處まで到つて始めて柵械枷鎖なるものを綺麗に解脱したのである。中々女性でありながら優れたものである。又檀林皇后もさういふ例の方であらせられて、「もろこしの山のあなたに立つ雲はこゝにたく火の烟なりけり」といふ歌をおよみになつた。此方は義空禪師に參禪せられて、而して此の柵械枷鎖、此の閉された首がせ手がせ足がせを脱せられた時の境涯を御歌に咏せられたのである。斯ることは唯聞いたり饒舌つたりした丈けのことでは何にもならない、お互に參禪實證といふやうなことを坊さんなどが能くいふが、直きに其の境涯を我ものとすでなければ一向難有味はない。併し斯ういふ境涯は必ずしも禪宗でなければ得られないといふ譯のものではない。淨土宗でも阿彌陀宗でも、

此の境涯に達することが出来る。それに就いて一寸實例を思ひ起したのであるが、近世の人で、京都に蓮月といふ尼さんがあつた、此人は宗教上の信仰からして立派な人となり得たのであるが、其生活の様子が誠に洒脱で、少しも囚はれて居る所がない。而して實に自由の境涯を得て一生を送つた人である。當時京都の衣屋に阿部屋長右衛門といふ——今でもさういふ家があるようだが、其處の老母が深く蓮月に歸依して、蓮月尼を自分の宅に招待して供養したり、又讀經して貰つたり、又説教して貰つたり、又時々自分蓮月尼の家に伴はれて善い話を聽かせて貰つたりして居た。然るに何時行つて見ても行く度び毎に其内佛に安置してある佛様が變つて居る。阿彌陀様を祀つて居ることもあればお釋迦様を祀つて居ることもある。それ等は本尊様らしく見へてよいのであるが、時によると伏見あたりで拵へた伏見人形、八瀬大原のあの大原女の人形、尻を振り／＼やつて来る、今でもあの通りやつて居るが、京都であれを堀河人形といふ。其の大原女の人形を祀つて居る。中にも甚だしいのは太夫、花魁といふやうな人形、そんなもの時に依つては祀つて居る。老母が内佛を拜んで見ると、さういふ風に始終本尊が變つて居る。そこで老母が妙なことがあるものだと思つて見れば、これには必ず平素錢金の貯への無い人であるから、立派な本尊が買へない爲め、それで斯ういふことをして居るのであらう。よし／＼それならば自分が一とつ買つて上げやうと、金箔附きの本尊を購ひ夫れを携へて蓮月尼の庵に行き「實は貴女の御宅の内佛を拜んで見ると、御尋ねする度に何時も本尊が變つ

て居る。伏見人形や堀河人形が祀られて居る。これは私の心盡して持つて来た所の阿彌陀如来、之を進上するからどうぞ之を本尊と祀つて拜んで下さい」と差出した。大方蓮月尼が喜ぶだらうと思つたに、一向喜ぶ様子もなく、「イヤ御好意は有難いけれども、それはどうかお持歸りを願ひたい」と案に相違のあいさつに老母は一時驚いたが若しや遠慮するのではあるまいかとも思はれたので、「お禮には及びませぬ故どうか祀つて頂きたい私の御願ひで御座いますから」といふた所が「遠慮でも何でもない。併しさう云はるれば少し私の考へもいふて見るが、實は私が斯ういふ美しい佛を貰つて見るとひよつとすると、佛の爲めに今までの私の安心が動くかも知れぬ。佛が美しいといふと、遂にそれに囚はれて仕舞ふ。私の安心は何も物にひつ附かない所にあるので、心の中に常に阿彌陀様があつて心の中に光りを放つて居るから臺所に行つて御飯を喰べる時でも、淨水に行つて不淨を爲す時でも、其處に阿彌陀様に私の信仰が通ずる——成程彼方の方の信仰では、淨水場でも能く南無阿彌陀佛と唱へて居るが、一寸見ると可笑しいやうであるけれども、實にさうである。何處でも阿彌陀様に通ずる——それであるから私は本尊を得ようと思へば得られもしようが、常に佛の心を得ようとするには其の佛の姿に執着しては濟まぬと思ふて居る。併しながら私として人間である。何か見よりが無ければいけない。そこで佛の人形を買つたりするが、それに執着が起ると子供にやつて、今度は伏見人形を買つたり堀河人形を買つたりする其の中には山姥もあれば太夫もあり花魁もある、佛もあれば布袋もある

る。處が日を経ると矢張り段々執着が起るからして、次から次へそこ等あたりの子供にやつて仕舞ふ而して私は信仰を養つて居るのであるから、折角の美しい立派な佛だけれども、さういふ私の安心だからこれはお返し致します」といふた。蓮月の安心は面白い。態ざくさういふ眞似をしなくても宜い。立派な本尊を安置して禮拜供養するは結構であるが、迷ひに近づかないやうにしなければならぬ。況んや佛の姿に執着しては濟まない。さういふことを言ふたといふことが或書物に書いてある。杵械枷鎖といふは皆なそれである。何物にか我が心を攫まへられてはならぬ。其の境涯が明らかを得られたならば、平靜に世の中を送ることが出来る。世の中が蒼蠅の味氣無いのと、さういふ大變打込んだ悲觀をしたり又は過大な樂觀をしたりしてはいけない。聖人は物に凝滞せず、能く世と推し移るといふ。水の流るゝが如く玉がお盆の上に轉がるが如く、其の心が滯らずにゆかなければならぬ。其處に到つて始めて杵械枷鎖を脱することが出来るのである。思はず理窟らしいことにお話がつたが、實は此處にある通り、さう六つかしく云ふには及ばぬ。「彼の觀音の力を念ずる時は釋然として解脱することを得む」と斯ういふ。心に於てさういふ執着心が起つたならば、これでは濟まない、南無觀世音、大慈大悲の觀世音菩薩と、さういふ信仰から現はれ來つて、觀音の光りを心に認むる時は、旭に霜の消へるが如き心持になる。私は色々の人に會つて色々の家庭を知つて居るけれども、中々表面から眺めたやうなものではない。色々のことに心が繫累され

て居るものが大變多い。夫婦の間、父子の間、兄弟姉妹の間、表面から見ただの中に入つて見たのとは大變違つて居るのが多い。其の中に始終煩悶苦惱して居る。これが氣の毒であるといふので、觀音様は常に大慈大悲のお手を垂れて、之を救ひ上げようといふのであるから、心から南無大慈大悲の觀世音と、斯う一つ念じ來つたならば、釋然としてもつれ來つた縁がさらりと解けるやうに、解脱することが出來ようとする。其の柵械枷鎖がばらばらとなつてほどけて仕舞ふから、此に至つて信仰ある人と信仰無き人がちやんと分つて仕舞ふ。財産あり地位あり、何不自由無く榮耀榮華に暮して居る人は、一寸見ると好い身分であるけれども、内心一點の信仰無き人は、若しそれが偶々窮境に陥つたり失意の境涯に落ちた時には、實に惘れ千萬、世の中の實といふものは實は頼むべくして頼むべからざるものである。世の中の財寶には山の寶、水の寶、野の寶、其他色々あるけれども、もう一つそれ以上の寶即ち信仰を有つて居なければならぬ。それを我が物にして置かなければ、眞逆の時に出席ふと、心がぐらつき出すのである。

「咒詛諸々の毒藥、身を害せんと欲する所の者、彼の觀音の力を念ずれば、還つて本人に著かむ」と斯ういふ。咒詛といふことは、のろふといふことである。詛ひに就いては色々あるけれども、一種の加持見たような祈禱みたような、何か斯う儀式のような、まじなひのやうなことをする。加持祈禱といへば立派のことであるが、併し斯ういふことは動もすると其の人に依つて迷信になる、迷信であつ

ても場合によると人を欺き已れを欺くことが出來るのである。故に今日世の中に立つて加持祈禱をして居ると、それが不道理不隱徳の事であつても、評判が高くなると門前市をなすといふ様な事が能くある。本當のことを知つて居るものが少いから、山師に斯ういふことをやるのが澤山ある。生き神であるとか生き佛であるとか云はれるのは、實は直さに纏纏を出して警視廳に引張られるのであるが、咒詛といふのはまじなひ詛ひといふ類である。我々は實に寸善尺魔で、一寸善いことをしようとするば、一尺許り……魔がさして來る、悪いことをしようとするば、加勢して呉れるものが多い。下り坂には樂に下りて仕舞ふが、善いことをしようとするば、上り坂見たいなものである。一と足に色々の六かしいことが起る。必ず善いことをしようといふ一方には、惡魔が詛ふて居る。我々が一つ努力しようといふ一方には、情けようといふ惡魔が足許から狙ふて居る。樂しいことには苦しみが付く狙ふて居る。さういふ風な時に、信仰——何か宗教心が無ければ洵に覺束無い。今若し我に向つて咒詛し我に向つて毒藥でも盛らうといふ者があつた時に、——事實上の因縁話は昔から澤山ある、觀音靈驗記にさういふ話は澤山出て居つて、能く分つて居るが、此處では重もに精神的に觀たら宜しい。さういふ風にして我身を害する、動もすれば賊を認めて子となすといふとが楞嚴經にあるが、盜は外から來るやうに思つて居るけれども、實は心の内に住んで、それを可愛い子の如くに思つて居るものが多い。咒詛毒藥、それが即ち迷ひの甚しいもの、其の咒詛諸々の毒藥を以て此の身を害せられん

とする危急存亡の場合に於ても、自分の手で自分を殺すことが多い。其の時に彼の觀音の力を念ずれば、——即ち我々は元來慈悲の現はれであり智慧の現はれであり勇氣の現はれであり、所謂智仁勇の凝り固まつた所の、此の活き／＼したる觀世音菩薩といふことに、一つ思ひ返して見たならば、「還つて本人に著かむ」と斯ういふ。例へば我々が此に居つて、我と對する所の其の人が、我に毒藥を盛り我を誑ふといふ時に、其の毒藥や誑ひは我に來らずして其の人に直きに還つて行かう。これは四十二章經の中に、佛がさういふ譬へを屢々繰返されて居る。惡人が大變佛を罵つたことがある。實に堪へられない程の罵詈譎を逞しふした時に、佛は却て其者を氣の毒に思ひ召し、其者に向て云はるゝに。逆風に塵芥を投ずると、其の塵は向ふに飛ばないで、却つて投げようとして居る其の人に向つて來るであらう。これは分り易い道理に違ひない。或は天に向つて唾するが如くで、淺い目で天に向つて唾液を吐き掛けようとする。さうすると唾液は天に到らずして、却つて吐き掛けようとする其の人に不潔物が落ちて來る、それと同じく前は今口汚なく罵詈譎を恣にするが、其の罪咎は何處に落ちると、さういふことを様々親切に言はれたことがある。「還つて本人に着かむ」といふのは、矢張りさういふ意味である。彼の觀音の力を念ずれば、還つて本人に着かむ」といふのは、矢張り「或は惡羅刹、毒龍諸鬼等に遇はんに。」これも事實上斯ういふことは澤山あらう。羅刹といふのは全體初めにも申したが、彼處の原語を移したものが羅刹で、惡鬼羅刹と能く熟語に使ふ。つまり善いこ

とを妨げようとするものを惡羅刹といふ。今もいふた通り、世の中に善いとしたり人が喜び相なものであるが、矢張り嫉妬妬みの世の中で、善いとする一方からは邪魔をする。又人が立身出世をしたなら喜びさうなものであるが、それを小さな心より、憎んだり陥れようとしたりする。斯ういふ淺ましいことは政治界などにも能くあるが、其の外何事でも腕が上がれば嫉まれるといふやうなことは支那にも日本にもある。支那日本許りでなく、何處に行つてもさういふものであるらしい。故に惡羅刹のやうなものに出遭ふたなら、又毒龍のやうなものに出遭ふたなら、又は諸鬼——鬼といふのは、おにと一口に云はれて居るが、鬼神といふことは人の亡くなつた後の魂をいひ、又は漢籍で祖先といふやうな意味にも、鬼神といふ言葉を使つて居ることがある。さういふ風に鬼にも色々あるが、前にも惡鬼とあり此にも惡鬼とあるのは、皆恐るべきものである。そんなものは文明の世の中にあるものでないといふが、さうではない。それはやがて我が心を一つ顧みると、箱根東に鬼は居ないといふけれども、我が本心の内に翻つて見ると、惡鬼が常に頭を出して居る。つまり心の醜いのが鬼になる。鬼の姿を描いて居るのを見ると、頭に角を生やして、髪は麥稈の如く、口は耳まで裂けて、刃のやうな齒をむき出し、手足に恐ろしい爪が生えて、腰には虎の皮の褌を締めて居る。皆あゝいふ工合に描いたのは、自分の心理状態を描き現はしたので、中々面白い。地獄の繪を見るとどん／＼釜の下に火が燃へて居る。實は我が本心の内にも火が燃へて居り、角が生へて居る。瞋恚の念、嫉妬の念、憎惡

の念が、女のみならず男にも、焔を燃やし角を生やして居る。鬼の繪は皆な此の我々の心の内即ち心の現象を巧みに描き現はしたものである。此鬼は世の中にどつさりある。文明になればなる程澤山居る。毒龍も何處かに跋扈して居るかも知れぬ。其の悪鬼羅刹又は毒龍又は諸々の鬼に出遭ふて、而して喰ひ殺されむとする時に、彼の観音の力を念すれば、時に悉く敢て害せずと斯ういふ。言はゞ向ふから如何なる妖怪が現はれて來ても、それを皆な我が物にして仕舞ふ。妖怪を皆な我が手のものにして仕舞ふから、敢て害をなさぬ。世の中には昔から人を見たなら泥棒と思へといふ諺がある。悪い言葉であるけれども、實は世間の注意を喚び起す警句である。併し佛教でいふとさうではない。鬼をも化して佛としなければならぬ。毒蛇が出て來たならば、化して天龍とする、而してそれを我がものにして使ふ。天龍を八大龍王といふ程にしなければならぬ。悟りといふのは、さういふ一つの修行をするに過ぎないのである。どうしても自分の心から總てのものを、福を轉じて福ひとなし、悪を變じて善となし、鐵を化して金となし、迷ひを轉じて悟りとなすやうにしなければならぬ。其の力の源を考ふるに、元來我は智慧の團まりである、慈悲の團まりである、大勇氣の團まりであるから、今いふ通りにもなるのである。其處が有難い。彼の観音の力を念すればといふのは、さういふことである。又一つ話を思ひ出した。ふい〜と思ひ出すから次手にいふて仕舞ふが、大岡越前守といふのは、これは誰でも通俗的に能く知つて居る。江戸の町奉行として、多くの公事訴訟を裁いた名判官として知

られて居る。其大岡に就いての話であるが、徳川八代將軍吉宗の所へ或日大岡が登城をした。御前に拜謁すると、將軍の申すに、「お前は太閤町奉行として令聞がある、人が皆なお前のことを褒める。六かしの訴訟事でも六かしの公事ごとでも、あの通り立派に捌くには、何か種——骨があるだらうと人がいふ予もさう思ふが、どんなものか」。大岡、「左様でございます、満更ら無いこともございませぬが」といふと。將軍は、「予も果してさうとは思つたが、どんな種か、それを聞かして貰ひたい」。大岡「左様でございます、正義といふ種であります、正義は正しい道理で、これが私の總ての裁判をする時の種であります。之に依つて一切のことを裁くのであります」と答へた。併しお互に考へても、正義正道といふやうなことは、元と抽象的な言葉で形に現はして見せることの出來ないものである。それにも拘はらず吉宗公は、「正義といふ種があるなら、其の種を一寸目の前に取出して見せて貰ひたいものである」と洵に無邪氣に言はれたのかも知れぬが、大岡は、「左様で御座います、確かに御見せ致しますが、牛僧今日は持合せが御ざいませぬから、明朝あなたの目の前に明かにお分りになるやうに、種を携へて來てお目に掛けませう」と答へた。處が傍に居た諸大名は、大岡は種が正義だといふが、正義といふとは抽象的——これは今日使ふ言葉で其の時分は使はないが——目に見へないものである。然るにも拘はらず、明日の朝正義を目の前に現はして見せ申さうとお受け致した、どういふものを持つて來るか、これは見ものであるといふので、それが大評判になつて、翌朝皆な登城して待つて

居つた。其處へ大岡越前守は静々と登城して將軍の前に出て、而して禮を施し、相當の間隔を置いてちやんと坐つて、何か小さなものを風呂敷包から物々しく取出した。何かと見て居ると、張糊で作つた達磨さん、つまり玩具屋にある不倒翁を持つて來たのである。而して眞面目な顔をして、それを突飛ばすと、達磨さんは一旦倒れるが、又段々頭を上げて起き返つて來る。前から突飛ばしても、背ろから突飛ばしても直ぐにもとの儘起き返つて來る。右からしても左からしても、一旦は倒れるが間もなく起き返つて來る。さういふことをやつて見せた。丸で小供の機嫌を取るやうなことをやつて見せた。而して「正義の種を見せろといふ仰せであるから、斯やうに持つて參りましたが、これで分りになりませうか」と申上げた。——それに違ひない、味はうべきである。何遍倒れても又起き返る。正義もその通り、ちやんと中心點が極まつて、何遍倒れても必ず起る返る。大勢見て居つた人が成程さう云へばそれに違ひない、流石は大岡越前守であると非常に感服した。所が吉宗公は「正義は影で分つた、今度は正義とあべこべのもの即ち邪まのもの——邪道とはどんなものであるか、それを一つ次手に此處に現はして見せて貰ひたい」邪道といふものを形に現はして、分るやうに見せて呉れといふた。さうすると大岡は當意即妙、丸で手品師のやるやうに、直ぐと又布呂敷包の中から一つの獨樂取出して而して糸でそれを巻いて、放り出して糸を牽くと獨樂がごろ／＼と廻り出した、けれども或時間を経ると漸々勢力が衰へて最後に「コトツと落ちる。もう一遍念の爲め」といふて、又

やつて見たけれども同じことである。そこで大岡は、「これが即ち邪道で御さいます」と申上げた、一寸見ると只單なる御伽話のやうであるけれども、其意味は斯うであります。邪道は一時勢を得ても遂に倒れて仕舞ふ、消へて仕舞ふ、邪道とは斯るものであると、極く手輕に分り易く形に現はして示したのである、並居る諸侍も流石は大岡であると感心をしたが、大岡は更に今度は懐ろから小判を一つ取出して、それを不倒翁を横に倒して其上に置いた、そうすると流石の不倒翁も起き返るとが出來ない。ころつと起き上るのが不倒翁の性であるが、押へるものゝある爲めにそれに妨げられて起き上ることが出來ない。大岡は「此始末が分りになりましたか」と、諸侍にグツと目を注いで、「これは斯うで御さります。正義といふものは、必ず倒れないで起き上るものであるが、其の頭に斯ういふ黄色のものを載せると、如何に不倒翁でも起き返ることが出來ない。我々人間のうちにも、それと同じく正義の頭を抑へられ正義の働きを縛られて居る者はないか」と殊に嚴然として諸侍を顧み諸君が皆斯かることに注意心が疎かであるから、往々正義は立つと能はず世の中から隠れて仕舞ふ場合が少なからずあるといふとを暗示したといふ事である。此の話は或は幾分か拵へごとであるかも知れぬが、道理は即ち道理である。經文に「枉桷せられ枷鎖せられ」とあるのは矢張りさういふ事で、皆な自ら不正不義の心を以て而して自由解脱の心を縛つて居るそれである。其惡鬼維利又は毒龍諸鬼等といふものは外から來たものでなくして皆な内から生ずるものである。此の場合に當つて、彼の觀音の力を念ず

れば時に悉く敢て害せずと斯ういふ。

「若し惡獸に圍遶せられ、利き牙瓜怖るべきも」と斯ういふ。これも矢張り物と言葉が變るけれど、意味に於ては同じことである。獨りぶらりと山にでも行つた時に、惡獸に出遭ひ猛獸に出遭ふてそれに取り圍まれることがある。けれどもそれは事實の上の事で、我々の心の中には、又色々の象の如き虎の如き狼の如き、偶まには狐、貉のやうなものがうじ／＼として住んで居る。それが心の中に生きて居つて、鋭利なる牙や爪を有つて居る。而して我々がそれ等の惡獸によりて害せられんとする場合であつても、「彼の觀音の力を念ずれば無邊方に疾走せん」と斯ういふ。丁度これは物を衡るやうなもので重い方が下つて軽い方が上がる。我々に對する外境又は内境といふ此の觀念も、矢張りさうである。自分の力が強ければ、言ひ換れば、確かなる信念、信仰を有つて居るならば、外界から來たものは皆な其の力に敵することが出來ない。假令猛獸に圍遶せられる場合でもさうである。彼の觀音の力を念ずれば、猛獸ども、皆な無邊の方に走り逃げて仕舞ふ。今日は此處までにして置きます

第二十一回

頑蛇及蝮蝎 氣毒煙火燃 念彼觀音力 尋聲自回去
雲雷鼓掣電 降雹澍大雨 念彼觀音力 應時得消散

衆生被困厄 無量苦逼身 觀音妙智力 能救世間苦
具足神通力 廣修智方便 十方諸國土 無刹不現身
種種諸惡趣 地獄鬼畜生 生老病死苦 以漸悉令滅
眞觀清淨觀 廣大智慧觀 悲觀及慈觀 常願常瞻仰

【釋】 頑蛇及び蝮蝎、氣毒煙火の如く燃えんに、彼の觀音の力を念ずれば、聲に尋いて自づから回り去らむ。雲雷鼓して電を掣し、雹を降らし大雨を澍かんに、彼の觀音の力を念ずれば、時に應じて消散することを得む。衆生困厄せられて、無量の苦身に逼らむに、觀音の妙智力、能く世間の苦を救はむ。神通力を具足し、廣く智力便を修め、十方諸々の國土、刹として身を現はさずといふことを爲し。種々の諸惡趣、地獄鬼畜生、生老病死苦、漸を以て悉く滅せしめむ。眞觀清淨觀、廣大智慧の觀、悲觀及び慈觀、常に願ひ常に瞻仰せむ。

【譯】 「頑蛇及び蝮蝎、氣毒煙火の如く燃えんに、彼の觀音の力を念ずれば、聲に尋いて自づから回り去らむ」と斯ういふ。字義は大抵分つて居りませうが、頑蛇と蝮蝎、これは大體似よりの蛇の類である。頑蛇と一つにいふたならば、蛇とかくちなわとかいふ類でありませう。それから蝮蝎といふことは、まむしといふやうな類で、字書に詳しく出て居る。蝎といふのは、支那あたりに行くこと

初め私は大きいくちなわかまむし見たいなものと思つて居た所が、實は小さなもので、とかげの類である。極く小さな足のあるものである。私は日露戦役に従軍して、支那人の家に能く舎營した。向ふの百姓の怪しい家に泊つて居ると、高塚や石垣などの間に出来て来る小さい虫である、けれども之に噛まれると、捨て、置けば命までも取られる。非常な毒を有つて居るものである。それらの虫を蝸といふ。其の他印度邊に行くと、這い虫の類に色々ものがある。私が印度に行つた時、印度僧の眞似をして、跣足で熱砂の上を歩いたが、路にとかげの大きいやうなものが――妙なものが澤山居つて、赤い舌をぺろ／＼出して人に馴れ／＼しく近づいて来る、見つけないと厭やなものである。其の他長虫の類がどつさり居る。故に斯ういふ御經の文言の中にも、さういふものが引合ひに出されることが多い。蛇といふものは、貴女方の中に或はお好きの方もありませんが、大抵は嫌ひであらうと思ふ。私は卑怯な話であるけれども、長虫は頗る嫌ひで、――婦人でも私の知つて居る方で蛇を愛する婦人もあるから、何ともいへないけれども普通は氣味の悪いものとせられて居る。

併し蝸であるとか青大将であるとか、さういふものを此に持出したのは實は借物である。何時も申す如く事釋といふて、事實の上ではさういふものが矢張り此に現はれるのであるが、其の實は理釋といふて理觀的に之を眺めて見ると、恐るべき、――清姫が大きな蛇に化したとか、又江州にある百足山を、百足が六巻きも七巻きも巻いて、それを田原藤太秀郷が退治したといふ様な昔物語は暫らく措

て、先づ第一に我々が常に恐れ慎んで居らなければならぬのは、銘々のお腹の中に持つて居る蛇蝸及び蝸蝸でありましょう。勿論どんな蛇が我が胸中に住んで居るか、醫者に頼んで解剖して貰つた所で、そんなものが居る筈は無いが、唯だ一つ貪瞋痴、さういふものが一寸顔出しをすると、それが七巻き半所の騒ぎではない。愚痴とか瞋恚とか貪慾とか、一つのものに限られたものではないが、一度びさういふ愚痴といふやうなものが、蝸蝸のやうに毒を含んで現はれ来たとすると、中々恐ろしい。管に人を巻くのみならず、自分自身が巻かれて仕舞ふ。昔から蛇は鬼と並び呼ばれて、懐ろには鬼が住むか蛇が住むかと、さういふ意味に使はれて居るが、それが色々に形を現はして来て、一度び惜いとか欲しいとか惜しいとか可愛くて溜らないとか、斯ういふやうなことに囚はれて来ると、中々恐ろしい。自分の身も巻けば人も巻き、家をも倉をも巻き締めて仕舞ふ。中々恐ろしいことである。それであるから能く公平に自分を調べて見ると、時々居ない筈である蛇が、ひよくりと尻尾を現はして来るとがある。居らない筈の毒虫が直ちに頭を擡げて来る。それが直ちに御經でいふ通り、其の恐るべき頭蛇なり蝸蝸なりの其の恐ろしい氣毒が、煙火の如くに燃えるのである。――これが皆な毒を有つて居る。我々自身でも、矢張り人間の心といふものは、(平たい意味に於て心といふものは)毒にも薬にもなる。毒虫でも用ひ様によつては毒にも薬にもなることは、我々の知つて居る所である。これが薬の方でなく、毒の方に於て一つ猛烈なる所の勢を逞しよして来ると、中々恐ろしい。頭蛇及び蝸

蝸、氣毒煙火の如くに燃えんと斯ういふ。烈々たる活火の如き勢を以て我に向つて掛るのである。表面から見ると、世の中は何時も天下泰平、人々優しい顔をして何時も觀音様のやうな顔をして居るけれども、一度び貪慾、愚痴、又は瞋恚といふやうな怒りの一念が萌して、此に毒を含んで現はれて來るといふと、煙火も雷ならないまでに燃え上つて來るのである。斯ういふ有様になつたならば、假令身は金殿玉樓を連ねた別荘の中に住んで、柔かな着物を着、美しい食物を喰べて居つても、同時に自身は胸中安き心はなく、年中火の車に乗つて居るやうなものである。併し假令一度び其の中にあつても、一念の信仰心があつたならば——燃立つ火の中に居つても、大波小波が山をも蕩かすやうな水の中にあつても、煙火のやうに燃立つた心でも、香爐上一點の雪といふことがある。今燃立つて居る火鉢の中に一點の雪を投ずれば直ちに融けて仕舞ふ。宗教の有難さは其處にある。大體人間を色々に分けて見ると、といつては濟まないかも知れぬけれども、多くの人は自分の爲めに自分を愛して、それで宜いと極め込んで居る人がある。そうすると利己一遍である。人は兎もあれ、自分さへ宜ければそれで宜い。斯ういふことで濟まして居る人がある。一面から見ると、一點の宗教心もまだ自覺して居ない人々である。世の中の我利／＼亡者惡虫の如きは其の連中である。そこで何かの動機によつて一度び宗教といふものが要るやうな場合になつても、やつと其の事に氣附いて來た位では、多くは自分の爲めに宗教を信ずるとか、自分の爲めに神佛を拜むとかいふ位に止まる。こ

れ等はまる／＼神佛を無視して居るのでないが、其佛を拜み神を拜むのは、拜んだならば何かそれが自分に禍を變じて福ひを來さしめるだらうと、斯ういふのである。故に其處等あたりの神社に行つて拜んで居るものを見、又佛閣——例へば淺草の觀音様などに行つて拜んで居るものを傍らから見ると一生懸命になつて多くの人が拜んで居るが、大抵は自分の爲めに神佛を拜んで居るのである。勿論それも決して悪いことではない。併し矢張り自利に外ならない。僅に一錢銅貨を一つ投げて、何かそれを進物にでもしたやうな積りで、何か賄賂でも使つたやうな意味で、而して家内安全、息災延命、商賣繁昌、子孫長久といふやうなことを祈る。私は敢てそれをよせといふのではないが、何か其處に自分の思ふ通りに世の中が行けるやうに思つて投げた一錢で何か好いことを買ひ得られるやうな心持ちで拜んで居るのは少し慾が深過ぎる、只私の遺憾に思ふのは、眞に報恩奉捨とかいふ意味で、假令五厘錢一つでも投げるといふ人は割合に少なくて、己れの爲めに神佛を拜むとか宗教を信ずるとかいふ人が存外に多いといふ事である。次にそれよりも一歩進んだ者になると、今度は神佛の爲めに神佛を拜み、宗教の爲めに宗教を信じて居るといふやうなことも言ひ得ることが出来る。それから更に宗教心が向上して一段進歩して來ると、餘りさういふことのみをやつて居ては意義が無いといふことが分つて來る。そこで今度は宗教の爲めに自分を愛するといふても宜い、神佛の爲めに自分を愛するといふても宜い。政治家でいふと、國の爲めに自分を愛する、世界人類の爲めに自分を愛さなければならぬ

と斯う成る。自分を愛するのが職分である。道の爲めには矢張り自分を愛さなければならぬ、生命あつての物種である。其處まで進んで行つたなら、我々は朝から晩まで、行住坐臥の立居振舞ひ、灑掃應對の末に至るまで、皆な佛の言葉、神の教へといふ意味になつて來てあらう。其處である。一點其の心があるならば、假令頑蛇及び蝮蝎、氣毒煙火の如く燃ゆると雖も、彼の觀音の力を念ずれば、聲に尋いて自づから回りに去らむと斯ういふ。觀音の力といふのは、何時もいふ通りである。大慈大悲の觀世音菩薩と一心不亂になつて念じたならば、恐ろしき毒虫も逃げ去つて仕舞ふであらう。その事は先づ第一に自分の心を省れば一番明かである。これではいけないと悟つたならば、南無觀世音菩薩と翻つて一心になつて念ずる、さうすると貪慾も愚痴も瞋恚も朝日の前の霜の如くに消てえ仕舞ふ。意味は何時と同じで、さういふ側に囚はれてはならぬといふのである。

「雲雷鼓して電を掣し、電を降らし大雨を洩がむに」と斯ういふ。事實の上から見れば能く分つて居る。例へば今日は日本晴れといはうか、洵に一點の雲も無いといふて居ると、何處からかふいと一片の雲が空に現はれて來る。それが本で、今まで晴天白日であつたのが、今度は忽ち大空一面に墨を注いだ景色、ごろ／＼と鳴り出し、びか／＼と光る。斯ういふ景色は我々の常に見て居る所である。昔の人は中々正直で、此に雷がごろ／＼鳴り出すといふと、學理の分らない時代であつたから、それが神様か鬼のやうな姿をしたものと思ひ、虎の皮の褌を締め、大きい袋を背中に背負つて居るのは、こ

れが風の神で、雷様は大きな太鼓を背負つて居つて、両手に撥を持つてごろ／＼と鳴らせる。地震は鯨のやうな大きな魚が地下に棲んで居つて、それが身振りでもしようものなら、不時に大地震が起つて來ると思つて居た。可笑しいやうであるが、さういふ時代があつた。今日學問の開けた時代になると、唯だ雷といふて様とも何とも云はない。昔は雷様と、必ず様づけにして、矢張り一つの神様の如くに思つて居つた。今は雲の一點起つたのもちやんと其源因は分つて居る。どういふ氣象の配置でさうなるか、能く分つて居る。雷の鳴るのも皆な分つて居る。學校の小供も知つて居る。びか／＼光るのも、昔は矢張り神の働きと思つて居つたけれども、今日電信局に行つて見ると、そんなものは朝から晩まで使つて居る。電話局に行つても其の通りである。無線電信の集まる所へ行つて見ても其の通りである。昔し神の如くに思つたものを、今日は子供の如くに使つて居る。電車は我々の乗つて居る車を電氣が後押して居ると思つて宜い。併し此處はさういふことではない。矢張り今のやうに理觀的に、之を我が心の内に籠めて而して考へると、我々の心は平生日本晴れの筈である。それが持前であるけれども、一點無明の雲が起つて來ると、迅雷風烈といふやうな有様になつて來る。電氣がびか／＼光り出すといふ有様になつて來る。人間一度び癩に障り胸が立つといふやうになつて來ると、先づ顔色から變る。平生の優しい眼附さが殆んど變つて來る。それである。即ち迅雷風烈の有様である。雲雷鼓して電を掣せんにといふ程に、實に凄じき景色になつて來る。さうなつて來ると、電

が降り出す、又は大雨大風といふやうな大暴れになつて来る。斯ういふことが多いであらうと思ふがそれには色々調べる道々があつて、或は監獄署に行つて見るとか、或は裁判所に行つて見ると、色々な罪人が集まつて居る。…其の原因を聞いて見ると、大抵は家庭の不和である。それが多いやうである。家庭の不和であるとか、或は憐れむべき病氣であるとか、或は四圍の境遇の悪感化であるとか種々様々であるが、就中今日喰ふに困らない人が悪いことをして行つて居るのは、それが大抵家庭の不和から起つた犯罪である。夫婦は洵に親むべきもので、偕老同穴とさへ云はれて居るのに、其の夫婦が他人のやうな冷やかさに苦しんで居る人もある。他人のやうなのはまだしもであるけれども、甚しいのになると仇敵同志が集つたやうなものもある、我々素人の眼に見るとさう見へる。親子喧嘩で来て居るのがある。親は慈に子は孝でなければならぬ筈であるのに、それが情けない敵意同志の寄合ひのやうな親子がある。子に依つて親が殺されることもある。中々恐ろしい。それから又兄弟仲が悪くて、それが本で罪に觸れて居るものもある。それから使つて居る人と使はれて居る人とが、どうも意思が疏通しない、情意の調和が取れない。さういふやうな原因が、一番不幸の本になるのであらう。矢張りさういふことからして、色々斯ういふ現象が現はれて来るのであつて、雲雷鼓して電を撃し電を降らし大雨を洩がんにといふやうなものになつて来る。が、併しながら其程の不幸に陥つた場合でも、彼の観音の力を念ずれば、時に應じて消散するを得んと斯ういふ。所謂此に一つ思ひ返すのであ

る。思ひ返すといふことは、何にかしら宗教的信仰が無いとそれが出来て来ない。例へば一時腹立つて唇を噛む程であつても、宗教心があつたなら思ひ返すことが出来る、心機一轉することが出来る。此に心機一轉すれば、時をも待たずして消散するを得んと斯ういふ。暗闇みの如くに擴がつて居る黒雲も、忽ち跡方もなく消え失せて、矢張り本の如く晴天白日になる。斯ういふことは屢々お互に經驗して居られるでありませう。

「衆生困厄せられて、無量の苦、身に逼らんに」と斯ういふ。衆生——どうも生きとし生ける所の人は、今いふが如く困厄といふことを免れない。併し困厄の中にあつて樂を得せしめなければならぬ。色々苦しい許りではないけない。不自由の中に満足の内を持つて居なければならぬ。其の苦しみの中に於て、一つの樂しきを見出さなければならぬ。澁い柿の内になつて甘味を見出さなければならぬ。それが宗教の力である。古人は色々言葉で以て其の意味を現はして居るが、例へば静かなることをいふにも、動盪散亂の中に於て静かなることを見出してこそ、始めて重要な意味が現はれて来る。樂しい中の樂みは側から見ただなら樂しいかも知れぬが、他人の見る程樂しいものではない。毎日御馳走に飽き美しい着物を着て居乍ら、朝から晩まで此うでもないあゝでもない、盛んに不満足が増長して来る。既に不満の心があれば、どういふ金殿玉樓の中に居つても、決して安心のなる譯ではない。故に樂しみの中の樂しみといふことは、實に本當の樂しいのではない。苦しい所に於て樂しみを見出して

こそ、始めて眞の樂しみといふことが出来る。此消息は唯言葉でいふただけでは物足りないが、それを漢文などで古人が巧みに言ひ現はして居る。見様によつては世の中は苦しみの海である。今こうしてお話しして居る内にも、我々御互はずん／＼と年寄つて行く、又かく安閑として居つてもいつ何時或病氣に襲はれないとも限らない。火の手は何時も我が懐ろに揚がり、惡魔は何時も我が足許を覗つて居る。迂つかりして居ると、足を掬ひ取られて仕舞ふ。併しながら其の危険なる中に於て樂しみがあつて居る。不幸にして無量の苦しみに身を逼るとも、必ず一つの力があつて遂に之を脱することが出来る。それは何處から來るかといふと、觀音の妙智力から來る。つまり不満の心の無い人が觀音の現はれた人である。貴女方は立派に行儀正しく見受けられる。觀音の慈悲圓滿の姿をして、璣珞を垂れて光りの中に坐つて御ざるとも見える。それは何故かといふと、一點偽はりの無い心で汚れの無い信仰心を有つて居られるからさう見える。觀音の妙智力といふと何か人間とは別なもので、佛に限つた力、觀世音菩薩の持前の力でもある様に思ひ違ひをする者もある様であるが、決してさういふものではない。妙智力とは奇妙不可思議…觀音は何の現はれかといふと、大慈悲心、大智慧、大勇猛心、世間の言葉でいふと智仁勇の現はれである。もう少し鄭重にいへば、大慈悲、大智慧の力を實行して行くにはどうしても大勇猛心が無ければならぬ。勇猛心は一の決心である。幾ら好い考を起しても、決斷が無ければ智慧も却つて迷ひとなつて來るやうなものである。今もいふ通り、慈悲と智慧と勇猛心と三つ

の現はれが觀音であるが、實は此三つは三つではなくて一つである、一つになつて働いて而して妙智力を現はすのである。強い點に至ると、洵に強い所の力である。それは男性的にも理は女性的にも現はれて、色々著しい例が澤山ある。

此の男性的に智仁勇を現はし、觀音の妙智力を現はした一例を挙げると、四十七士が忠の爲め義の爲めに、一語でいふと忠義の爲めにあれだけの力を現はしたのは、觀音の妙智力が矢張りさういふ方面に現はれたのである。女性的に智仁勇を現はした例も澤山ありませう。例へば仙臺萩の芝居を見てもさうである。政岡が世にも珍しい智仁勇の力を振ひ、而してあの通り奥州五十四郡の君を安んじ、自分の一分身たる千松を透して、到頭自分の素志を貫いて居る。あの婦人は烈女傳を見ると中々の烈婦である。政岡が千松に對しての述懐を見ると、實に仁あり義あり、深い女性的の涙の溢るゝが如き心持を現はして居る。世間誰も知つて居る所であるが、さういふことは澤山ありませう。又例へば三勝半七などを見ても、酒屋のお園の有様が、如何にも貞順に優しく現はれて居る。今日では着眼點が違ふかも知れぬが、矢張り信仰の現はれである。仙臺萩の文句の中に、神や佛のお情けによつて、此の小さい子供が五十四郡の人々の其の決心を固めさす、其の犠牲となりて誠に國の礎であるといふことをいふて居る。中々あゝいふ文句にも、優美的にいふて居るが、偉らい所か現はれて居る。是れ皆な觀音の妙智力である。觀音の妙智力、能く世間の苦しみを救ふ。唯だそれがあるが爲めお互に頼もしい

ので、さもなくかつたならば、人間世界は唯だ苦しみの海である。
 「神通力を具足し、廣く智方便を修す」と斯ういふ。神通力と申すと、何時の場合にも昔から因襲的に、言はゞ石に花を咲かせるといふやうな迷信を有つて居る。水瓶から火でも出すとか、瓢箪から駒を出すとか、肉體から後光を放つとかいふやうなことを想ひ起すが、決してさういふことではない。今もいふ通り、雜り毛の無い妙智力の働きて、それは御互銘々皆な神通力を有つて居る。既に我々が觀音の現はれとするならば、我々は皆な神通力を具有して居るのである。此の神通力に依つて廣く智方便を修するといふ。方便といふことは御經に屢々出る字である。現に權方便などいふこともあつて方便に幾つもある。自分の目的を達せんが爲めに手を代へ品を換へ、遂に目的を達せしむる方法便宜が方便である。方便と云へば何にか人の知らない秘訣でもあるかといふにさうではない。つまり佛が衆生を度せんが爲めに、權智を以て種々善巧工夫して疑を解き惑を斷じて一實の眞理に歸せしむるのを方便といふのである。故に眞の宗教は最上の方便なりとさへ云ふて居る、それに違ひない。
 「十方諸々の國土、刹として身を現はさずといふこと無し」。斯うなつて來ると、觀音様は淺草に安置してある許りでなく、京都の清水にも安置してあり、その他諸所方々にある。日本のみならず十方諸々の國土で、支那の補陀落山は觀音の淨土の如くに昔から云ふて居る。天然にもある。其處許りてなく十方諸々の國土、到る所刹として所として身を現はさずといふことなし。斯うなつて來ると、洵に

何處へ行つても觀音様にお目に掛らない所は無い。安心なものである。然るに斯ういふ信仰心が無いと、或る一つの知らない所に行つたり、或は一つの遠き國に行つたりすると、當分何でもないことにも不安な氣がする。寂しいやうな恐ろしいやうな氣持ちが生ずるのである。何も頼む所が無いから枕刀でも無いと寝られない。番人が無いと安心が出来ない、誰か護衛して呉れないと、どうも不安心であるといふことになるのである。言はゞ觀世音菩薩といふ信仰が生きて現はれた場合になれば、觀世音菩薩は我々の父ともなり母ともなり、夫婦の意味にもならうし朋友の意味にもならう。觀世音菩薩が請願巡査の意味にもならう。守刀の意味にもならうといふのである。頼む所が外にあるから、大に安心の念が生ずる。そのみならず、我々が何か手を擧げ足を投ずる、それは何かといふと、皆是れ觀世音菩薩の働きではない乎といふ所に立戻つて來ると、獨りで居つても寂しいと思はない。不自由とは思はない。何等精神の動搖なく、一の勇氣がそれから起つて來る。それは洵に有難き一念で信仰心があればこそ其の通りになるのである。斯うなつて來ると、所として身を現はさずといふことなし。——或る書物に極樂淨土の有様を書いてあるが、矢張りさうである。鳥が欣々として鳴いて居る。そこらあたり木の芽が吹く、そよよと風が吹いて居る。水鳥樹林、矢張り念佛の聲に外ならない。斯うなつて來ると、何時も塵の無い公園の中に逍遙して居る鹽梅である。何時も掃き清めた坐敷で安らかに坐つて居るやうな有様である。それはお互に各々經驗のあるとであらうと思ふ。腹立つて

堪らない時に、いやさうでない、何か荒縄で身體を縛られて居るのが、其繩がばさつと切れて仕舞つたやうな心持、何かさういふ風の經驗が澤山あるに違ひない。刹として身を現はさずといふことなし。「菩薩清涼の月畢竟空に遊ぶ衆生の心水清ければ菩提の影中に現ず」といふ。洵に其の通りである。「種々諸々の惡趣、地獄鬼畜生」と斯ういふ。諸々の惡趣——十界を立てると、佛以下の世界は皆惡趣に外ならない。尤もそれは程度問題で、優れて居るものと劣つたものとあるけれど、皆惡趣である。其所まで持つて行かなくとも、佛以下諸々の惡趣の内、就中三惡道と云はれるのが地獄、餓鬼、畜生、これが最も苦しい境遇である。我々の住んで居る世界は人間界である。此の外何處に畜生、餓鬼、地獄の世界があるかと尋ね廻るには及ばない。此座敷にもある。此の世界にもある。裏長屋にもある。裏長屋許りではない、立派な家庭の中にも於ても、心の向けやうによつてはちやんとある。此の地獄のやうな餓鬼のやうな畜生のやうな淺ましい境遇が到る所にある。昔は人間は神の子であると、佛敎でもさういつて居る。一度び信仰心を起したものは、佛の御子であるといつて居る。然るにも拘はず、現に世の中が進みつゝあるといふけれども、一面からいふと退歩するやうである。人間の着物を着、人間の顔をして居るけれども、或者は半獸主義などいふことを唱へて居る。半分は獸類であると自らいふて居る。成程吾々は迷ひの心と悟りの心があつて、佛の心といふやうな、さういふものが無くなつたとして見ると、そんなものかも知れないけれども、人間が甘んじて半獸的行動をなし

て憚らないとは、生きながらの畜生である。單に深く考へないで戯談にでもいふならば格別、さうでなく眞面目にさういふことをいふて、丸で獸類を以て安んじて居るものが澤山ある。全く生きながらの畜生である。人面獸心で、顔は優しい人間であるけれども、心は畜生である。斯うなつて來ると地獄や畜生や餓鬼は到る處にある、それから「生老病死の四つの苦」——生れる時の苦しみ、これも胎内から飛び出して其の時始めて生れたとのみ思つて居るのは實は迂濶である。又生れたからとて生れた許りで済むものではない。七十八十年の寄つた先きのことを考へなければならぬ。今は健康體である。病氣がないといふのはまどろしい考へである。細かに考へると、人間の生理狀態はどんなものであるか心理狀態はどんなものであるか。忽ち生れ忽ち死に忽ち病み忽ち老へて仕舞ふ。これに氣がつかずウカ／＼と唯モウ慾張り根性計りを益々高めて行くといふ風になりすまして居るのは、一面からいふとどうも阿呆らしい氣がする。生老病死、此苦しみは實は太陽の光りが目の前にちらついて居るやうに明白な事柄である。其處で前に云ふ地獄鬼畜生も、生老病死も一度び觀音の光りがさすと漸を以て悉く滅せしむるといふことが出來るとさう説く。

「眞觀 清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及び慈觀あり、常に願ひ常に瞻仰せよ」
 眞觀、清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及び慈觀、是れは五觀と申して、つまり五通りに觀念が別れるのである。觀といふ字は、先きに「觀世音菩薩」に就いて講じた時に一應説明して置いたから、此所で

は略するが、つまり観とは観るといふことである。観るにも種々ありて目で見ることもあるが、それ以上に心で観るといふ事がある。目は閉ぢて居つても、心では明かに観るといふ事がある、此所では見るとも云はず又看るとも云はず観ずといふのは意味のある事で、観はさると訓するので、觀世音菩薩は一心の上で三千大千世界の事を皆御覽になるといふことである。そこで観るといふ事は見ると同時に聞くこととなり、聞くと同時に味ふこととなり、味ふと同時に嗅ぐ事となり、嗅ぐと同時に觸るといふてもよいのである。五感の上では別々に相違する様にも思はるゝけれども観するといふ點から見れば皆一つである。自隱禪師の隻手の音聲何と聞くかといふ事も矢張り心の上で言はれた事である。

此五觀を教相家風に云ふと眞觀、清淨觀、廣大智慧觀は自利の上で、悲觀、慈觀を利他の上で講釋するのである。天台智者大師の説に従へば眞觀は空觀、清淨觀は假觀、廣大智慧觀は中道觀となるのである。天台の宗旨は其處に基くので、これを一心三觀と云ふて、一心の目で三通りに覺るのである。空觀とは世界は眞空である。此宇宙此世界を一面からは眞空と見るのである。然し眞空といふも差別の姿を離れた空ではない。眞空無相の中に山は峩々として聳へ、河は洋洋々として流れ、鳶飛で天に戻り、魚淵に躍るのである。されば一面からは空であるけれども、又一面からは假と見る。空とは平等、假とは差別である。然かし此平等と差別といふものは、もと二つではない、云はゞ楯の両面である。

あつて、空の上に萬象の姿がうららかに表はれる。うららかといふも眞空に外ならない。法は縁より生ず。法とは一切萬象である、法は卒然と見れば混雜を極めて居るが、此差別相は一々源因結果——佛法ではこれを因縁と云ふが、因縁によりて生ずるので、因縁を取り去れば其儘に眞空である。此所に至ると此世間を空と見るも一方向き、有と見るも一方向き、空でもなければ有でもない。平等も差別を離れず、差別も平等を離れぬ。「ありと見てなきは常なり水の月」といふてもよいが、之れをひつくり返へして「なしと見てあるは常なり水の月」といふても勿論よいのである。然かし空觀、假觀とどれ程講釋し、どれ程詮議した所で空と假、差別と平等と相對峙してどこ迄も相手方がある。そこで中道觀といふものが出て来る。中道觀とはまんなかといふ事ではない。絶對的に其儘眞理の表はれである。空でないと共に有でもない。又空でもあり有でもあるのであつて自由である。もとく一心は多方面で、同じ富士の山でも甲州で見る富士と、駿河で見る富士とは姿に多少の異ひはあるが、富士の山は同じく富士の山である如く、眞理もそれと同様で、平等から見ると差別から見ると、其趣きが異なるが如きも皆同一であるのである。別けて申せば眞觀、清淨觀、廣大智慧觀は自から悟つた境涯であつて、之を利他に及ぼすと慈悲となり、慈悲を二つに分けると慈觀と悲觀となる。悲觀は與樂で慈觀は拔苦である。然かし此二つも假りの區別であつて、拔苦で與樂は與樂は拔苦で敢て別のものではない。悟りを得てそれを他に及ぼす、

それが大慈大悲であるが、觀音は此慈悲の願を以て此世をあまざす洩さず救ひ上げる。それを悲觀、慈觀といふのである。

勿論此所には五觀と指してあるが、これは五つに限つた事ではない。ひろげれば無量に弘がる、相次第で無數になる。三十二應身とも云ふが、これも三十二に限つた事ではない。鏡が萬象の影をうつすが如く、來る者は皆あます所はないのである。

觀音はかゝる菩薩であるが故に、常に願ひ常に瞻仰せねばならぬ。心を空うして我以上の者に對する様にせねばならぬ。恰も赤子が母親の乳房にすがすが如くせねばならぬ。然しこれは向ふに觀音を立て、の事であるが、實は眞觀以下五觀を觀音におあづけて置くではない。我れにも亦此五觀があるのであつて、其處迄自覺し、徹底せねばならぬ。我れと觀音と別物と見るのは淺い見方である。觀音の御案内により、我れも亦何のあらはれであるかと、自から省みて見ると、我れも亦智慧と慈悲と勇猛のあらはれであつて、觀音と我れとは合せ鏡の様なものであることがわかる。觀音を拜むといふのも、外の觀音を拜むのではない。佛敎者は此の如き觀念を持たねばならぬ。自分のものである事を自覺せねばならぬ。宗敎心のない者はどうもそこ迄なく行きませぬ。自分の事とは氣がつかぬ。昔しさる所に一人の婆さんがあつて、嘆じて云ふには、今は世が末になりて、獨り人間がわる賢くなつて怠ける許りでなく、鶏までが横着になりて昔とは違ひ、其役目たるトキを告げることとを怠

たるのみか、欠伸許りして居る様になつて、何となさけない事である

と云はれたさうであるが、何くんぞ知らん、それは鶏がトキを告げぬ様になつたのではなく、婆さんの耳が遠くなりて、鶏の聲が聞こえぬ様になつたのに氣がつかなかつたといふ話がある。自分の事に氣の付かぬのは、大方こんなものでありましよう。

眞觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀、慈觀、これを我物として見ると試に難有い、故に常に願ひ常に瞻仰すべしであります。

例へば人間にはマガさすといふ事もある、そいふ場合にもナニカ一點の觀世音菩薩の如きものが認められ得れば思ひ返しもし、又氣が付くといふ事もあるが、宗敎心のないものだと、遂にドン底迄落ちて仕舞ふ。大切の事でありませぬ。

第二十二回

無垢清淨光 慧日破諸暗 能伏災風火 普明照世間

悲體戒雷震 慈意妙大雲 澍甘露法雨 滅除煩惱燄

諍訟經官處 怖畏軍陣中 念彼觀音力 衆怨悉退散

和訓

無垢清淨の光ありて、慧日諸々の闇を破り、能く災の風火を伏せ、普ねく明かにして世間を照

らす。悲體の戒は雷の如く震ひ、慈悲の妙は大なる雲の如し、甘露の法雨を澍ぎ、煩惱の骸を滅除す。諍ひ訟へて官處を經、怖畏なる軍陣の中にあつても、彼の觀音の力を念すれば、衆々の怨悉く退散せむ。

【釋】「無垢清淨の光ありて、慧日諸の闇を破り、能く災の風火を伏して、普く明かに世間を照す」無垢清淨の光りとは、五觀を總合して申したので、一點の汚れもある筈はない。生れた儘の赤子の様なもので、其境涯は無垢清淨で、何の財産も着物も慾望もない。心の上に於ても亦そうである。それが生長するに従ひて次第に汚れて来るが、それをその儘にして置かず、一度び自省して氣がつくともと／＼持つて居る玉のことであるから、汚れはとれて光りを發するのである。我々が觀世音を拜むのは、我々本來具有する清淨の光りを發輝せしめようとするのである。その光を認めるのが慧日である。我々の本來の光りの現はれるのは、太陽か雲を破りて日光がさす如きもので、闇といふのは物質上許りてなく精神界にもあつて、あさましき境涯の事を地獄、餓鬼、畜生といふて、それを生み出すのであります。大智度論に「昔しばけものありて、くらがりといふものを追ひ出さんとし、朝から晩迄骨打りて追ひ立てたが、どうしても去らない。所へ或る人が炬松を持つて來たら、直ぐにいづくへか消へ去つた」といふ事が書いてあるが、それと丁度同じ事で、慧日を認めざる間は心の闇はどうしても去りませぬ。

水と火と風の事を三つのわざはひと佛法では云ふてあるが、世界が段々末期に近いて來ると、衆生の汚れの心から起る火、迷の火、瞋の火、罪惡の火、其等の火が悉く世界を燒き拂つて仕舞ふ。山でも川でも丸で灰にして仕舞ふ。それから大風が吹いて來て、今まで焼いたものを皆な吹き飛ばして仕舞ふ。而して大洪水が起つて來て、何もかも有らゆるものを押し流して仕舞ふ。此の大洪水の力、大風、大洪水の力は非常に猛烈で、火の方は色界の初禪天に達し、水の方は第二禪天に達し、大風は第三禪天まで吹拂つて仕舞ふと云はれて居る。此の禪天といふのは、所謂三界の中の慾界には六天があり無色界には四天、色界には十八天ある。其の色界の第三禪天まで達するといふのであるから、總て物質界のものは皆此の火、風、水の爲めに蕩かされて仕舞ふ。斯ういふやうなことが云はれて居る。それは重にも世界の終りあることに就いていふたのであるが、之を直ちに我が精神上に持つて來て考へて見ると、此の大風が我々の精神上に起ることがある。一切の善根功德を吹き飛ばして仕舞ふ。殊に大なる火災が生ずる。之に因つて善根功德の根底まで燒き拂つて、更に大洪水といふものが起つて來るとこれは何もかも丸で洗ひ流して仕舞ふ。其の風其の水其の火は、即ち貪慾なり瞋恚なり愚癡なりと斯う見て宜い。いつも言ふ通り理釋といふ方で考へて見ると、さういふ風に見へる。其の災いと雖も、此の無垢清淨の光を以て悉く打ち伏せて仕舞ふと斯ういふ。普ねく明かにして世間を照らす——此の無垢清淨の光りは、夜晝無しに照らし給ふのである。我々地球上の有様からいふと、天體の作用に

依つて晝もあれば夜もあるのである。けれども無垢清淨の光りは晝語りてなく、夜も照らして居る、いつも照らして居る。日月は覆盆の下を照さずといふて、お盆を伏せれば日月の光りも其の下には及ばないといふが、此の無垢清淨の光りはお盆を伏せようがどういふ牆壁を設けようが、又どんな鐵の網を張つて置かうが、隅から隅まで照らさないといふことは無い。物質の光りは照らす所に限りがあるが、此の無垢清淨の光りは獨り物質界のみならず、精神界までも普ねく照らして居る。道理の上で隅々残らず照らして居る。矢張り自分で考へて見ると、それ／＼分に應じて大なり小なり其の光りを認めることが出来る。斯うなつて來ると、悲體の戒は雷の如く震ひ慈意の妙は大なる雲の如しと斯ういふ、現實に於ても今日は大分雲を起して、何處かに雷がごろ／＼鳴り出したが、其の雷の如く雲の如しと、慈悲といふものを身體と心の二つに此處では引き分けて見たのであるが、根本は一つである。慈悲の身體といふものは、即ち觀世音菩薩のあの通りのお姿と共に我々も此に有つて居る。此の身體が即ち慈悲の現はれである。假令是れが聊か垢つて居つても又塵がたかつて居つても、少々綻びた衣を着て居つても、慈悲の身體であるといふことを自分が自覺した上は、それが莊嚴である。我々が肉の身體を有つて居る以上は、造り飾らなくとも相當の莊嚴を有つて居なければならぬ。慈悲の身體の着物といふべきものは何であるかといふと、即ち戒法である。佛教には十善戒といふものがあつてそれを推し擴めれば比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒、其他三千の威儀とか八萬の細行とか算へ

には限りもないが、大體にいふと五戒で澤山である。約めていふと三聚淨戒である。即ち第一が攝律儀戒、一切惡しきことはしないといふこと。第二が攝善法戒、同時に有らゆる善きことをしようといふこと。第三が攝衆生戒、有らゆる生きとし生けるものを濟度しなければならぬ、救ひ上げなければならぬと、斯ういふ戒である。それを三聚淨戒といふ。小六かしい話をしないで、本來戒といふものは、世間事といふと實踐道徳の事である。身體がある以上は相當の道徳が無ければならぬ。それを宗教的といふと戒法といふ。佛様は我々と違つて三十二相といふ氣高い姿をお備へになつて居り、八十種好といふ美しい所のお姿があつたといふのも、何の現はれであるかといふと、戒法を保たれた其の現はれである。其の光りといふもの、其の威嚴といふものは、恰も雷の震ふが如き嚴かなものである。ちやんと自分の身體を戒法で固めた人の側に行くと、何となく威があつて自然に身體が縮む様な氣がする。威嚴といふもの少くとも威儀といふものを相當に保つて居る人は、何となく冒すべからざる力を有つて居る。男女相對して居る時でも、ちやんと自分に正しい心を持つて居れば、決して邪念を起すものではない。それが一つの戒である。それが心に隙間があり身體に何處か懶けて居る所があるから、邪念邪想が起つて來るのである。ちやんと戒といふものに身を固めたものには、何ものも犯すことは出来ない、其處々迅雷に譬へたのである、轟々と鳴り渡る雷の如くに權威がある。身體も其の通り心も其の通り、其の慈悲の心に威力があるといふのは可怪しいけれども、慈悲の心ばせといふ

ものは、退いては戒を以て我が身を固め、進んでは慈悲を以て世の中に現はれるといふ工合に、恰も大なる雲の如く、一點の雲と雖も推し擴がると、ずつと隅から隅まで空を蔽ふやうなものである、山でも川でも何もかも雲に包まれて仕舞ふといふ有様。即ち悲體の戒は雷の如く震ひ、慈悲の妙は大なる雲の如しと斯ういふ。之を身口意の三業に分けて云ふて居る人もある。嚴密に教相風にいふと色々あるが、今は略して置く。が假りに分けていふと、つまり身口意の三業即ち身體と口と意と斯ういふものに分けると。悲體の戒は雷の如く震ふといふのが身體で、慈悲の妙は大なる雲の如しといふのが意、甘露の法雨を澆いで煩惱の焰を滅除すといふのが口に當る、即ち說法に當る。此の悲體をかざし此の慈意を體して而して說法良生と現はれた所の有様は、恰も甘露の法雨を澆ぐが如きものである。甘露といふものは即ち一つの藥である。此の一滴の雨が藥である。丁度長き日照り續きで乾き切つて居る時に雨が降ると之を膏といふても藥といふても、又は金といふても宜い。さういふ風に甘露といふものは大變に物の爲めに益をなす所の潤ひである。是れが即ち佛及び觀世音菩薩の說法の譬である。甘露の法雨を澆いで而して其の雨に煩惱の焰を滅除すといふ。一度び此の法雨が降つて來ると、如何なる惡想妄念でも立處るに滅する。例へば焰々と燃え立つて居る火の中でも、水を注げは見る／＼うちに焰が消えて仕舞ふ。それと同じく我々の心の中に色々の慾念が生じて來ても、南無大慈大悲の觀世音菩薩と、それに水を注ぎ掛けると、立ち所るに慾念は滅して仕舞ふ。丁度これが身口意の三業に

分けていふと、甘露の法雨を澆いで煩惱の焰を滅するといふのが口に當る。

「諍ひ訴へて官處を經、怖畏なる軍陣の中にも、彼の觀音の力を念ずれば、衆々の怨、悉く退散せむ」といふ。諍ひ訴へてといふことは、訟を聽く吾れ猶ほ人の如し必ず訟無からしめんと、聖人も言はれて居るが、中々人間の間に訟へ諍ひは盡きないものである。殊に近頃に至るといふと、權利といふやうなことを頻りに主張して居る。主張するのは穴勝ち悪い譯ではないが、つまり大抵のことは道徳上で話が附いて仕舞ふ筈であるけれども、今の人は道徳上で相談するといふ事を爲さないで、直ちに法律上で訟へるといふことをする。法律を楯に取つて人に向ふ時には、親子の間にも淺ましい訴訟が起つて來る。夫婦といふ親しい間にも直ちに訴訟が起つて來る。斯ういふ所からいふと、一時的の感情は實に淺ましいものである。洵に或一つの戀愛といふやうな點から見ると、實に膠漆も膏ならぬやうであつたのが、それが一度び利害といふ考になつて來ると、丸で仇敵と同様である。却て愛情が濃やかであればあつた程、それが一度び方角が變つて來ると、所謂可愛さ餘つて憎さが百倍といふ事にもなる、恐ろしいことである。夫婦の間否な男同志の間でも、法律上善き方に楯を取れば宜いけれども、悪い方に楯を取つて打掛るといふと、實に淺ましいものである。さういふ時に道徳上の考があり、更に進んで宗教的信念といふやうなものがあつたならばどうである。所謂不言不語の間にはさういふものが解け去つて仕舞ふと思ふ。又いさかいを仲裁しても、さういふ心の人ならば解け易いけ

れども、さういふ心の無い人は中々さばけない。さういふことは實地に於ても屢々出遭ふことであるが、偶々互ひに愆情の爲めに争ひを起し、而して訟へて裁判所に行つたとしても、若しさういふ心があれば、役所まで訟へ出た所で、其處まで行つても願下げになる。眞にもう觀世音菩薩の慈悲といふことを信ずるに於ては、假令評訟して官處を経ても、又は怖畏なる軍陣の中に於ても——軍陣といふものは實に恐るべきものである。今現に歐洲では戦争最中であるが、其方面の話は別として、何處の國の人も理想は平和である。假令理想として居ないまでも、少なくとも戦さといふものゝ善くないものであるといふことは誰も知つて居る。それにも拘らず人間は淺ましいもので、此人間界が直きに脩羅の巷になることは古來歴史上常に見る所である。私も日露戦役には暫らく従軍して戦争を實地に見て來ましたが、それは、恐ろしいものである。今日歐洲戦争の噂を聞いても、あらゆる文明の利器を使用して敵味方互に殺し合ふのみならず、強盗もやる、強姦もやる、犬だとか猫だとかいふて人間は平生は夫等の畜類を馬鹿にして居るけれども、犬も猫も敢てしないやうなことを平氣でやる。人間同志の方が餘つ程残忍酷薄のことをやつて居るようである。同じ殺すにしても鬪り殺しといふことをする、盗みをするにも殺して置いて盗む、姦淫も亦さうである。言ふことを肯かなければ生命を取るといふて責める、却て下等動物には、さういふことは少ないといふてよい、其他戰場には彼方此方に頭の骨が碎かれて居るものがあり、手足の千切れて飛んで居るものがあり、火災もあり、爆裂

彈が破裂する、誠に慘憺たるものである。さういふ境界に立入つて見ると、云はゞ人間も素裸となるのであつて、平生の心持とは異つて來る。つまり人間は平素泰平無事の時には虚榮もし虚飾もして、何んとかかんとかいふて、種々の衣を着て居る様であるが、イザ眞劍となつて、生死の界、脩羅の巷に臨みては、どうしても一切の着物、飾りは脱ぎ棄て、素つ裸にならなくてはならない。赤裸々になれば、貴族も平民もない。丁度生れ落ちた時には、貧富もなく、貴賤もなく、一樣に素つ裸體であると同様である。其素つ裸體となりたる際、眞に我心の力となるものはなんであらうかといふに、誠に水火をも避けないところの一つの宗教的信仰であると云はなければならぬ。即ち此所でいふならば觀世音菩薩の大智慧、大慈悲、大勇猛の現はれ夫れでなければならぬ。故に評訟して官處を経、怖畏なる軍陣の中にあつても、彼の觀音の力を念ずれば、衆々の怨も悉く退散するであらうといふ。獨り敵や仇がどん／＼逃げる許りでなく、敵をも化して我が味方とするのが出來る。偉大なる力である。惡しきものをも善に化せしむることが出來る。汝の敵をも愛すといふやうな心は、矢張り慈悲の心に基くのである。斯うなつて來ると仁者は天下に敵無しで、獨り仇敵が退散する許りでなく、此に退散さする程の威力があるのである。衆々の怨も悉く退散せむと斯ういふ。人間はせつば詰らないと、其の心は平生有つて居るけれども現はれないで居るのである。所謂自覺しないのであるが、斯ういふ場合にそれが現はれて來る。

或外國の一人商人が商業上種々劃策して居つたが、其事業が一度ならず二度ならず、皆失敗に終つて財産は悉く債権者の爲めに捲き上げられて、家財何一つ残るものが無く、竈の下の灰まで債権者に押へられた。そこで大に落膽をして、家に歸つて女房に向ひ、「斯う何もかも無くなつては死んで仕舞ふより外仕方が無い」と、非常に悄れて居つた。處が妻君は中々確かりした人で、「それはお困りだが、併しさう何もかも無くなりはいけません。私の身體も債権者にやつて仕舞ふのか」と問ふた。さうではないといふと、「此子供も債権者にやつて仕舞ふのか」「いやそれも遣らなう」「それならば此妻が有る此子が有る、而して貴下自身もまさか取られて仕舞ふのではありますまい」「無論それは取られない。それならばと、妻君が更にいふのに、「貴下は既に子供も残つて居るし、私といふ妻も残つて居るそれよりもつと親しい貴下自身の身體も残つて居る、何も憂ふる所はないではありませんか、此度の失敗の如き何でもありませぬ」と激まされたので、商人は平生其の位の理窟は知つて居るが、失敗に遭ふと迷ふので大に落膽をしたのであつたが、それで勇氣を回復した。日本でいふと――身體ありての物種といふ所だ。其商人は非常に發憤して、さらば此の身體を使ひ廻はして而して最善の力を盡して努力したならば、何の是れしきの失敗を回復することは何でもあるまいと、以前よりも勇氣百倍して、再び事業に手を盡したのが、後に大成功をしたと西洋の本に書いてあるが、私共からいふと、子が有る妻があるも結構だが、もう少し丁寧にいふと、身體は如何に苛なまれても傷つけられても、

我が心に實に金鐵をも透すといふ信仰力があり、此の觀世音菩薩の無垢清淨の光りを我々が認めて居つたならば、唯だ觀世音菩薩のお蔭で好い處へやつて貰ふといふやうな、さういふ自利上の事許りではなく又困難を救つて貰つて其の日を樂に送ると許りでもなく、愈々進んで如何なる困難にも堪へ、自分獨りのみならず、之を以て世を救ひ人を助け、進んで已まない所の勇猛精進の力、さういふ勇氣が此に生れて來ようといふのである。其處に宗教の力は偉大なるものを有つて居る。故に家康公は、どんな戦さに臨みてもびくともしないけれども、信仰ある者には實に困る。生命などは何とも思つて居ない、信仰の爲めに戦ふのであるから、其の力には如何なる精兵も及ばないと嘆せられたといふ事である。さういふ有様で、何につけてもさういふやうな急場に臨んで、本當の力が現はれて來るのである。彼の觀音の力を念ずれば、衆々の怨も悉く退散せむといふのがそれである。今日は此處までにして置きます。

第二十三回

妙音觀世音 梵音海潮音 勝彼世間音 是故須常念
 念念勿生疑 觀世音淨聖 於苦惱死厄 能爲作依怙
 具一切功德 慈眼視衆生 福聚海無量 是故應頂禮

爾時持地菩薩。即從座起。前白佛言。世尊。若有衆生。聞是觀世音菩薩。品自在之業。普門示現神通力者。當知是人。功德不少。佛說是。普門品時。衆中八萬四千衆生。皆發無等等。阿耨多羅三藐三菩提心。

和訓 妙音觀世音、梵音海潮音、彼の世間音に勝る。是の故に須らく常に念すべし。念々疑ひを生ずること勿れ、觀世音は淨聖にして、苦惱死厄に於て、能く爲めに依怙と作る。一切の功德を具し、慈眼に衆生を視給ふ、福聚海の無量なるが如し、是の故に應さに頂禮すべしと。

爾の時に持地菩薩即ち座より起つて、前んで佛に白して言さく、世尊、若し衆生にして是の觀世音菩薩品自在の業、普門示現神通力を聞かむものは、當さに知るべし。是の人功德少なからず。佛是の普門品を説き給ふ時、衆中八萬四千の衆生、皆無等々阿耨多羅三藐三菩提心を發しきと。

講義 觀音經の講話も此の席で先づ漸く終りを告げることになりました。それで今日は妙音觀世音梵音海潮音、彼の世間の音に勝れりといふ所から始めますが、此に音といふやうなことが、算へると丁度五つ許り出て居る。妙音といひ、觀世音といひ、梵音といひ、海潮音といひ、世間の音といひ、別々に斯う五つあるとして講釋すると小六かしいことになるが、一言に云ふて仕舞へば、總て觀音様の御説法は妙なる音聲、唯だそれだけで實は事が終つて居る。それならば其の微妙なる音聲といふのは、どういふ音聲であらうかといふに、廣くいへば私が今斯ういふ音聲で話をして居る其音聲が即ちそれである。今あの庭先まで彼處の瀧坪から水がさア音を立て居るのも、矢張り微妙な音聲である。其處等に風が木の葉を吹いてがさくいつて居るのも亦微妙な音聲である。さういふ風に廣くいへば何もかも妙音でないものはないのであるが、それは我々が外に向つて聞く音聲を、一度び内に向つて耳を傾ければ其處に微妙な音聲を聞くことが出来るといふのである。さういふ所を指して、或學者は先天内容の聲といふやうなことをいふて居る。先天とは天に先だつといふので、生れぬ先きと同じである。先天的に有つて居る内容といふのは、自分の内に――あからさまに云へば心の聲である。其の先天内容の聲が聞へたかどうか。それは自分自身で聞いて見なければならぬ。成程音聲は耳で聴くに違ひはないが、此きくらげを當てにして居る許りでは微妙の音聲は聞へない、更に進みて此の眼を透して、一層明らかさまにいふと心の眼、心の耳を透して見且つ聞かねば、其處に何等か先天内容の音聲は聞くことを得ないのである。つまり悟りを開くといふても、安心を得るといふても、矢張り其の聲を明かに聞き得るか否かといふ問題であるのである。それはもう近世我が禪門の大智識たる白隱禪師といふ人が隻手の聲などいふてやかましく云ふたのは、其微妙の音聲を聞きもし聞かせも仕様とする大慈悲からのことであつた、片つ方の手を突出して置いて、隻手に何の聲があるといふ。何の聲があるといふと、何も聲が無いといふことに聞へるかも知れないが、白隱和尚の心持では、此の隻

手の音聲を如何に聞き得るか、斯ういふのである。そんなことは一向譯が分らない、又聞いた所がそれが現時の世事の上に何の用も無からうといふが、さうではない。其處は大に考へなければならぬ。昔し早合點をする人があつて、白隠は隻手の聲を聴けといふが、つまりさういふことを言ふのは、人を惱まし苦しめる爲めであらうと受取つたものであるから、一首の歌を作つて之を嘲つた。「白隠の隻手の聲を聴くよりも兩手叩いて商ひをせよ」といふのである。そんなことを聴いて居つた所で、何の役にも立たない、それよりも商賣に身を入れて、兩手を叩いて金儲けをする方が、餘程氣が利いて居るといふので、言はゞ白隠禪師を嘲笑した積りである。處が白隠禪師はそれを聞いて、「商ひが兩手叩いてなるならば隻手の聲を聞くに及ばず」と、さういふ返歌をやられたといふことである。成程商ひにせよ何にせよ、總てのことをさらりと滞りなく、兩手叩いて行けるならば、何も先天内容の聲など聞くに及ばない。畢竟神といひ佛といひ轉迷開悟といふも、言はゞ無用の感じをなすのであらう。さてどういふものであらうか。平生無事の時には、お互に何も入用はない。毎日朝早く起きて晩早く寝る、何事も滞り無く無事に済んで、其の通り働いて行ければ、それは誠に結構の事であるが、此の世の中の事といふものは朝に夕を期し難い、何事が突然に此に起つて來まゝのものでもない。昔から妙なことを人が能くいふ、一寸先きは闇みだと。洵に其の通りで、聖人でも賢人でも學者でも智識でも今一と息後はどうなるかといふことは、豫言することが出来ない。當るも八卦當らぬも八卦で、偶々

豫言しても當らないことが多からうと思ふ。一面から見るとさういふ有様のものである。處が突然として何か其處に或事が起て來ると、其の時に至つて大變に周章狼狽をするのが我々凡夫の常である。さういふ實例は、世の中を搜して見ると到る所にある。成程思ひ通り計畫は坪に嵌つて行くし、思ふた通り立派な家も出來るし、美人の妻も迎へられるし、悉く意の如くになつて行かれる様に人により又場合によりては思はれやうが、どういふ機會で其の運命が忽ちにして引續り返らないとも限らない。果してさういふ不時のことが起つて來ると、平生腕力に誇つて居る輩でも、學問に誇つて居る輩でも其處に至つては大に疑ひを起す。是れから先きどうなつて行くであらうといふ疑ひを起す。矢張り一寸先きは闇の世である。であるから平生に於て、先天内容の聲といふても宜い。白隠の隻手の聲といふても宜い。南無阿彌陀佛に信仰を立てても宜い。此御經からいへば南無大慈大悲の觀世音菩薩と、其處に安心の決着をしても宜い。兎に角平生に其の準備をして置かなくてはいけない。誰しも皆内容を顧みるといふと、一種の聲を聞く、此聲は耳丈けでは聞へまいが、もう一つ心の耳、其の耳を聳つて見ると常に、言はゞ佛の常說法、さういふものが盛んに朝から晩まで說法して居るのを聞くであらう。之を說法の聲といふても宜い、又妙なる所の音樂の聲といふても宜いのであるけれども、我々は耳を蔽ふてその聲を聞かないことが多い。說法は常にあるが、只だ耳を塞いで居る。何人と雖も一度び其處に氣が付いて、如何なる音聲があるかと熱心に一稱の信仰を捧げて耳を傾けて見ると、遠方に

行つて態ざく聞くに及ばなかつた。此の通り一種の音聲が絶へず近く聞へるといふことに氣が附く
てあろう。其處まで到らないと、如何に妙なる音と雖も、それは唯一時的のものである。今いふ妙音
といひ先天内容の聲といふのを、白隠禪師は隻手微妙の音聲と斯ういふけれども、これは必ずしも隻
手には限らないのであるが、兎に角其の聲を聞くのが宗教の本領である。さういふ所から白隠和尚な
どは、或時「暗みの夜に啼かぬ鳥の聲聞けば、生れぬ先きの父を戀しき」といふやうなこともいふて
居る。成程此の聲を明かに聞き得ることが出来るならば、生れぬ先きの父母の音聲をも親しく聞き得
ることが出来る。父母のみならず、三世諸佛の御說法をも明かに聞き得ることが出来る。これは
大言壯語するのではない。誰しも其の道に這入つて居るものは、聊かなりともそれを聞き得る筈であ
る。東坡居士も「溪聲即ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身なる無からんや」といふて居る。斯ういふ鹽梅に
到る處皆な此の美妙なる音を聞くことが出来る。苟も觀世音菩薩の御說法は、皆な美妙音、妙音、次
は觀世音、世音を觀するといふ。觀するといふ字は見るといふ字で、分けていふと心で見るといふ。
或はもう一つ進んで、聞くと假名づけて居る人もある。何故ならば、觀世音菩薩は耳許り當てにして
居る譯ではなく、耳でも目でも舌でも身でも心でも此の六根によつて、六根一致した所に音聲を聞き
得るのである。世音といふて無量無邊の音聲を、明かに聞き得ることが出来る。斯ういふ工合に
なつて來ると、或は取り換へて「見る」といふても宜い。昔の人は耳で見よ眼で聞けといふて居る。斯う

いふと悟り臭くなるのであるが、實はそれが當り前である。大燈國師の歌に「耳に見て目に聞くなり
ば疑はじ、自づからなる檐の玉水」といふのがある。面白い。故らに耳で見えて目で聞くといふ。つま
り見るのも聞くのも六根全體である、嗅ぐのも六根全體で嗅ぐ、味うのも六根全體で味う。心の上か
らいふならば、此の心、身、舌、鼻、目、耳が一緒になつて色々に働いて居る。其處に立戻つて考へ
て見ると、自づからなる檐の玉水で、玉垂れの水が洵にちよろ／＼流れて居るのが、瀧の音の如くち
やぶ／＼やつて居るやうに聞へる。矢張り其の通りである。次に梵音、海潮音といふ。梵といふのは
何時もいふ通り淨といふ意味である。清淨の淨で清といふことである。梵音といふことは淨音とい
ふと同じ意味である。これが聞き得られたならば、如何なる汚濁の響きでも、世間の淫靡なる謠でも
言葉でも、どんな不淨な中でも皆な我にとつて清淨化する。自分の信仰の力少くとも修養の心の力
で、不淨のものも淫らしいものも、皆な我に持つて來ると清淨化して、洵に正しき大雅の音として聞
くことが出来る。それを梵音といふ。海潮音といふのは、潮といふものは誰も知つて居る通り満潮も
あれば干潮もある。常に干満といふものがある。月の廻りに隨つて満ちたり引いたりする。天地自然
の法則といふものが潮にある。その如くに觀世音菩薩の御說法も、時に隨ひ場所に應じて各々宜し
きを得て居る。それは今まであつた通り、三十二應身十九說法は皆なそれである。それを此に綜合し
て持つて來ると、勝彼世間音で、此の音聲は彼の世間の音に勝れりと斯ういふ。世間の音聲といふも

のも數限りはないが、其の中に於て最も勝れた所の音聲である。此の音聲といふものは嘗て汚れることもなく嘗て滅することも無いのである。是の故に須らく常に念ずべしで、斯ういふ尊き音聲であるが故に、須らく常念をして、寢ても覺めても心を此に置かなければならぬ。いつも申す通り觀世音菩薩は慈悲許りではない、慈悲と共に智慧をも備へて居る。智慧許りではない更に勇氣をも備へて居る。此の慈悲と智慧と勇氣の塊まりが觀世音菩薩の現はれなのである。常念といふのは其處に心を据へて置かなければならぬといふので、是の故に須らく常に念ずべし、念々疑ひを生ずること勿れと斯ういふ。それは信仰が確立しないと、「そんなことは無い。さういふ觀世音菩薩が何處に御座るか、何處に神祇があるか」と斯う疑ふ。自分の狭い心、小さい心を以て而して疑ひを生ずる。それ故に廻り遠い言葉であるけれども、此の身を正しくすると同時に、此の目を開きて、更に此の目を明かにしなければならぬ。其のことを天眼通といふたり或は五神通といふたり色々あるが、皆なそれである。決して念々疑ひを生ずること勿れと斯ういふ。

「觀世音は淨聖にして、苦惱死厄に於て、能く爲めに依怙をなし給ふ」——今までずつと詳しいとはいひ來つたから、重ねては云はないが、淨聖といふのは佛といふと同じことである。元とく觀世音菩薩が菩薩として現はれたのは、化現といふて假りに現はれたのである。其の本體は初めに申した通り、正法明如來といふて元とく佛様である。併し佛様としては餘りに位が高過ぎて、衆生の手を執

つて教化するに都合が悪いから、御自分から身を下して菩薩位に就き、而して男のやうな身體を現はす時もあるれば、女のやうな姿を現はす時もあり、十九說法三十三身と色々様々に姿を變へ、それから七難三毒、悉く皆な其の苦しみを救ひ上げてやらうといふので、菩薩として身を現せられたのである。故に觀世音は淨聖にしてと斯ういふ。「苦惱死厄に於て能く爲めに依怙をなし給ふ」苦惱といふとは、これも先前來屢々申した四苦八苦といふやうな類で、度びくお話したから、今此處ではくどく申さぬでも宜い。我々は只だ樂な方面許り見ると、浮か／＼して如何にも此の世の中が樂に見へるけれども、他の苦の方面を眺めて見ると中々さうではない。實に我々の身體は苦の容器見たやうなものである。其處に宗教心の有るか無いか分る。平生此の心の養ひがあるか無いか其處で分る。色々苦惱に出遭ふた時に——色々災難厄難は澤山あるけれども、一番苦しいのは死の一事である。此の時に當つて宗教心の有るか無いか依つて大變趣きが違ふ。實は私も近頃珍らしいとに出遭つた——これ迄亡くなつた人に引導を渡して呉れといふ頼みには屢々出遭つたが、世の中が進んだ爲めか死に臨んでまだ息を引取らない内に、一言半句でも宜いから話をして安心を與へて呉れといふ依頼を受けた。豫て私はさう思つて居つたが、死んだ後に引導を授けたり色々御經を讀んだりするのは、有難いものではあるけれども、實は生きて居る内に安心を極めてやらなければならぬ、又私は宗教者として其の人の精神を救ふてやらなければならぬ、少くとも一種の慰安を與へてやらなければならぬ。

それが寧ろ本當だと思つて居つたが、近頃さういふことに遭つた。一月以來瀕死の枕元にさういふ話を大分致したが最近に於ても——名は言はないけれども何卒親の心として娘は既に病が激しい爲めに言はゞ其方は箸を投げて仕舞つたが、せめては息のあるうち丈けは幾分なりとも其苦しみを少なくしてやりたいから、何か話をして貰ひたいといふことであつた。そこで往つて話をした。其の時兩親も枕元に一緒に座つて居られたから、簡単に話をして、先づ第一に兩親に向つて、今言つたことが貴下方に分つたかどうかと訊ねた。所が奥さんは私には分らないと云はれた。成程それは尤もであるが何か平生信仰を有つて御座るかと問ふと、平生何も佛や神を拜んだことが無いといふ。拜まんでも宜いが、何か深く心の内に落附けて置くことがあるかといふに、さういふことも一向無いといふ。最愛の娘が今死なうといふ時に、さういふ風では困る。當人よりも貴下方が宗教といふものはどんな物であるかを承知して居て貰はねばならぬ、此の際に宗教心を喚び起して貰ひたい、及ばずながらこれからお相手になるからと申して置いた。思ふに此の人許りではない。世の中に随分身分の尊い、貴族とか富豪とか云はれて居るのは結構であるが、精神的財産はどうであるかと考へて見ると、さういふ身分の人でも存外精神的に貧乏な人が澤山あらうと思ふ。これは其の人々に免れないことであるから、我々宗教者は其處に一言半句でも、工夫を盡して而して一つの安心の道を説いて聞かせなければならぬと、斯う思ふ。別してさういふ風に死に臨むと、人間は平生とは違つて儼然しない心が現はれるから

と思つて、今息を引取らうといふ娘に、小さい珠數を一つ持つて行つて興へた。段々考へて見ると、此の際六かしい話を聞かせた所が仕方が無い。それよりも簡単に安心の出来るやうにと、私は珠數を持つて往つて娘に授けて、苦しくなつた時に此の珠數を握つて口で南無觀世音菩薩と念するだけでも宜い。兎に角苦しい時にはちやんと此の珠數を握つて居るやう、之を握つて居さへすれば、少くとも大なる苦しみは減るであらうと申した所が、色々喜んで、當人は莞爾として病苦も薄らいだやうであつた。先達兩親が出て来て、あの時珠數をやつて下さつたので病人が大變喜んで居ると申して居つた。私は陰ながら喜んで居る。平生は何と言つて居つても、苦惱死厄といふことになる、色々疑ひが起つて来る、色々恐しい感じがする、將來はどうなるであらうと心配になつて来る、そこで妄想が色々起つて来て中々苦しい。それに依つて想ひ起すが、これは御承知の通り今の陸奥廣吉伯、あの方のおとうさんの陸奥宗光伯は、世の中で剃刀大臣など、云はれて切れ味の好い人であつた。丁度日清戦争の時、馬關條約の談判の際にはあの方が外務大臣で、總理大臣の伊藤公と共に全權大使として、これから馬關に乗込まねばならぬ時に、丁度十六七の唯だ一人の最愛のお嬢さんが痛ましい病氣に罹つて居つた。洵に氣掛りであつたけれども、併し國家の一大事に臨んで、左様な小さな家事に拘はつて居る暇が無い。そこで出立の折り家人に對し「此の條約が立派に出来るまでは、如何なることが家に起つても、假令此の娘が死んでも知らせてよこしては困る」と堅く申付け置いて、それから馬關に行

かれた。所が段々條約の談判が進んで、モウ調印する許りといふ所まで至つた所で、或日伊藤公が陸奥さんを見ると殊に顔色が悪い。どういふ譯か。段々談判が片附いて調印する許りであるから、喜ばしい譯であるのに、今日に限つて顔色の悪いのはどうしたことであると不審されると、陸奥さんは、「實は調印といふことが新聞に傳へられて、それを家のものが見たものか、最早娘の病氣も命旦夕に通つて居る、一日も早く歸つて呉れ、娘が存命中にモウ一目お目に掛りたいといつて居るといふことを申越した。それが氣掛りになる」と答へました。伊藤公が、「さういふことならこちらら最早印を押す許りであるから、早速歸つたら宜からう」と言はれると、「いやさうでない、出る時に調印が終らなければ歸らないと言ひ遣してある、自分はさういふ決心であるから、此の一大事が終らなければ歸らない」といつて、肯かなかつた。其の内に調印が済んだので、早速歸つて見ると、最早お嬢さんは丸で死に瀕して居る状態である。そこで枕許に行つて段々慰めて看護して居ると、お嬢さんが斯ういふことを言ひ出した。「お親父さんにお尋ねしたいが、私は醫者が何と言はうが、もう死の決心をしました、さて決心はしたが死んでどうなるものでありませうか」と言はれた。もう一遍云つて見ると、死んで何所に行くのであらうかと、斯ういふことを御自分で陸奥さんに訊ねた。あの人は有名な辯者ではあつたが、其の間に對しては何としても返事が出来ない。これが田舎の爺さん婆さんならば、氣休めを言つても済むのであるが、お前が死んだら阿彌陀佛の傍へ行けるとか何とか氣休めも言へるの

であるが、最愛の一人娘の死に對してさうは言へない。さつぱり答へることが出来ぬで大に窮せられた。其の時餘り考へた。自分は政治界に身を起して、幾十年の間色々やつて来た。又權力の點からいつても富の點からいつても名譽の點からいつても、色々俗世界の望みは略ぼ達して居るが、今娘の死に臨んでの間に對して答が出来ないことを思ふと、今までのことは夢見たやうなものである。今日其のことを顧みると實に馬鹿氣たことである。どんな立派なことをしても、それは俗世界のことには過ぎない、精神界のことは又別問題であると、色々考へた末に、流石は陸奥さんの答である。「それは尤もの話であるが、お父さんにはどうなるか分らない。只だお前も知つて居る通り、お前のお母さんが此の病氣以來、毎日〳〵観音様を信心して居る。殊に月の十四日十七日には參詣をして、最愛の娘の死ぬのも生きるのも観音様にお任せしたと、私にもさういつて信心して居る。我々親としては、其の通りお前の死ぬも生きるも大慈大悲の観音様にお任せして、それで安心して居る、それより外に仕様が無い」といつたので、お嬢さんは死にかけて居るけれども、洵に顔色まで好くして、それは有難いといつて思はず観世音菩薩の名號を唱へたのであるが、間も無く此の世を去つて仕舞はれた。これは事實譚である。さういふ風に苦惱死厄の時に臨むと、人間の本當のことが現はれるものであるが、それを平生現はすやうにしなければならぬ。先程いふた先天内容の聲、白隠禪師の隻手の聲といふのは何の爲めであるかといふと、さういふ場合に臨んでびくともしない心を鍛鍊する爲めの修行である

これはお互ひに餘所事ではない。此の苦惱死厄の時に臨んで、觀世音菩薩は能く爲めに依怙をなし給ふ。丸で赤ん坊が何よりも自分の母親を大事に思ふて居るやうに、殊に子に取つては、赤ん坊の時代に何が一番權威があり何が一番有難いかといふに、親程有難いものはない。丁度其の通り、子が親に寄り掛つて居るやうに、我々凡夫が觀世音菩薩を念ずる時は、觀世音菩薩は能く爲めに依怙をなし給ふ。其の觀世音菩薩は「一切の功德を具して、慈眼もて衆生を視給ふ。」其のことは前に述べたことが皆茲に引掛つて来る。有らゆる功德を具へて居るといふことが何所に當るかといふと、皆大慈大悲の中に来る。どうぞして苦しみを脱れさせたい、どうぞして樂しみを與へたいと、此の誓願の中に一切の功德を具へて、而して慈悲の眼を以て衆生を視給ひ、これは可愛これは憎いと分け隔て無く、皆な精神的に我が生みの子の如くに御覽になる、さういふ有様であるから、「福聚海の如く無量なり」といふ。其の聚の字は鈴生りに物のなつて居る時に使ふ字である。無量なる福、無量なる徳、實に譬へていへば海の邊際無く測り知れない程に廣大無邊なる所の福である。と斯う信ずるので、「是の故に應さに頂禮すべし——此の貴とき頭をも下げて觀世音菩薩の足下に禮拜せよと斯ういふ。もう世の中が段々進んで行くと、觀世音菩薩に限つたことではないが、兎に角も自分の心の中に一つの守り本尊が無ければならぬ。其處に洵に純潔なる雜り氣の無い精神的光りを放つて居らなければならぬ。殊に自分の位が高くなればなる程、身分が樂になればなる程、精神上世間の外のものよりも、高き望みを達しよう

快樂を得ようとするのが常である。心の上に樂みが無いから、遂に物質的、肉體的の樂みを求めるやうになつて、それが誤りの本となつて色々のことになつて行くのである。自分一人の善行は一家族の善行ともなり、推し擴めれば社會全體の善行ともなるべき徳を具へて居るのである。悪いことも其の通りで、自分獨り勝手にするのであるから、人の御厄介にならぬといふのは淺墓の考である。聊かの罪科を犯しても、それが自分の親子兄弟一家内は勿論のこと、推し擴めれば社會一般に影響を與へるので、丁度水の中に小さい波紋が出来れば、それが段々遠方に波及するやうなものである。或時昔の或大名の領内に於て、大變立派な鯉が捕れた、目の下三尺か四尺もあるやうな大變珍しい鯉が捕れたのである。それを人民が殿様に献上した處が、これは大變珍しいといふて、勿論さういふ活きたものであるから、大きな盥を作つて水を滿々と注いで、其の中に泳がして殿様が御覽になつた。大變珍しいからせめて一家中に見せてやりたいと、殿様からお觸れが出た。そこで藩中のものが皆々容姿を改めて、袴を着て殿様の御前に出て來ると、「外でもない斯ういふものを領民から献上したから、皆見ることがよい」とあつて、盥を其處へ出された、見ると、果して立派な鯉が盥の中に悠々として泳いで居る一同は之を見て驚嘆して居る許りであつたが、其の時殿様の云はれるには、「此の中に誰か扇を持つて居るものは無いか。持つて居る者は此の鯉の頭を叩いて見よ」。何の意味であるか分らないので、御互に顔を見合せて居ると、家中で最も名高い所の擊劍の先生が、それなら私が叩いて見ませうと、扇を

右の手に堅く握つて、力一配叩いたから、驚いたのは鯉である。もう涼しくて好い、日は永いし風は吹くし水は冷たいしと、我一人の世界のやうに悠々と泳いで居る所へ、不意打ちにぐわんと喰はされたので、大に驚いて跳ねたから、其の跳ね汁が一生懸命に頭を集めて眺めて居る大勢のものに振り掛つた、他行の袴が皆な水だらけになつて仕舞つた。處が殿様は一向平氣な顔附きである。「いや今日は大變良い教訓を得た、私如めも前達も得たであらう。活きた教訓を得たであらう。假初にも我々が不善をなし亂暴をしたならば、其の科が我一身に止まらず、一國にも禍ひを及ぼすだらう。若し一家の首長が亂行をするといふ有様であつたなら、獨り主人一人に止まらず、親子兄弟一家族皆な禍を被るのである。」——それを衛生的に眺めて見ると、例へば流行病の如きも、其の一人の災難ではなく、延いて一家内一町村に禍を及ぼす——「今日は洵に活きた教訓を得た。鯉が跳ねたわけであるが、前達は飛沫を蒙つた。此處を平生能く心掛けなければならぬ」と、殿様が一同を誡められたといふ話がある。さういふことは調べて見ると社會に澤山あらうと思ふ。偶々一家の主人たるものが、或る恐るべき罪惡を犯した爲めに監獄に囚はれた。處が残つた妻がそれを心配して、遂に氣が狂つて仕舞つて、自分は赤い坊を殘して鐵道往生を遂げたといふやうな話が、澤山新聞に出て居る。それから最愛の如く餘所に嫁入りさせて、其の親が不心得をして大變な罪惡を犯した爲めに、遂に罪せられることになつたから、娘は嫁入り先きの親から斷はられた。あゝいふ罪人の娘を我が媳にはして置けな

いといふので、娘が里に歸つて見ると、親は監獄に行つて居る、而も自分は懐胎して居つて始末に窮するといふやうなことがある。さういふことが世の中に澤山ある。又最愛の娘であつたが、それが遂に不義のことをした爲めに、其の爲め親も面目を失ひ、榮職を捨て家名を毀けるのみならず、動もすると社會の風教にも影響することが世間に無いではない。さういふ人は平生何か信仰でも有つて居るか、何等か宗教心を有つて居る人であるかといふと、さういふことは極めて稀である。平生憧憬して居るのは唯だ虚榮のみ、唯だ金錢のみ。表面は幸福のやうに見えて、貧乏人から見れば美ましいと思ふであらうけれども、實は何方が仕合せであるか分らない。寧ろ我々のやうな世間外れの人間から見ると、さういふ富貴の家に生れるのが仕合せか、貧乏の家に生れるのが仕合せかは疑問である。何方とも團扇を上げることが出来ない。さういふ時に宗教心を早く心に喚び起して、世の中を樂々と暮らしたら、さういふ難儀なことはあるまい。唯だ此の場合に望む所は、偽らざる所の心の現はれである。宗教心の現はれである。偽はらざる所の心とは誠の心に外ならない。此の心は天にも通じ地にも通ずる。そこで觀世音菩薩は慈眼を以て衆生を視給ひ、福の聚まること海の無量なるが如し、此の故に應さに頂禮すべしと斯ういふ。

今申した所までを正宗文といひ、此の後を流通文と斯ういふ。「爾の時に持地菩薩即ち坐より起ち」——持地菩薩といふのは、世間で能くいふ地藏菩薩のことである。地藏菩薩といふのは慈悲心を以て

一切衆生に代つて苦しみを受けるのが本願である。それが大勢の居士の座より起つて、前んで佛に申していふに、世尊よ、若し衆生あつて是の觀世音菩薩品の自在の業、普門示現神通力を聞かば——自在の業といふは、初めに申した通り七難、三毒は之を免れしめ、二求といふて二つの求めるものを得させる、此れが自在なる觀世音菩薩の仕業である。それから普門示現神通力といふのは、洩らさず餘さす一切のものを、前から來ても後ろから來ても何方か來ても、悉く救ひ取つて逃さないと斯ういふ。それが即ち大體からいふと、三十三身、十九說法の神通力である。只だ三十三、十九といふ數に限られたのではない。無量無邊有らゆる變化が之に籠つて居る。それが普門示現の神通力といふのである。これが冥益、顯益といふて、冥々の中に現はれることがあり、明らかさまに現はれることがある。自在の業が冥益で普門示現が顯益である、皆それか茲に含んである。さういふ自在の業、普門示現神通力のあり方である。「若し衆生あつてそれを聞く者は、當さに知るべし是の人の功德少なからず」——一心に之を聞くといふことも功德少くない、それすら知らない人が世間に澤山ある。茲にまだ段々いふべきこともあるけれども、今日は先づさつと云ふて置ませう。

「佛是の普門品を説き給ふ時、衆中八萬四千の衆生、皆々等々阿耨多羅三藐三菩提心を發しき」——これからは阿耨尊者の言葉である。總ての經文を結修せられた方で、今ならば編輯長見たいな阿耨尊者が、此の言葉を添へられたのである。佛がこの普門品を述べられた時、八萬四千の衆生——これ

も理釋といふ道理的解釋から見ると、八萬四千といふのは數多の數といふ許りではない。我々の精神界に於ける所の八萬四千の妄想煩惱と斯う見て宜い。今事實として見ると、八萬四千の衆生が皆々無等々阿耨多羅三藐三菩提心を發したといふ。無等々など、斯ういふ熟字は分り難いが、較べものも無いといふことで、言ひ直すと佛と斯ういふ。釋迦、世尊其他の名では較べるものが段々あるかも知れぬが、佛だけは三界の大導師であるから較べものが無い。處が此の無等々といふのは其の佛に均しいといふので、我々と雖も皆な佛に等しい所の阿耨多羅三藐三菩提心を發するといふ。阿耨多羅三藐三菩提心といふのは原語であるが、それを譯すると、阿耨多羅といふのは無上——此の上も無いと斯ういふ。三藐といふのは正等——正しく等しい。三菩提といふのは正覺——正しく覺る。即ち續けていふと無上正等正覺と、斯ういふ鹽梅に翻譯して居る。御經に依つては無上正等正覺とあつて、覺の字を品として居るものもあるが、どつちでも宜い。つまり眞の佛の悟りと斯ういふ。悟つた所の佛の境涯と斯ういふ。これは佛か獨り之を得られたのみならず、觀世音菩薩の御說法を聽聞し、觀世音菩薩の大慈大悲の御手に救ひ上げられたものは、如何なる凡夫も悉く阿耨多羅三藐三菩提心——佛と同じ心を得られる。其の菩提心を此に現はすと斯ういふのであります。

觀音經講話終

大正七年十二月五日印刷
大正七年十二月八日發行

觀音經講話

定價貳圓貳拾錢



著作者 釋宗演

發行者 婦人道話會

右代表者 今立裕

印刷者 小泉重助

發行所

東京市神田區駿河臺袋町一番地
振替口座東京二三一三番
電話神田二九九九番

光融館

佛敎專門書肆 光融館藏版目錄

東京、神田、袋町一
 電話本局二九一九番
 振替東京三三三番

川尻資岑居士著	釋雲照律師著	齋藤唯信師著	元良勇次郎著	山田孝道師著	釋宗演禪師著	山岡鐵舟居士述
忠孝道話	教育の本義	佛敎倫理大觀	教育と宗教との關係	佛敎のすゝめ	佛敎家庭講話	武士道
郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價
六拾錢	四拾五錢	貳拾五錢	貳拾五錢	七拾錢	八拾五錢	六拾錢

掛東正彦先生編
安部正人先生編
釋宗演禪師著
川尻實岑居士著
原僧運老師著
勝峯大徹禪師著
釋宗演禪師著
瞎驢庵主人編
島田春浦師著

海舟言行錄
鐵舟言行錄
評靜座のすゝめ
坐禪の捷徑
禪學早わかり
禪と長壽法
一字不說
公案四百則
禪堂生活

郵定稅價 八拾錢
郵定稅價 八拾錢
郵定稅價 八拾錢
郵定稅價 八拾錢
郵定稅價 四拾五錢
郵定稅價 四拾錢
郵定稅價 四拾錢
郵定稅價 六拾五錢
郵定稅價 二拾五錢
郵定稅價 六拾錢

山上天川師記
若生國榮師著
山田孝道師著
若生國榮師著
田中仙樵師著
原僧運老師著
織田得能師著
森大狂居士參訂
禪學編輯局參訂

點日置
破草鞋
活禪談
殺活自
單刀直入
茶禪一味
一味の禪旨
佛教金言集
一休和尚全集
白隱和尚全集

郵定稅價 八拾錢
郵定稅價 八拾錢
郵定稅價 四拾錢
郵定稅價 四拾錢
郵定稅價 四拾錢
郵定稅價 四拾錢
郵定稅價 四拾錢
郵定稅價 四拾錢
郵定稅價 八拾錢
郵定稅價 八拾錢

釋悟庵師編	松尾礫天著	白隱禪師著	森大狂居士參訂	森大狂居士參訂	禪道會編輯局編	禪道會編輯局編	山田孝道老師編	曹洞宗務局編
坦山和尚全集	一休逸話集	ねぼけのめざまし	禪林叢書	禪林叢書	夜船閑話	東海夜話	禪門法語集	修證義說教大全
郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價
壹圓七拾錢	八拾錢	二八錢	四拾五錢	四拾五錢	四拾五錢	四拾五錢	拾貳錢	八壹錢

松本覺本師編輯	三上徹山居士編	高橋洪洲師編	村上專精博士著	釋雲照律師著	齋藤唯信師著	齋藤唯信師著	織田得能師著	織田得能師著
在曹洞家	在曹洞家	臨濟要經集	佛敎概論	佛敎通論	三經の大綱	七祖の大綱	八宗綱要講義	大乘起信論義記講義
郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價
貳拾貳錢	四拾五錢	四拾五錢	八拾錢	壹圓參拾錢	參拾五錢	五拾錢	壹圓五拾錢	壹圓八拾錢

織田得能師著	前田慧雲博士著	島地大等師著	織田得能師著	島地默雷師著	織田得能師著	釋雲照律師著	釋慶淳師著	岩上行坡師著
天台四教儀講義	天台西谷名目講義	十不二門論講義	七十五法名目講義	維摩經講義	法華經講義	十善業道經講義	即身成佛義講義	通俗真宗綱要
郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價
六拾五錢	六拾錢	八拾五錢	八拾五錢	八拾錢	八拾錢	八拾錢	八拾錢	六拾錢

六

芳賀矢一博士譯	前田慧雲博士著	吉谷覺壽師著	島地默雷師著	齋藤唯信師著	近角常觀師著	香月院講師述	皆往院講師述	道重信教師著
口譯御文章	正信偈講義	阿彌陀經講義	觀無量壽經講義	大無量壽經講義	歎異鈔講義	教行信證講義	眞佛土化身土卷講義	淨土往生論講義
郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價
八拾錢	四拾錢	四拾錢	八拾錢	八拾錢	八拾錢	參拾貳圓	六圓五拾錢	五拾錢

七

南條文雄博士著	齋藤唯信師著	村上專精博士著	姬宮大圓師著	龜谷天尊師著	山田孝道師著	若生形山師著	大內青巒居士著	大內青巒居士著
梵文金剛經講義	俱舍宗大講義	因明三十三過本作法講義	大乘止觀頌講義	金獅子章講義	菜根譚講義	父母恩重經講話	原人論講義	四十二章經講義
郵定稅價 壹圓貳拾錢	郵定稅價 七拾五錢	郵定稅價 六拾錢	郵定稅價 參拾五錢	郵定稅價 四拾錢	郵定稅價 壹圓參拾錢	郵定稅價 貳拾貳錢	郵定稅價 六拾錢	郵定稅價 四拾錢

山田孝道師著	大內青巒居士著	大道長安師著	白隱禪師著	大內青巒居士著	釋宗演禪師著	天桂禪師提唱	釋宗演禪師著	勝峯大徹禪師著
佛遺教經講義	般若心經講義	觀音經講義	十句觀音經靈驗記	碧巖錄講義	碧巖錄講話	無門關講義	臨濟錄講義	
郵定稅價 參拾五錢	郵定稅價 四拾錢	郵定稅價 九拾錢	郵定稅價 六拾錢	郵定稅價 六拾錢	郵定稅價 四拾四錢	郵定稅價 參拾六錢	郵定稅價 九拾錢	郵定稅價 八拾錢

嚴密校正縮刷	山田孝道師著	山田孝道師校訂	釋道叢書第一編 釋宗演禪師著	鈴木道叢書第二編 鈴木道叢書第二編	山田道叢書第三編 山田道叢書第三編	日置道叢書第四編 日置道叢書第四編	菅原道叢書第四編 菅原道叢書第四編	日置道叢書第五編 日置道叢書第五編
大乘起信論義記	禪林香語集	宗曹洞聖典	世の	禪の立場から	禪と日常生活	悟つてから	禪のはらわた	悟つてから
郵定 四拾五錢	郵定 壹圓五拾錢	郵並上製 壹圓貳拾錢	郵定 八拾五錢	郵定 八拾錢	郵定 八拾錢	郵定 八拾錢	郵定 八拾錢	郵定 八拾錢

釋宗演禪師著	足立栗園居士著	釋悟一庵師著	國府犀東居士編輯	川上孤山師編	前田慧雲博士述	島地大等師編	曹洞宗新進大家執筆
禪海一瀾講話	偉人參禪錄	禪と武士道	眞淨老師御遺稿 荆棘錄	禪脈發展圖	那先比丘經講義	歎異鈔講本	曹洞禪講義
郵定 貳圓五拾錢	郵定 八拾五錢	郵定 六拾五錢	實價 壹圓八拾錢	郵定 貳拾五錢	郵定 五拾五錢	郵定 貳拾五錢	洋裝美本全十冊 郵定 貳拾六圓

本講義は曹洞宗必須の宗乘餘乘三十科目を宗意、祖錄、教相、史傳、教材等に依り配分して全十冊に編み本年二月より毎月一冊刊行す入會金壹圓一月會費貳圓拾錢送料拾貳錢詳細郵券二錢にて見本付規則書送る

文書傳道用書の部

(三十部以上より割引あり御照會を乞ふ)

澤柳政太郎訓譯	釋雲照律師訓譯	釋雲照律師訓點	釋雲照律師著	會長 釋宗演禪師	主幹 鈴木大拙居士	主筆 山田孝道師
訓譯遺教經	訓譯原人論	訓點十善業道經	法の鏡	會長の鏡	主幹の鏡	主筆の鏡
郵定 二五錢	郵定 二八錢	郵定 二五錢	郵定 二四錢	郵定 二四錢	郵定 二四錢	郵定 二四錢
釋宗演禪師著	山田孝道老師著	光融館編輯局編	光融館編輯局編	光融館編輯局編	光融館編輯局編	光融館編輯局編
靜坐のすゝめ	修養座右銘	偉人の感化	曹洞教會修證義	觀音	經和訓附	經和訓附
郵定 二七錢	郵定 二五錢	郵定 二四錢	郵定 二五錢	郵定 二五錢	郵定 二五錢	郵定 二五錢
釋宗演禪師著	山田孝道老師著	光融館編輯局編	光融館編輯局編	光融館編輯局編	光融館編輯局編	光融館編輯局編
每月一回五日發行	每月一回五日發行	每月一回五日發行	每月一回五日發行	每月一回五日發行	每月一回五日發行	每月一回五日發行
一ヶ年前金壹圓五十錢	一ヶ年前金壹圓五十錢	一ヶ年前金壹圓五十錢	一ヶ年前金壹圓五十錢	一ヶ年前金壹圓五十錢	一ヶ年前金壹圓五十錢	一ヶ年前金壹圓五十錢
每月一回八日發行	每月一回八日發行	每月一回八日發行	每月一回八日發行	每月一回八日發行	每月一回八日發行	每月一回八日發行
一ヶ年前金四十八錢	一ヶ年前金四十八錢	一ヶ年前金四十八錢	一ヶ年前金四十八錢	一ヶ年前金四十八錢	一ヶ年前金四十八錢	一ヶ年前金四十八錢

月刊誌 修養

月刊誌 禪道

324
586

終

